

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第124集

菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群

平成9・11・12年度 掛川東高等学校移転整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

【正誤表】

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第124集
菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願い致します。

頁	誤	正
10頁 上から8行	(図3)	(図4)
19頁 上から11行	(第65図4)	(第60図4)
34頁 下から5行	(図22)	(第22図)
42頁 上から8行	(第65図6)	(第60図6)
	(第66図21)	(第61図21)
54頁 下から10行	砥石 (第65図30)	砥石 (第62図30)
70頁 上から12行	(第53図3)	(第53図3：図版41)
70頁 上から14行	(第52・53図：図版39)	(第52・53図：図版40)
96頁 キャプション	第67図 山ノ口3号墳実測図	第67図 山ノ口3号墳出土遺物実測図
98頁 上から4行	(第67～72図)	(第69～72図)
101頁 表6 図版番号	70	71
	71	72
105頁 表内下から9行	●	鎌
116頁 上から2行	(第67図34：図版39)	(第62図34：図版42)
116頁 上から4行	(第68図37・38：図版39)	(第63図37・38：図版42)
報告書抄録	菖蒲ヶ谷遺跡特記事項追加	転用土器・筋砥石・鉄鎌・鎌



遺跡遠景（南西より）

序

本書は、掛川東高等学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財調査の報告書である。

掛川は江戸時代に整備された東海道五十三次の江戸日本橋から 26 番目の宿場であり、掛川藩の城下町として発展してきた。交通の便がよいことは現代も変わりなく、さまざまな開発の波が押し寄せ、多くの遺跡が破壊の危機にさらされている。

そのような中、静岡県立掛川東高等学校の移転整備事業という教育行政の一環であることも手伝い、関係各機関の多大なるご協力が得られ、しっかりとした体制で調査することができたことは幸いである。夏の酷暑、からっ風吹きすさぶ冬と 1 年間を通じて危険な丘陵上での作業に従事した作業員・調査員を含め、関係諸氏には感謝の意を表したい。

この菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群の発掘調査における特筆すべき成果は弥生時代後期から古墳時代前期の集落である。従来このような細い尾根上に集落があるとは考えられていなかった。今回の調査にあたっても古墳を想定した確認調査において集落の存在が認められたのである。近年は掛川市周辺でもいくつかの類似の遺跡が調査されているが、調査対象面積 8,000 m²以上、26 耘の堅穴住居跡とこれだけまとまった面積・軒数を調査した例はない。しかもその集落の継続期間は比較的短く歴史の「瞬間」を想像させるのには十分である。弥生時代から古墳時代へと時代の大きな変換点である時期に細い尾根の上に 20 耘近い堅穴住居が点在しているという集落の姿が現代によみがえってきたのである。

古墳時代とはその名の通り地域ごとの権力者が巨大な古墳を築いた時代である。古墳に葬られる人がいる反面、葬られることのない多くの人々が生活していた。そのような人々の生活を知ることによって初めて当時の社会を理解することができるのであり、今回の調査結果はそのための貴重な資料となるであろう。

菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群の発掘調査・報告は本書において一応の終了となるのだが、今後の課題は尽きることはない。さらなる調査・研究が行われ続けていくことを願ってやまない。

2001 年 3 月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は、静岡県掛川市久保に所在する菖蒲ヶ谷遺跡および山ノ口古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は掛川東高等学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財調査として、静岡県教育委員会財務課の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会の協力を得て、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 調査は、平成8年に実施された掛川市教育委員会の踏査に基づき、平成9年度に確認調査を、平成11年度に現地発掘調査を実施した。また平成12年度に整理作業を行った。
4. 調査体制は次のとおりである。

平成9年度（確認調査）

所長 斎藤 忠	副所長 池谷和三	常務理事 三村田昌昭
調査研究部長 石垣英夫	調査研究部次長 栗野克巳	
調査研究三課長 渡瀬 治	調査研究員 長谷川睦・竹原一人	

平成11年度（本調査）

所長 斎藤 忠	副所長 山下 晃	常務理事 伊藤友雄
調査研究部長 佐藤達雄	調査研究部次長 佐野五十三	
調査研究二課長 遠藤喜和	主任調査研究員 加藤理文（8～3月）	
	調査研究員 大庭 宏（4～7月）・藏本俊明	
	松下喜和（相良町より研修）	

平成12年度（資料整理）

所長 斎藤 忠	副所長 山下 晃	常務理事 伊藤友雄
調査研究部長 佐藤達雄	調査研究部次長 及川 司	
調査研究部資料課長 大石 泉	調査研究員 藏本俊明	

5. 本書の執筆は藏本が行った。
6. 石材鑑定は静岡大学名誉教授・伊藤通玄氏に行っていただいた。
7. 自然科学分析は株式会社ジェネティックに依頼し、その結果報告を掲載した。
8. 遺構全体図・住居跡実測図・遺物出土状況図・石器実測図のトレースは株式会社フジヤマに委託した。
9. 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
10. 発掘調査の資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。
11. 発掘調査及び報告書作成に当たっては、掛川市教育委員会・静岡県立掛川東高等学校・静岡県総合管理公社の方々には特に御協力いただいた。深く感謝する次第である。

また、以下の方々から多くのご教示・ご指導をいただいた。記して厚くお礼申し上げたい。（敬称略・五十音順）

井村広巳 大熊茂広 長田友也 笠井信孝 加納俊介 齋藤基生 佐藤由紀男 篠原和大 柴田稔
濱谷昌彦 鈴木一有 竹内直文 塚本和弘 中嶋郁夫 平野吾郎 前田庄一 松井一明 松本一男
水野正好 向坂鋼二 村松弘規

凡例

1 資料整理及び本書で使用した略号は次のとおりである。

《遺構》

S B 壓穴住居跡

重複している住居の場合、古い方に A、新しい方に B を数字の後に付けて示した。

(例 S B 05A - 古、S B 05B - 新)

P 壓穴住居に伴うピット・土坑

S F 土坑

S P ピット

S X 不定型遺構

《遺物》

P 土器（本書内では遺物番号のみで表示）

S 石器・石製品・石（F 剥片）

M 鉄製品

N 自然遺物（炭化物・炭化材・土壤サンプル）

2 実測図のスクリーントーン等での表現は以下の通りである。

遺構・遺物

	遺構	遺物（土器・石器）
	炉・焼土	被熱

石器

	タタキ	スリ	トギ
範囲			
面	-----	- - - -	-----

目 次

序	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第1節 位置と自然的環境	2
第2節 歴史的環境	6
第3節 調査の方法と経過	9
(1) 基本層序	9
(2) 調査の方法	10
(3) 調査経過	12
第Ⅲ章 調査の成果	16
第1節 遺跡の概要	16
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の集落	19
(1) 遺構・遺構出土土器	19
A区。B区。C区。E区。G区。H区。	
(2) その他の遺物	75
遺構外出土土器。石器・石製品。鉄製品。	
第3節 山ノ口古墳群	95
(1) 山ノ口3号墳	95
(2) 山ノ口4号墳	97
第4節 その他の時代の遺構と遺物	98
(1) 烧土・須恵器	98
(2) 烧壁土坑（S F 01）	102
(3) 山茶碗	102
第Ⅳ章 まとめ	103
第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の集落	103
(1) 集落の分析	103
(2) 土器の転用について	103
(3) 遺物の出土位置からの住居内空間の復原	112
(4) 住居内土坑について	114
(5) 玉作について	116
第2節 烧壁土坑（S F 01）	118
第3節 総括	119
参考文献	
付編 萩蒲ヶ谷遺跡出土遺物の自然化学分析	123

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺地形図	5
第3図 逆川・原野谷川流域の主要遺跡地形図	7
第4図 グリッド配置図	11
第5図 遺構全体図	17
第6図 S B01・S D01実測図	20
第7図 S D01遺物出土状況図	21
第8図 遺構出土土器実測図（S B01・S D01）	21
第9図 S B22実測図	22
第10図 S B02実測図	23
第11図 遺構出土土器実測図（S B02）	24
第12図 ピット列実測図	25
第13図 遺構出土土器実測図（ピット列）	25
第14図 S B03・S D02実測図	27
第15図 遺構出土土器実測図（S B03）	29
第16図 遺構出土土器実測図（S B03）	30
第17図 S B04実測図	32
第18図 遺構出土土器実測図（S B04）	33
第19図 S B05A・B実測図	35
第20図 S B05A遺物出土状況図	36
第21図 遺構出土土器実測図（S B05A）	37
第22図 S B05B遺物出土状況図	39
第23図 遺構出土土器実測図（S B05B）	40
第24図 遺構出土土器実測図（S B05B）	41
第25図 遺構出土土器実測図（S B05B）	42
第26図 S B07・S X01実測図	43
第27図 遺構出土土器実測図（S B07・08）	44
第28図 遺構出土石器実測図（S B07）	45
第29図 S B08実測図	46
第30図 S B09実測図	48
第31図 S B10A・B実測図	49
第32図 S B11実測図	50
第33図 遺構出土土器実測図（S B10A・10B・S B11）	51
第34図 S B12実測図	52
第35図 S B19実測図	53
第36図 遺構出土土器実測図（S B19）	54
第37図 S B13A・B実測図	55
第38図 遺構出土土器実測図（S B13A・13B）	56

第39図	S B14実測図	57
第40図	遺構出土土器実測図（S B14）	58
第41図	S B18実測図	59
第42図	遺構出土土器実測図（S B18）	60
第43図	遺構出土石器実測図（S B18）	61
第44図	S B15実測図	62
第45図	遺構出土土器実測図（S B15）	63
第46図	S B16実測図	65
第47図	S B17実測図	66
第48図	遺構出土土器実測図（S B16・17）	67
第49図	S X02実測図	68
第50図	遺構出土土器実測図（S X02）	69
第51図	S B20実測図	71
第52図	遺構出土土器実測図（S B20）	72
第53図	遺構出土石器実測図（S B20）	72
第54図	S B23実測図	73
第55図	S B21実測図	74
第56図	遺構出土土器実測図（A区）	75
第57図	遺構出土土器実測図（B区）	76
第58図	遺構出土土器実測図（C区・D区）	77
第59図	遺構出土土器実測図（E区・G区）	78
第60図	石器実測図（敲石・磨石）	87
第61図	石器実測図（敲石・磨石・砥石）	89
第62図	石器実測図（砥石）	90
第63図	石器・石製品実測図（不明石器・石棒）	92
第64図	鉄製品実測図	94
第65図	山ノ口3号墳実測図	95
第66図	山ノ口3号墳主体部実測図	96
第67図	山ノ口3号墳出土遺物実測図	96
第68図	山ノ口4号墳実測図	97
第69図	21R焼土実測図	99
第70図	16F焼土実測図	100
第71図	須恵器実測図	100
第72図	須恵器実測図	101
第73図	焼壁土坑（S F01）実測図	102
第74図	山茶碗実測図	102
第75図	堅穴住居单位群模式図	106
第76図	堅穴住居面積比較図	109
第77図	堅穴住居平面形指數比較図	109
第78図	転用土器觀察図	111
第79図	土器出土位置模式図	113

第80図	S B03住居内土坑実測図	114
第81図	住居内土坑出土土器実測図	114
第82図	下谷地遺跡出土石器実測図	116
第83図	弥生中期～古墳中期集落分布図	121

挿表目次

表1	遺跡地名表	2
表2	平成11年度現地発掘作業工程表	12
表3	弥生土器・土師器観察表	79
表4	石器観察表	93
表5	鉄製品観察表	94
表6	須恵器観察表	101
表7	竪穴住居一覧表	104
表8	竪穴住居変遷表	107
表9	住居内土坑一覧表	115
表10	玉作関連遺物出土状況一覧表	117

図版目次

巻頭図版 1 遺跡遠景

図版1	遺跡遠景
図版2	遺跡周辺地形
図版3	調査前風景
図版4	A・B区垂直写真 A区北空中写真
図版5	S B01・S D01完掘状況 S D01遺物出土状況 S B22完掘状況
図版6	A区南・B区空中写真 S B02完掘状況
図版7	S B03・S D02完掘状況 S B03遺物出土状況1・2・3・4
図版8	C区垂直写真 C区空中写真
図版9	S B04完掘状況 S B04遺物出土状況1・2
図版10	S B05A・B完掘状況 S B05A粘土炉 S B05A遺物出土状況
図版11	S B05B遺物出土状況1・2・3・4
図版12	S B07・S X01完掘状況 S B07遺物出土状況 S X01土層断面
図版13	S B08完掘状況 S B08遺物出土状況
図版14	E区北垂直写真 E区北空中写真
図版15	S B09完掘状況 S B10A・B完掘状況

- 図版16 S B11完掘状況 S B12完掘状況
- 図版17 S B19完掘状況 S B19遺物出土状況1・2
- 図版18 E区南垂直写真 E区南空中写真
- 図版19 S B13A・B・S X02完掘状況 S X02遺物出土状況
- 図版20 S B14完掘状況 S B14遺物出土状況
- 図版21 S B18完掘状況 S B18遺物出土状況
- 図版22 S B15完掘状況 S B15遺物出土状況
- 図版23 S B16完掘状況 S B16遺物出土状況
- 図版24 S B17完掘状況 S B17遺物出土状況
- 図版25 G・H・I区垂直写真 G・H・I区空中写真
- 図版26 S B20完掘状況 S B21完掘状況
- 図版27 S B23完掘状況 S B20粘土炉 S B20粘土炉断面 S B20遺物出土状況
S B21焼土断面
- 図版28 山ノ口3号墳完掘状況 3号墳主体部断面 3号墳主体部遺物出土状況
- 図版29 3号墳主体部完掘状況 山ノ口4号墳完掘状況
- 図版30 21R焼土検出状況 遺物出土状況1・2 焼土北断面 烧土南断面
- 図版31 16F焼土検出状況 C区北須恵器出土状況 烧壁土坑(S F01)完掘状況
- 図版32 遺構出土土器 (S B03・S B05B)
- 図版33 遺構出土土器
- 図版34 遺構出土土器
- 図版35 遺構出土土器
- 図版36 遺構出土土器
- 図版37 遺構出土土器
- 図版38 遺構・遺構外出土土器
- 図版39 遺構出土土器
- 図版40 遺構・遺構外出土土器
- 図版41 遺構出土石器
- 図版42 遺構・遺構外出土石器 石製品
- 図版43 鉄製品 土器(須恵器)

第Ⅰ章 調査に至る経緯

静岡県立掛川東高等学校はその前身が明治時代にさかのばる伝統校である。明治36年(1902)掛川女子尋常高等小学校附設掛川女子校、大正2年(1913)掛川町立掛川実科高等女学校、そして大正12年(1923)には県立に移管、静岡県立掛川高等女学校として、掛川城の東、掛川市掛川の現在地に移った。その後昭和23年には学制改革により掛川第二高等学校と改称、昭和24年に組合立静岡県掛川実科高等学校と合併し掛川東高等学校となり今に続いている。これまで幾多の改称・合併などがあったもの一貫して女子校としての伝統を築いてきた。しかし平成3年度に男女共学化の方針が決定、同時に校舎移転の陳情書が県教育委員会に提出される。平成6年には共学化と移転が教育委員会によって正式決定され、翌平成7年に今回調査することになった下俣・久保地区への移転が決定した。

なお移転に先立って平成9年度には男女共学が実施されており、新校舎への移転が待ち望まれている。以下に埋蔵文化財調査に関する経過を詳しく述べる。

平成8年9月13日 移転計画の具体化に伴って、県教育委員会から掛川市教育委員会に遺跡の有無を照会、掛川市教育委員会より遺跡有りの回答。平成9年に確認調査を実施することが決定。

平成9年6月3日 現地踏査の結果、古墳の存在が想定される。

6月20日 県教育委員会財務課・同文化課・掛川市総務部人材企画課・(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の協議により、用地買収・確認調査範囲・排土処理等の事項が確認・決定。

7月1日 確認調査開始。弥生時代後期～古墳時代前期の集落と古墳の存在を確認し、9月30日に調査終了。

10月13日 財務課・文化課・研究所で協議、確認調査時には見つかっていない横穴墓の可能性が指摘され、工事時に発見される場合があることを確認。

11月6日 文化課は事業主である財務課に確認調査の結果を報告し、本調査が必要な旨を通知。

平成10年10月1日 財務課・県総合管理公社・文化課・研究所で協議を行い、以下の事項を確認・決定。
平成10年度、調整池造成工事・立木伐採。

平成11年度、調査、4月1日契約、期間1年間。

平成12年度10月より平成13年度にかけて本造成工事。

横穴が見つかった場合は再度協議。

伐採・事務所用地等確認。

10月21日 県管理公社・文化課・研究所により調整池造成に伴う工事の立ち合い。造成部分では横穴は確認されず。

平成11年3月12日 財務課・県総合管理公社・文化課・研究所の協議。伐採木の扱い・事務所用地について確認・決定。

3月15日 財務課長より文化課長に本調査の正式依頼、同日研究所に本調査の依頼。

4月1日 掛川東高等学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財発掘委託業務の契約が締結され、本調査を開始。

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と自然的環境

静岡県は旧遠江・駿河・伊豆の3国が東西に連なり、西から天竜川・大井川・富士川といった大河川が南北に流れている。北には南アルプス・富士山などの雄大な山々を望み、南には太平洋が広がるという雄大な自然と黒潮による温暖な気候に恵まれた土地である。

掛川市は旧遠江国の東部、天竜川と大井川の間にあり、遠州灘に注ぐ太田川の支流である原野谷川・逆川の上中流域である。掛川市の北部は赤石山脈の前面に当たり、標高832mの八高山を最高としてナタクマ山(667m)など500m以上の山々が点在する。山の高さは南になるに従って低くなり、一般に300m位となる。南部には標高264mの小笠山があり、その間を逆川が東から西へと蛇行しながら流れ、沖積世の平地を形成している(藤田他1981)。掛川の気候は温和・多雨多湿であり降雪はまれなところである。冬には遠州のカラッ風と呼ばれる独特の強い西~西北西の風が吹く。

菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群を中心として、「静岡県文化財地図Ⅱ」(静岡県教育委員会1989)所載の主な遺跡など周辺の状況を示したものが図1・表1である。遺跡周辺は市街地に近いために開発が激しく旧地形をほとんどとどめていない。そこで明治22年測量の地図を比較しやすいように同縮尺にして旧地形を示した(図2)。

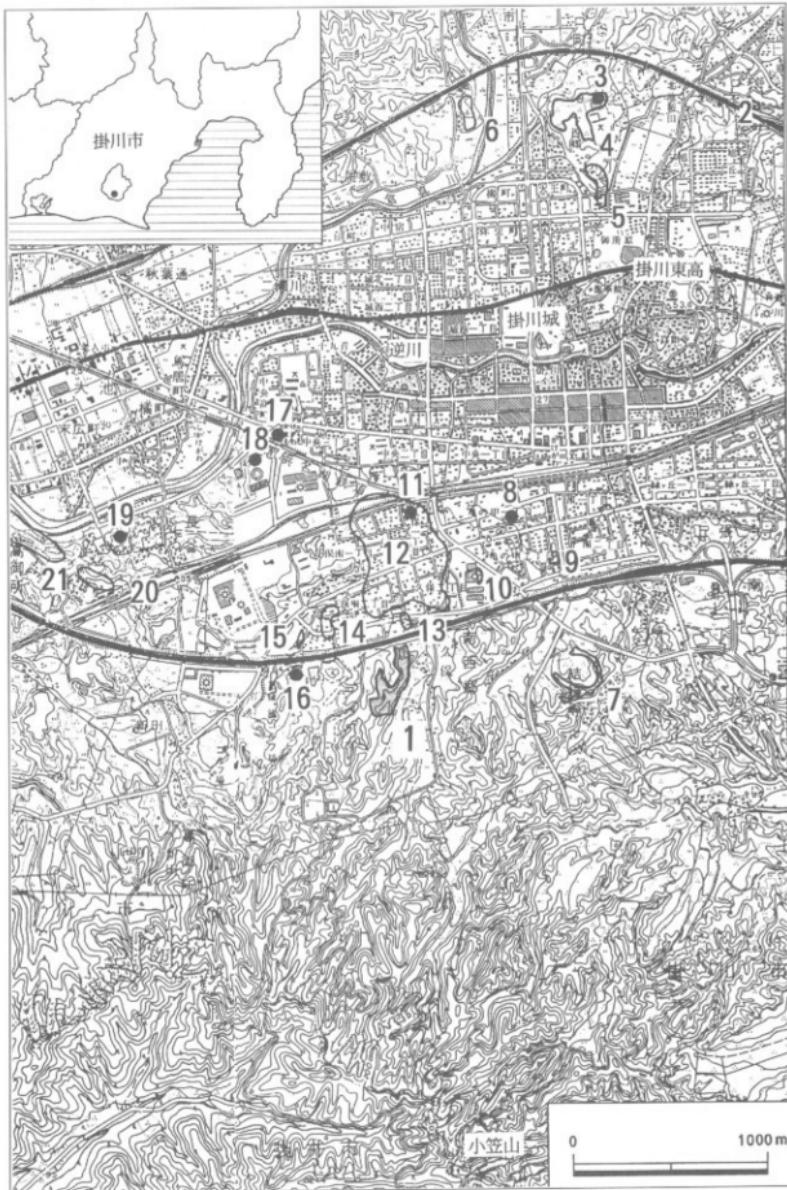
逆川は掛川の市街地を抜け西隣の袋井市に入ったところで、掛川市の西域を北から南へと流れてきた原野谷川に、さらにも南西に進んだところで太田川に合流している。逆川の川底は深くえぐられ、支川との落差が大きいことから「懸川」または「崖川」と呼ばれ、このことが掛川の地名の由来になったといわれている。

古代からの主要な街道である東海道はこの逆川に沿っていて、そのルートは国道1号線・東海道本線・東名高速道路・東海道新幹線へと受け継がれ、現在でも主要な路線は掛川市街地付近を通っている。掛川周辺はそのような交通の要衝であるため古くから城が築かれ、幾度となく戦場となっている。江戸時代には譜代大名が5万石ほどで配され、掛川藩の城下町として発展してきた。近年、掛川IC・新幹線駅が設置されると、大工場の進出、住宅地としての需要の高まり等により開発が進んでいる。

表1 遺跡地名表

(「静岡県文化財地図Ⅱ」を基に作成)

番号	遺跡名	時期	種別	番号	遺跡名	時期	種別
1	菖蒲ヶ谷遺跡	弥生(後)~古墳(前)	集落	10	久保横穴群	古墳(後)	横穴
	山ノ口古墳群 (3・4号墳)	古墳		11	権現古墳	古墳	古墳
2	大多郎遺跡	弥生(後)~古墳(前)	集落	12	元下保遺跡	弥生(中)	散布地
3	八景山古墳	古墳(中)	古墳	13	山ノ口古墳群 (1・2号墳)	古墳	古墳
4	原新田遺跡	弥生・古墳	集落	14	菖蒲ヶ谷古墳群	古墳(中)	古墳
5	天王山古墳群	古墳	古墳	15	寺ヶ谷横穴群	古墳(後)	横穴
	天王山遺跡	弥生(後)	集落	16	寺ヶ谷古墳	古墳	古墳
6	原遺跡	弥生~古墳	集落・古墳	17	山麓山根穴	古墳(後)	横穴
7	新田遺跡	古墳(前)	集落	18	宇瀬ヶ谷横穴	古墳(後)	横穴
8	一丁目古墳	古墳	古墳	19	東ノ谷遺跡	弥生(後)	集落
9	谷畠古墳	古墳	古墳	20	浅間神社古墳群	古墳	古墳
	谷田横穴群	古墳	横穴	21	前坪古墳群	古墳	古墳



第1図 遺跡位置図

今回調査の地に移転することとなった県立掛川東高等学校は、現在掛川駅の北東約1kmの小さな丘の上に位置している。すぐ北を国道1号線が走り、周囲は古くからの住宅地に囲まれている。

掛川東高校の北側丘陵上にはいくつかの遺跡が知られている。大多郎遺跡・原新田遺跡・天王山遺跡・原遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての丘陵上の集落遺跡、八景山古墳・天王山古墳群は古墳時代中期の古墳である。これらの遺跡は立地する丘陵が南斜面であるために、周辺一帯を含め早くから開発の対象となり発掘調査が実施されている。

今回発掘調査を行った菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群はJR掛川駅の南西約1kmの丘陵上、掛川市久保254-2他に所在する。

周辺は掛川市・袋井市・大東町の境である小笠山の北側丘陵地帯にあたり、小河川の浸食により尾根と谷が複雑に入り組んだ地形になっている。それらの中で掛川市中心部に向かって伸びる、標高60~75m、比高差約20mの尾根先端部近くに菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群は位置している。その尾根はきわめて細く、特に東側は急斜面となっている。

調査区は南から北へ向かって直線的に伸びる尾根とその尾根から西へ向かって分岐しているいくつかの小さな尾根からなっている。東へと分岐する細尾根もわずかに存在するが確認調査時に造構・遺物等は確認されず、調査対象からはずれている。調査以前尾根の大部分には杉が植林され、一部の西に伸びる支丘陵と緩斜面は茶畠として利用されていた。

丘陵の周辺をみると東側の谷には新和川という小川が流れている。その谷は比較的深い谷で古くから久保の集落・水田が営まれている。西側の谷は常に水を持った川は存在していない。谷底の低地には水田が作られていたが、明治初期に堤でせき止め築造された菖蒲ヶ谷池といふため池が谷奥にあることから、ため池を設けなければ水田經營が成り立たないような谷であったと思われる。

現在尾根の先端部は東名高速道路で切断されているが、かつてはさらに北側に伸びていた。その先端部付近と思われる所に、今は住宅地となって消滅してしまったが、山ノ口古墳群の1号墳と2号墳が存在していた。そのまま北、低地部分には弥生時代中期の散布地である元下俣遺跡が広がっている。付近は掛川駅に近いこともあってかなり以前から住宅地として開発されており、現在は旧地形を想像することも難しくなっている。

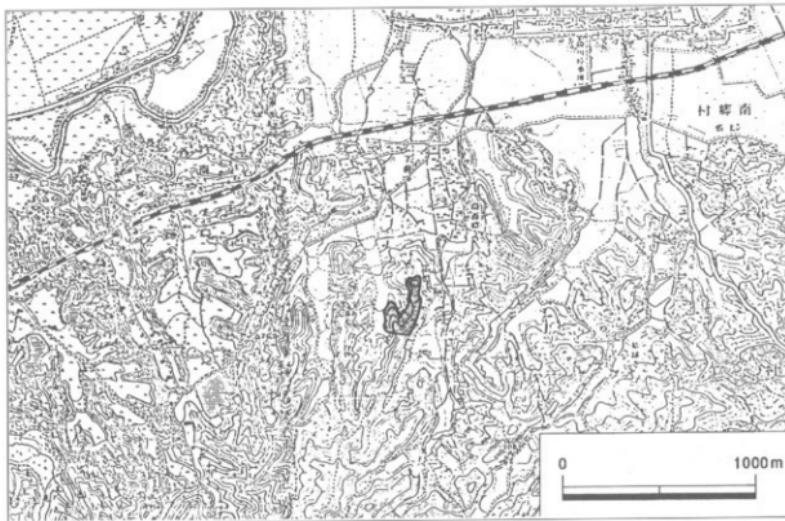
次に菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群が位置する丘陵に並行する丘陵を東から順に見ていく。

東側の丘陵も現在東名高速道路により先端が切られているが、明治22年測量の地図によるとさらに北、掛川駅近くまで尾根が伸びていた。現在残っている丘陵の標高は60~80mほどである。東名の北側、かつての尾根上・斜面には一丁目古墳・谷田古墳・谷田横穴群・久保横穴群等が遺跡地図により示されているが、いずれも現在は消滅している。その尾根のさらに東に位置する細い尾根上には新田遺跡があり、最近発見・調査されている。

西側の丘陵を見ると、現在残っている頂部は標高80mを超えており、菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群が立地する丘陵よりも高い丘陵であったことがわかる。そこには菖蒲ヶ谷古墳群・寺ヶ谷古墳・寺ヶ谷横穴群などが知られているが、こちらもゴルフ場・住宅地などにより旧地形をうかがうことができない。

さらに西側の丘陵は現在残っている限りでも標高50~60mある。今は大工場などにより丘陵はほとんど残っていないが、かつては東海道本線を超えて北へ向かって大きくせり出し、逆川を蛇行させていた。その丘陵には宇洞ヶ谷横穴・山麓山横穴・堀ノ内13号墳といった有力な墳墓が古墳時代後期に築かれているが、全く旧状をとどめていない。その西の丘陵には浅間神社古墳群・前坪古墳群が立地している。浅間神社・前坪古墳群の丘陵一端に弥生時代後期の集落である東ノ谷遺跡がある。

小笠山は掛川市街に向かっていく多くの丘陵をのばしていて、それらの丘陵には多くの古墳・横穴群



第2図 遺跡周辺地形図

が分布している。弥生時代から古墳時代の集落はわずかしか知られていないが今後発見される例は増えと思われる。今の地形からはうかがえないが、明治22年の地図によれば菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群は多くの丘陵の中でも奥まった小丘陵上に位置していることがわかる。現在遺跡からは北に掛川市街地が一望でき、空の澄み渡った日には遠く富士の峰を仰ぐことができる。その情景は弥生時代・古墳時代も同じであったろう。しかし東西はより高い丘陵に挟まれていて、南には小笠山と三方を囲まれたけつして見晴らしのいい丘陵ではなかったはずである。

第2節 歴史的環境

ここでは太田川の支流である逆川・原野谷川流域周辺の歴史について、弥生時代から古墳時代を中心に概観してみる（図3）。

この地域での人類の痕跡は原野谷川右岸、河岸段丘上の溝ノ口遺跡の旧石器時代の遺物が最も早いものである。縄文時代の遺跡は逆川・原野谷川の上流部や支流である倉真川流域でわずかに知られているが、菖蒲ヶ谷遺跡周辺の逆川中流域ではほとんど見つかっていない。

逆川上流の向畠遺跡では早期の土器が採集されるとともに、中期の竪穴住居が検出されている。同じく逆川の段丘上に立地するメト遺跡では後晩期の貯蔵穴よりドングリ類、底や側面に使われた編物が数多く検出され、堅果類の加工場として注目された。

この地域で稲作を開始した最初の人々は、逆川と原野谷川の合流点に近い自然堤防上に居を構えた。それが原川遺跡であり、弥生時代中期前半のことである。

太田川左岸の鶴松遺跡（袋井市）も同様な自然堤防上の遺跡である。鶴松遺跡周辺では住居跡こそあまり見つかっていないが、徳光・堀越・ジョウヤマ・土橋・玉越（以上袋井市）といった弥生時代後期から古墳時代前期までの生活の痕跡を残す遺跡が分布し、一つの拠点的な地域となっている。

菖蒲ヶ谷遺跡の北に弥生時代中期の散布地である元下俣遺跡が知られている。発掘調査がされておらず詳細は不明であるが、上記の遺跡と似通った低地に隣接した集落と考えられる。

一方、逆川下流域では中期後半から丘陵上に営まれた小集落が知られている。居村遺跡・若作遺跡（袋井市）・大門遺跡（袋井市）であり、いずれも古墳時代前期まで継続している。

後期になると遺跡数が増大するとともに、丘陵上に立地する遺跡が卓越してくる。逆川上流域の安養寺遺跡では竪穴住居跡 75 軒、掘立柱建物跡 3 棟が検出され、10 数軒から 20 軒ほどの竪穴住居が 3 ~ 4 時期継続していることが知られている。同程度の規模と考えられる遺跡には、踊原遺跡・峰山遺跡・六ノ坪遺跡・愛野向山II遺跡（袋井市）などがあげられよう。逆川上流の向畠遺跡では竪穴住居跡 11 軒と掘立柱建物跡 1 棟が検出されている。1 時期に 4 軒の竪穴住居と高床倉庫 1 棟の単位で 2 ~ 3 時期にわたって営まれた集落である。同様な小規模集落には、東ノ谷遺跡・天王山遺跡・原新田遺跡・大多郎遺跡等がある。原野谷川右岸、和田岡の台地上では溝ノ口遺跡が前者のタイプであろう。高田遺跡・女高遺跡・瀬戸山 I 遺跡などは密集せず、小さなグループがいくつか集まって大きな集落を形成していたと考えられる。

宇刈川左岸丘陵上の一色前田遺跡（袋井市）では環濠が検出されており、高地性集落を考える上で重要な遺跡である。

古墳時代前期になると遺跡数はやや減少するが、原遺跡など逆川流域と和田岡の集落は弥生時代後期から継続している例が多い。その一方、古墳時代前期になって丘陵上に現れる小規模な遺跡もある。いずれも最近の調査であるが、逆川中流左岸の新田遺跡 4 軒（井村広巳氏ご教示）、垂木川左岸の藏人II遺跡 1 軒、家代川右岸の赤渕遺跡 1 軒と竪穴住居跡が検出されている。調査面積の問題もあるが、このような小規模集落は未発見であるものが多く、今後類例は増加していくと思われる。

古墳時代中期には遺跡数は激減し不明な部分が多い。その中で原川遺跡・六ノ坪遺跡・源ヶ谷遺跡・深谷遺跡等で住居跡が発見されている。

弥生時代後期以降、集落は丘陵上に大きく展開していたが、古墳時代後期になると水田に適した低地もしくはその隣接地に拠点的な集落が現れる。領家遺跡、坂尻遺跡（袋井市）などであり、それらは古代へと引き継がれていく。



第3図 逆川・原野谷川流域の主要遺跡地形図
(太線は川、細線は山地と平地の境を表す。)

古墳時代の集落は未知の部分が多い、しかし古墳に代表される墓制の動向はある程度とらえられている。

弥生時代後期から古墳時代前期の墓制を示す貴重な例として大六山遺跡がある。標高約80mの丘陵尾根上に方形周溝墓のみが造られ、住居跡が全く存在していない。

中期は大きな古墳が築造される時期である。逆川左岸では4世紀後半に前坪3号墳（全長約46m前方後円墳）、5世紀前半に浅間神社3号墳（直径約40m円墳）といった大古墳が築かれている。

原野谷川西岸の河岸段丘である和田岡地区には5～6世紀初頭にかけて春林院古墳（直径30.0m円墳）・行人塚古墳（全長43.7m前方後円墳）・各和金塚古墳（全長66.4m前方後円墳）・吉岡大塚古墳（全長55.0m前方後円墳）・瓢塚古墳（全長63.0m前方後円墳）などの大古墳を中心とした和田岡古墳群が存在する。

この大古墳が集中する2つの地域が逆川・原野谷川流域において重要な位置を占めていることがわかる。

ほぼ同時期6世紀前葉までは直径10m前後の木棺直葬墳の円墳がいたるところの丘陵上に造られている。天王山古墳群・原遺跡・赤夷遺跡・六ノ坪古墳群・源ヶ谷古墳群・若作古墳群（袋井市）・愛野向山古墳群（袋井市）等枚挙にいとまがない。

古墳時代後期になると崖に横穴を穿ち墓とした横穴墓群が築かれている。この地域では濃密に分布しているのだが、同時に居村古墳群のように横穴式石室を採用した円墳も一部で築かれている。この差異は大和朝廷との関連によるとの指摘がなされている。

その中で前坪3号墳・浅間神社3号墳付近の丘陵に宇洞ヶ谷横穴・山麓山横穴が作られている。宇洞ヶ谷横穴は県内最大規模の横穴に造り付けの石棺を有し、飾大刀・金銅装馬具などの豊富な副葬品を持っている。山麓山横穴も装飾馬具など豊かな副葬品を持ち、これらの被葬者は素賀国造に連なる勢力と考えられている。

古代の律令体制下、この地域は佐野郡（佐益郡）として統治されていた。その中心地が坂尻遺跡で「佐野厨家」等の大量の墨書き土器、高床倉庫を推定させる掘立柱建物跡などから、原川・梅橋北遺跡とともに都衙を形成していたと考えられる。同時期に進められた政策として交通路の整備・駅伝制があげられるのだが、その一つである東海道は逆川に沿うように通り、以後当地域は東海道とともに発展してきた。

平安時代末から戦国時代に至る戦乱の際には、東海道は大軍の進路となり、各地で戦闘が行われた。掛川市域でも「小夜の中山」は何度となく戦場となっている。戦国時代今川配下の朝比奈氏により掛川城が築かれると掛川は東遠江における重要地域となった。その後今川氏から徳川家康と遠江の支配者は替わり、さらに家康の関東移封により山内一豊が掛川城主となった。この山内一豊は妻が有名であり「山内一豊の妻」といえば賢婦の代表である。現在、再建された掛川城天守閣とともに整備が進んでいる城下の建物の壁には一豊と妻の姿が現され、掛川のシンボルの一つとなっている。

第3節 調査の方法と経過

(1) 基本層序

菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群の基本的な層序は次のようにある。

- I層（表土層）　腐植土。厚さ10～20cm。
- II層　暗褐色土層　基盤層の礫を少し含む遺物包含層。厚さ10～20cm。
- III層　覆土層　　暗褐色土層。調査区の南へゆくに従い褐色、砂質感が強くなる傾向が見られる。
炭化物を含む。遺物包含層。
- IV層　基盤層　　岩盤（掛川層群土方泥層）。一部黄褐色砂、赤褐色土。

今回の調査区はいずれも丘陵尾根上であり、土の堆積は薄い。10～20cmの表土層の下がII層・遺物包含層である。7世紀から8世紀初頭の焼土はこのII層中にあるが、明確な遺構面としてとらえることはできていない。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と古墳主体部はIV層・基盤層を掘り込んでおり、IV層・基盤層上面で検出された。

基盤層は極めてもらい泥岩からなっており、樹木の根などにより多くの亀裂が入っている。C区北側21R～23Q・D区21L・E区南側3G～4Hでは岩盤がとぎれ、黄褐色砂・赤褐色土が入り込み基盤層を形成している。この掛川層群は新第三紀鮮新世、今から数百万年前に海の底で堆積・形成された地層で貝などの化石を含み古生物学の分野では貴重な資料を提供している。調査中にも割れた岩から貝の化石や植物らしき痕跡を見つけることができた。

III層・覆土層は基本的には暗褐色土であるが、遺構周辺の状況により多少の違いが見られた。また覆土層の分層においては基盤層の混入具合を主な指標とした。そこで住居跡実測図に示した覆土層の註には礫の混入の度合いを示した。

(2) 調査の方法

調査区は南北約 360m、東西約 220m の静岡県立掛川東高等学校校地内、丘陵の稜線上に位置している。確認調査において遺構・遺物が確認された部分を A～I 区とし、計 8,422 m²の調査を行った。ただし G 区から I 区にかけては現地の状況から調査区を分断して行うよりもまとめて調査した方が能率がよいと判断し、中間の地点も基盤層まで掘削した。

調査区のグリッド設定は国家座標の軸線を基準に南西を原点・1 A (X=-138000, Y=-45070)とした。そして南から北に 1・2・3 …、西から東に A・B・C …と設定し、数字とアルファベットを組み合わせてグリッド名とした。(図 3)

レベルは株式会社フジャマに委託し、3 級水準点より調査区内の杭に移動させ、それを基準として使用した。

調査は A 区より順に南の E・F 区まで進め、西側の尾根の G・H・I 区と進めた。A・B・C・E 区は地形・遺構の分布状況などから北と南に分けて分類・報告を行った。

J 区は踏査の際に遺物が採集されており、本調査と同時に確認調査を行った。

掛川市を含むこの地域は横穴群が集中するところである。発見された場合は改めて協議を行う取り決めがなされており、それを受けた B 区北側、H・I 区西側の斜面の表土を重機により除去し有無の確認を行った。その結果横穴は発見されなかった。

表土除去は重機で行う予定であったが、4 月の調査開始時において伐採樹木の搬出・処理が完了していないかったために重機が進入できず、A・B 区は表土除去を人力で行った。C 区以後は重機により表土を除去した後、人力で包含層を除去、遺構検査をした。

C 区において検出した竪穴住居内の炉は非常に遺存状態がよく、貴重な例であるとの指摘がなされたため、型取りにより保存を行った。保存処理は遺跡出土金属製品とともに西尾太加二主任調査研究員の指導のもと当財団の保存処理担当の職員が実施した。

図面については、遺構平面図・土層図は 1/20 を基本とし、遺物出土状況図などは必要に応じて縮尺を変えて作成した。

遺構平面図は空中写真測量を利用した。空中写真測量と図化は株式会社フジャマに委託した。

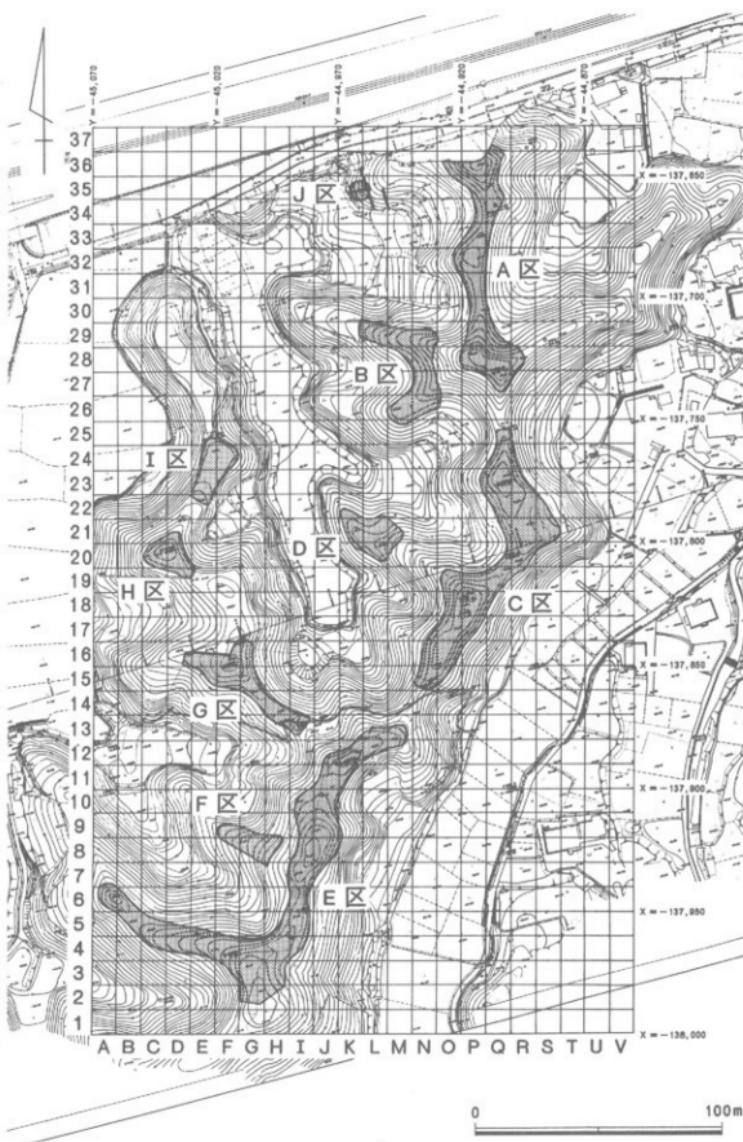
A 区と C 区の中間鞍部は樹木伐採時に作業道とされ地形が改変されているため、図化しなかった。

自然科学分析として土壤をサンプリングし、分析・原稿執筆を株式会社 ジェネティックに委託した。原稿は付録として本報告書に掲載した。

現地調査での記録写真については、6×7 判 (白黒)、35 mm 判 (白黒・カラーリバーサル・カラーネガ) を使用し、ローリングタワー・高所作業車により撮影した。

また株式会社フジャマに委託し、俯瞰写真は 6×4.5 判 (白黒・カラーリバーサル) を用いラジコンヘリにて、遺跡遠景写真は 4×5 判 (カラーリバーサル) を使用してセスナ機により撮影した。

遺物写真は個別写真を 6×7 判 (白黒)、35 mm 判 (カラーリバーサル) を用いて、遺物集合写真は 4×5 判 (白黒・カラーリバーサル) を使用して技術職員杉山すず代が撮影した。



第4図 グリッド配置図

(3) 調査経過

1. 発掘調査

平成 11 年度発掘調査全体の工程表を表 2 に示す。

表 2 平成 11 年度現地発掘作業工程表

地区	作業内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
B	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
C	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
E	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
F	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
G	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H	連續調査	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
I	表土・粘合層除去 (人力)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J	トレーニング削除	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	実測・写真	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表土・粘土除去 (重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	準備工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	作業道整備(重機)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	測量杭設置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	積穴確認	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	立木伐採	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
室内整理	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

4月の調査開始時から5月までは用地内において伐採樹木の処理を行っており、重機を投入できなかつたため、人力により表土除去を行つた。

6月からは重機を投入し表土除去を行うとともに、樹木伐採時の作業道を整備し、作業員通路を確保するとともに資材運搬用に軽トラックが利用できるようにした。

平成11年4月

準備工。現地事務所・現場事務所設置。資機材搬入。

A区 表土・包含層除去作業。遺構検出作業。

5月

A区 表土・包含層除去作業。遺構検出・掘削作業。
実測図作成。写真撮影。

6月

A区 遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。

B区 表土・包含層除去作業。遺構検出・掘削作業。
実測図作成。写真撮影。

C・D区 重機による表土除去作業。

重機による作業道整備。

空中写真測量業務、入札・契約。

A～D区 測量杭設置（株式会社フジヤマに委託）。

7月

A区 遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。

B区 重機による表土・排土除去作業。遺構検出・
掘削作業。写真撮影。

C区 表土・包含層除去作業。

J区 重機による表土除去作業。

8月

A・B区 空中写真測量作業（株式会社フジヤマに委託）。

B区 遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。

C区 表土・包含層除去作業（重機・人力）。
遺構検出・掘削作業。

D区 表土・包含層除去作業（重機・人力）。

9月

B区 遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。

C区 包含層除去作業。遺構検出・掘削作業。
実測図作成。写真撮影。

D区 包含層除去作業。

E・F区 表土・包含層除去作業（重機・人力）。

J区 トレンチ掘削作業。写真撮影。



発掘作業風景（B区）



重機による表土除去作業



実測作業風景（C区）



空中写真測量作業風景



土壤分析資料採取作業

E～I区	測量杭設置（株式会社フジャマに委託）。
10月	
C区	遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。
C・D区	空中写真測量作業（株式会社フジャマに委託）。
E区	包含層除去作業。
G～I区	表土・包含層除去作業（重機・人力）。
B区北	重機による横穴確認作業。
H～I区西	“
11月	
C区	実測図作成。写真撮影。
E区	遺構検出・掘削作業。
G・I区	包含層除去作業。 向坂鋼二氏による現地指導。
A区東	暴風雨により敷地内の立木が敷地外へ倒れる。 立木伐採（株式会社東海フォレストに委託）。
12月	
A～C区	高所作業車を用いて写真撮影。
E・G・H区	遺構検出・掘削作業。
平成12年1月	
E・G・H区	遺構検出・掘削作業。実測図作成。写真撮影。
E～I区	空中写真測量作業（株式会社フジャマに委託）。
E～I区	重機による排土除去・作業道整備作業。
2月	
E・G区	遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。
A～I区	重機による排土除去・作業道整備・伐採樹木除去作業。
A～H区	高所作業車を用いて写真撮影。
24日	記者発表。
27日	現地説明会。
3月	
C区	遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。炉跡型取り。
E・G・H区	遺構掘削作業。実測図作成。写真撮影。 現地撤収作業。

現地調査と並行してほぼ全期間にわたって整理作業を行った。内容は出土遺物の洗浄・注記・接合、写真・図面等の整理である。



J区確認トレンチ



発掘作業風景（H・I区）



横穴墓確認作業後風景
(B区北斜面)



横穴墓確認作業後風景
(H・I区西斜面)



学識経験者による現地指導

2. 資料整理

報告書作成のための資料整理は平成12年4月より13年1月までの10ヶ月間、島田整理事務所において行った。

4月

遺物接合・実測作業。図面整理。出土鉄製品等保存処理作業。

5月

遺物接合・実測作業。図面整理。出土鉄製品等保存処理作業。

6月

遺物接合・実測作業。図面整理。遺構編集図版下作成作業。

出土鉄製品等保存処理作業。

7月

遺物接合・復原・実測作業。遺構編集図版下作成作業。観察表作成作業。出土鉄製品等保存処理作業。

8月

遺物接合・復原・実測作業。版下作成作業。観察表・カード作成作業。出土鉄製品等保存処理作業。原稿執筆作業。

9月

遺物復原・実測作業。版下作成作業。トレース作業。観察表・カード作成作業。出土鉄製品等保存処理作業。原稿執筆作業。

10月

遺物復原・実測作業。版下作成作業。トレース作業。観察表・カード作成作業。遺物写真撮影。原稿執筆作業。

11月

版下作成作業。遺物写真撮影。原稿執筆作業。

12月

版下作成作業。収納等諸作業。原稿執筆作業。

1月

版下作成作業。収納等諸作業。原稿執筆作業。

3. 発掘調査・資料整理作業参加者（敬称略・五十音順）

発掘調査

青島豊彦 伊藤祐司 内田猪平 大谷忠平 大橋恭次

小柳津宏子 近藤敏実 柴田和久 鶴村幸平 高木 淳

高橋育代 服部恒雄 藤田明美 増田佳子 丸尾 進

向川 隆 向川弘治 山崎朝三 山崎弘明 山本利雄

緩鹿利重 横山正氏 吉田禮子

児玉昌子 佐藤松枝（整理作業）

資料整理

佐野絹子 杉浦久子 高木 淳 多田容子 原 洋子

藤田明美 水野かおり 鷲塚宏子



実測作業風景（E区）



高所作業者による写真撮影



現地説明会



遺構型取り作業（S B 05 A炉）



発掘作業参加者

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

発掘調査の結果、以下の遺構・遺物が検出された。時代順に示すと次の通りである。

弥生時代後期～古墳時代前期	集落（竪穴住居跡・ピット列・不明土坑）
古墳時代	古墳（山ノ口古墳群3・4号墳）
7世紀～8世紀初頭	焼土・須恵器（21R焼土・16F焼土）
12世紀	山茶碗
時期不明	不明土坑（S X 01）、焼壁土坑（S F 01）

図5が遺構の全体図である。

弥生時代後期から古墳時代前期の集落としては、竪穴住居跡が調査区のほぼ全域から計26軒検出された（S B 01～23・表7）。A区北34・35P・QのS B 01、B区南26MのS B 03にはそれぞれ溝が附設されている（S D 01・S D 02）。住居の可能性も考えられるピット列がB区北29Nに検出された。不明土坑S X 02はE区南6Iに尾根の中心から西にややずれた位置に検出された。D区から遺構は検出されなかったが、土器・石器がわずかに出土している。

C区S B 05Bの覆土中より炭化物が出土した。静岡大学の佐藤洋一郎助教授に見ていただいたところ、イネと何かが溶けたよう状態であるとお教えいただいた。そこで集落における食生活・環境を調べる目的で周囲の住居跡を中心にいくつかの土壤サンプルを採取し分析を（株）ジェネティックに依頼した。その結果は付録として掲載した。

古墳時代の古墳は何れも円墳で、山ノ口3号墳がA区北の北端36Pに、4号墳がA区南28Pに存在している。主体部は3号墳では検出されたが4号墳では検出されなかった。

C区北21Rにおいて2ヶ所の焼土が検出された。周囲から出土した須恵器・土師器から7世紀～8世紀初頭の遺構と考えられる。G区16Fでも焼土が検出され須恵器が出土している。その他にA区北34Qからも須恵器が出土している。

1点ではあるが確認調査時にB区南の斜面より山茶碗が採集されている。

時期不明の不明土坑S X 01はC区南18P、竪穴住居跡S B 07を切って掘られていた。そこで便宜上住居跡S B 07のところで述べることとする。

焼壁土坑S F 01はA区北31Pにおいて検出された。

F区とI区は遺構・遺物とともに検出されなかった。

本遺跡が属する逆川・原野谷川流域は、古墳時代後期において横穴墓群が非常に多く分布する地域である。そこで調査区內でもっとも可能性が高いと思われたB区北の北側斜面、H・I区西側斜面の表土を重機で除去したが横穴墓は確認されなかった。

以下時代順、地区ごとに述べていく。

第5図 連構全体図



第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の集落

(1) 遺構・遺構出土土器

A区（S B 01・S D 01・S B 22）

S B 01・S D 01（第6・7図：図版5）

A区北、34・35P・Q、標高63.7m、尾根の鞍部のわずかな平坦部分に位置している。平面形はや丸みを持った隅丸方形、規模は5.9m×5.2m、面積は30.7m²である。西壁には壁溝が確認された。柱穴と考えられるビットは4つ検出されている。北側のP 1・2はそれぞれ深さが半分ほどのビットと切り合ったような形になっているが、前後関係などは確認できなかった。掘り直し・添え柱・柱の抜き取りなどが考えられよう。P 4では疊の様子から柱材の痕跡らしきものが観察できた。直径15cm、深さ30cmほどである。中央よりやや南寄りに小さなビットP 5が検出された。長径48cm、深さ15cmと浅く小さなものであり、敲石（第65図4）が出土した。

炉・焼土は検出されなかった。

住居内覆土中に遺物はほとんどないが、炭化物は多く含まれていた。焼土が全く見られなかったことから、焼失住居の可能性は低いと思われる。

北側には後述する山ノ口3号墳がありS B 01とは約4mの高低差がある。その傾斜が緩くなる、住居から2.5m程の所に溝S D 01が設けられている。雨など斜面からの水が住居に及ばないよう、排水用に設けられたものと考えられる。幅50cm、深さ35cm、長さ5.5mほどの断面逆台形の溝で尾根を切断して掘られている。

S B 01・S D 01出土土器（第8図：図版33）

S B 01出土土器のうち図化できたのは1・2の2点のみである。

1はP 3から出土した甕の口縁部の破片である。内外面ともにハケによる調整、口唇部はナデ・面取りをした後にハケ状工具によるキザミが施されている。

2は高环坏部の屈折部位と思われる。摩滅が激しく調整は不明である。

S D 01出土土器が3～6である。

3は口径13.9cm、高さ14.7cmと小型の台付甕である。頭部のくびれは弱く、口縁は外に開く。二次焼成を強く受けている。

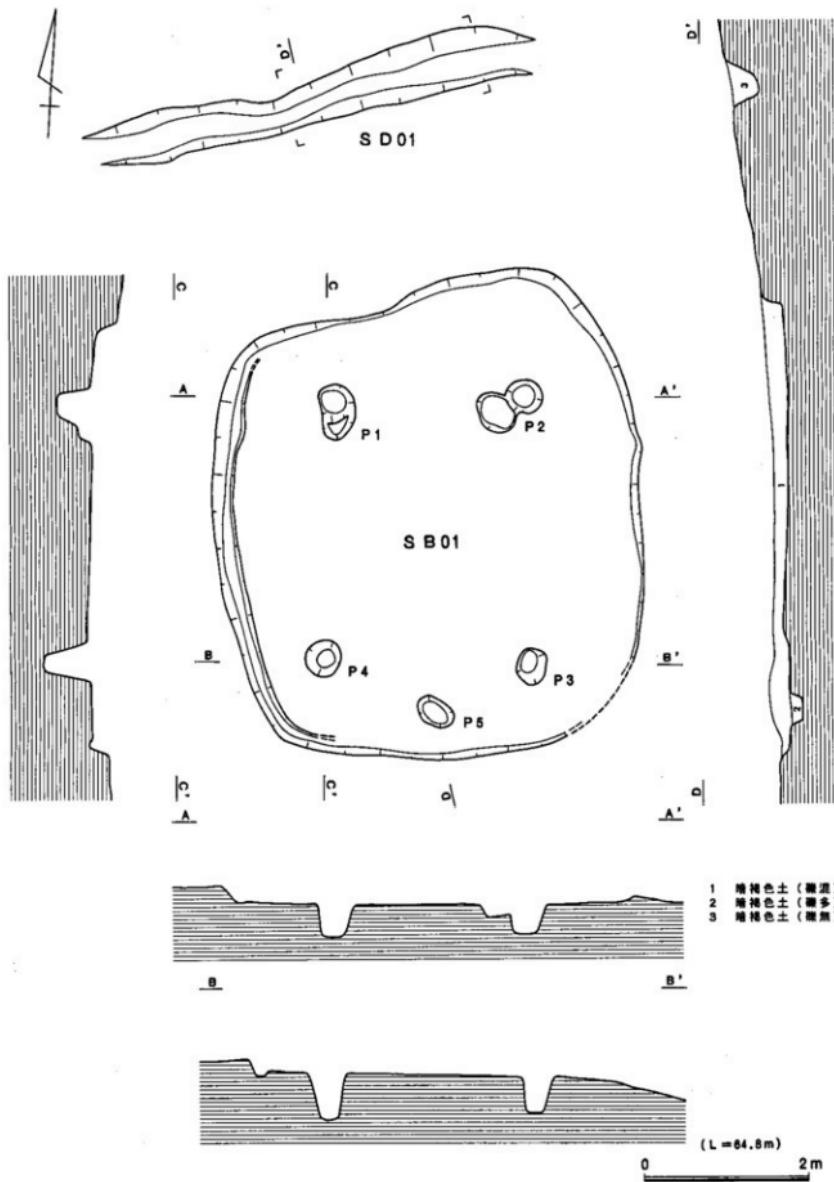
4は台付甕の台部である。摩滅が激しく、わずかにハケ調整が観察される。

5は台付甕の台上半部である。摩滅のため調整は不明である。二次焼成による赤変が見られる。

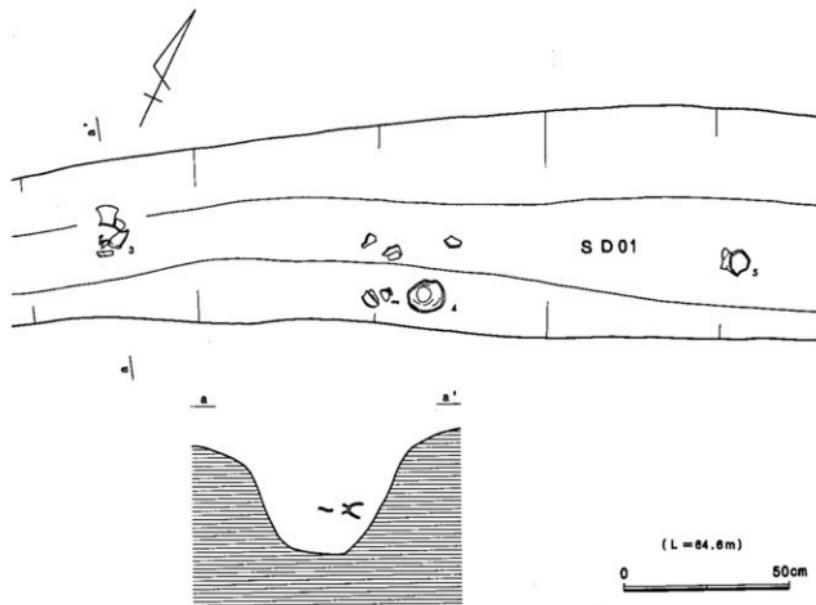
6は小型丸底壺である。底部と口縁端部を欠いているがほぼ全体が復原できた。内外面ともに丁寧にみがいていると思われるが、摩滅によりミガキの痕跡は観察できない。胎土も精製されたものを用いている。

S B 22（第9図：図版5）

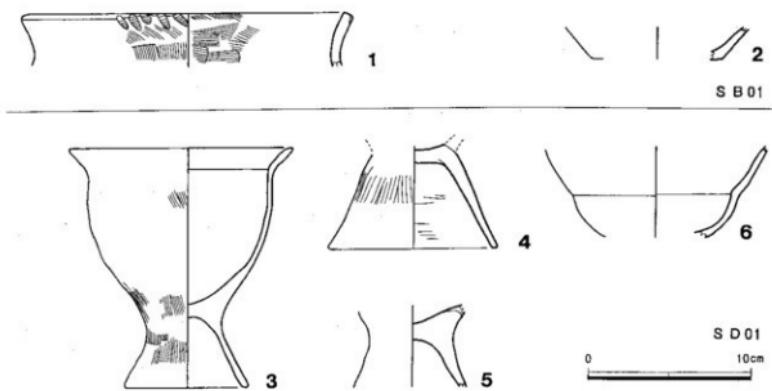
A区北、32Pに位置する。標高約64.8mのわずかに高くなっている頂部付近にビットがほぼ直角に3つ並んで検出された。ビット間の距離は3.0mと2.8mである。周辺からは土師器細片の散布が見られた。ビットの並び方と緩やかながら頂部となっている所に遺物が散布し、流れ込みのような状況ではないことから、柱穴のみが残った竪穴住居跡と認定した。遺物は遺構外とした壺口縁部・高環または器台（第56図：図版38）の他、復原・図化はできなかった甕の胴部破片が伴うと思われる。



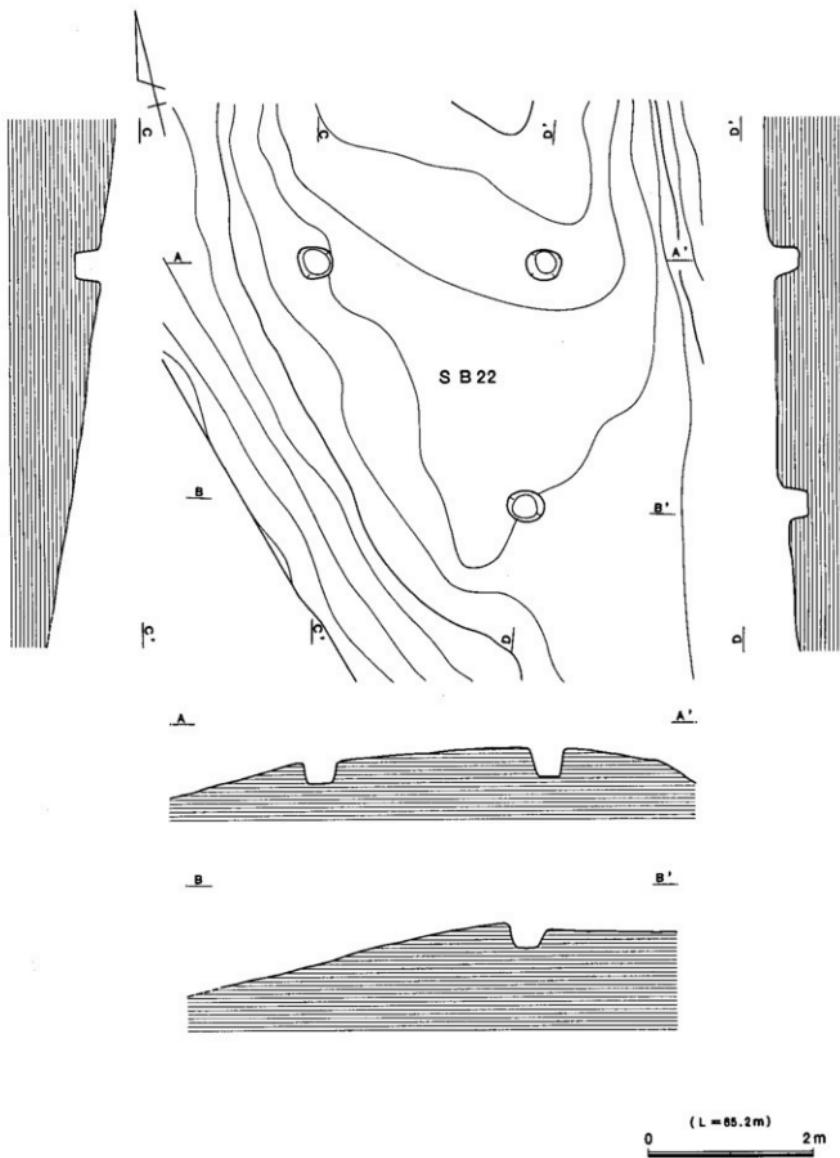
第6図 SB 01・SD 01実測図



第7図 SD 01 遺物出土状況図



第8図 遺構出土土器実測図(SB 01・SD 01)

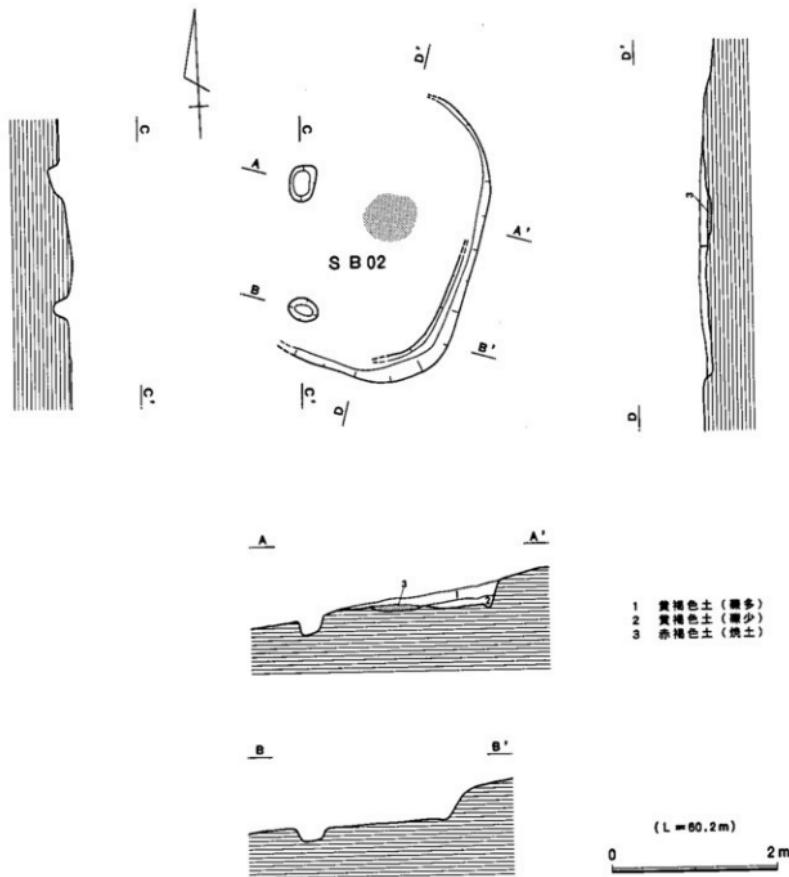


第9図 SB 22 実測図

B区 (SB 02・ピット列・SB 03・SD 02)

SB 02 (第10図: 図版6)

B区北、29 M、標高 59.4 m、中心の尾根・山ノ口4号墳が位置する頂部(約70m)から西に下って延びていく尾根の緩斜面に位置している。壁は約半分が検出され、一辺3.6 m程の隅丸方形と思われる。検出されたのは東側約半分の壁とピット2・焼土である。南東には壁溝が巡っている。



第10図 SB 02 実測図

ピットの位置、焼土がピットよりも壁寄りにあるなど、住居の平面形に対し位置関係が不規則である。柱は穴を掘らずに据え置いていることも考えられるが、推定面積が 13.0 m^2 と極めて小さく、4本主柱の住居とは異なった上屋が存在していた可能性が考えられる。

S B 02 出土土器（第 11 図：図版 33）

7 は壺底部の小破片である。内面にはハケメがある。

8 は甕口縁部の小破片である。胴部内面はヨコハケ、口縁部内面はヨコナデが施されている。外面は摩滅のため不明である。

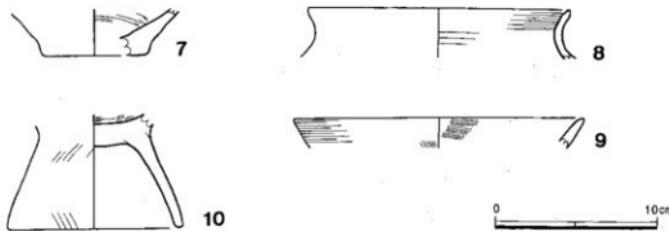
9 も甕口縁部片である。内外面ともにハケ、外面はヨコナデを行っている。

10 は台付甕台部片である。全体的に摩滅しているが、所々にハケメが観察される。

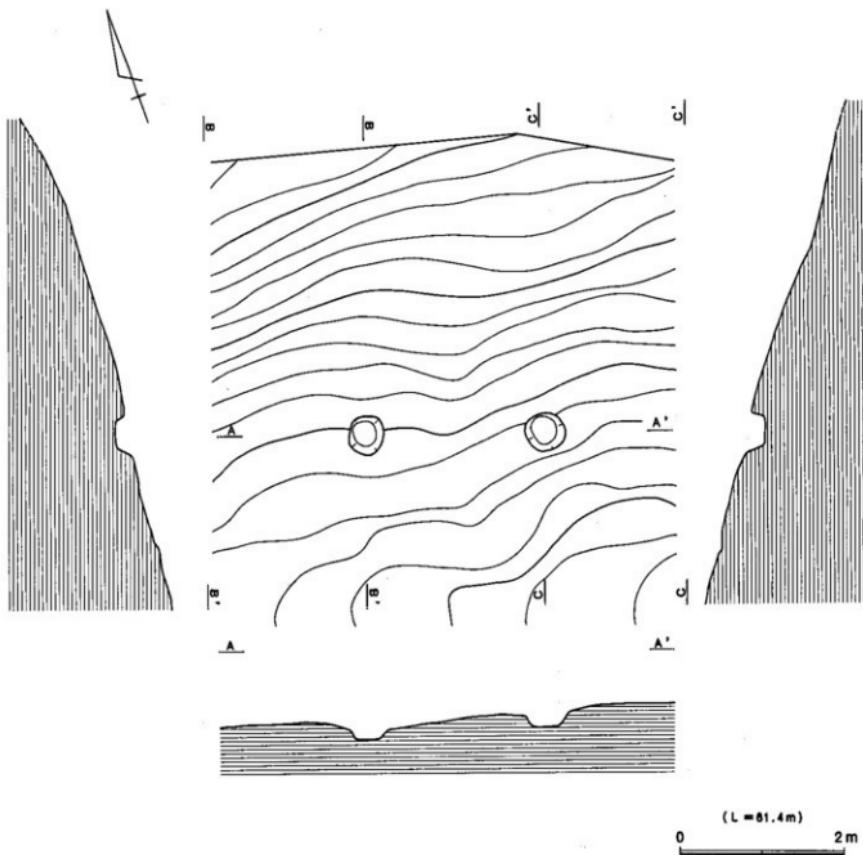
ピット列（第 12 図）

B 区北、29 N に位置する 2 つのピットである。S B 02 から 10 m 程東に離れている。尾根の中心より北側、尾根筋に並行して並び、ピット間の距離は 2.2 m である。堅穴住居の柱穴とも考えられるが、尾根の中心線からはやや離れていることと、他に積極的に肯定する要素がないため住居とはせずにピット列として報告する。

東側のピット（S P 07）より壺底部片 11（第 13 図）が出土している。



第 11 図 遺構出土土器実測図 (S B 02)



第12図 ピット列実測図



第13図 遺構出土土器実測図(ピット列)

S B 03・S D 02 (第 14 図: 図版 7)

B 区南、26 M、標高 57.8 m、S B 02 がある尾根の南を西に向かう別の尾根の先端平坦部分に位置する。南と北の壁は流出しているが、東壁は約 36cm の深さで残っていた。柱穴 3 と東壁の中心や北側に土坑 (P 1) を持っている。焼土は住居の中心より西側にある。平面形は四角に近い隅丸方形である。

遺物は多く出土している。特に東壁・P 1 周辺には土器が集中している。また錐と思われる細い丸棒状の鉄片も出土している。

P 1 には、壺 13 と台付壺 25 がともに伏せられたような状態で出土している。ここでは一つの土坑として示しているが、元来は二つの土坑にそれぞれ埋められていた可能性も考えられる。その点に関しては他の住居跡の例と併せてまとめの項で少し述べることとする。

土坑 (P 1) の脇には高坏・壺・鉢が並べられたように出土している。高坏が多いこと、高坏を含め転用されていると考えられる土器が多く出土していることもこの住居の特徴としてあげができることがある。

出土状況図中の S-40 は自然の円礫である。細粒半花崗岩で表面がなめらか、滑らすと透き通った感じの光沢を持つ石である。石器ではないがきれいな石という認識を持って住居内に持ち込まれたものと思われる。

住居の東、尾根頂部側に約 3 m 離れて溝 S D 02 が設けられている。S B 01 に対する S D 01 と同様に雨水などの排水用と考えられる。検出したのは幅 60cm、深さ 20cm ほどであるが本来はもっと深かったと思われる。尾根に直行する方向で長さ約 3m が検出された。

S B 03 出土土器 (第 15・16 図: 図版 33・34)

12・13 は同一個体と考えられる壺である。12 は肩部より口縁部、13 は胴部最大径部分以下である。製作時の粘土接合部分で切り離され、転用されたものである。頸部にはタテハケが見られ、胴部下半には横位のミガキが一部に残っている。

14 は複合口縁壺の口縁部である。外面屈曲部の下にはハケメが強く残っている。

15 は二重口縁壺の頸部より上の破片である。砂粒をわずかに含む均質な胎土である。摩滅が激しく調整は不明である。

16 も二重口縁壺の口縁部であるが端部も欠損している。摩滅のため調整は不明である。

18 はミニチュア壺である。頸部と胴の下部の破片のみであるため推定の部分が大きいが、胴部最大径が 10.4cm ではほぼ球形をしていることがわかる。胎土は白色・灰色の小礫・砂粒を含み 12・13 の壺に近いものである。

19～23 はいずれも壺の口縁部の小破片である。全て摩滅しているが、20 は口唇部を面取りし、ヨコナデをして仕上げている。23 は口縁部が内湾している。

25 は P 1 に逆位で埋まっていた台付壺で肩部以下を残している。胴部・台部内面には一部指頭痕を残すが、ほぼ全面にハケ調整が施されている。胴内面と外面にはスグが付着している。

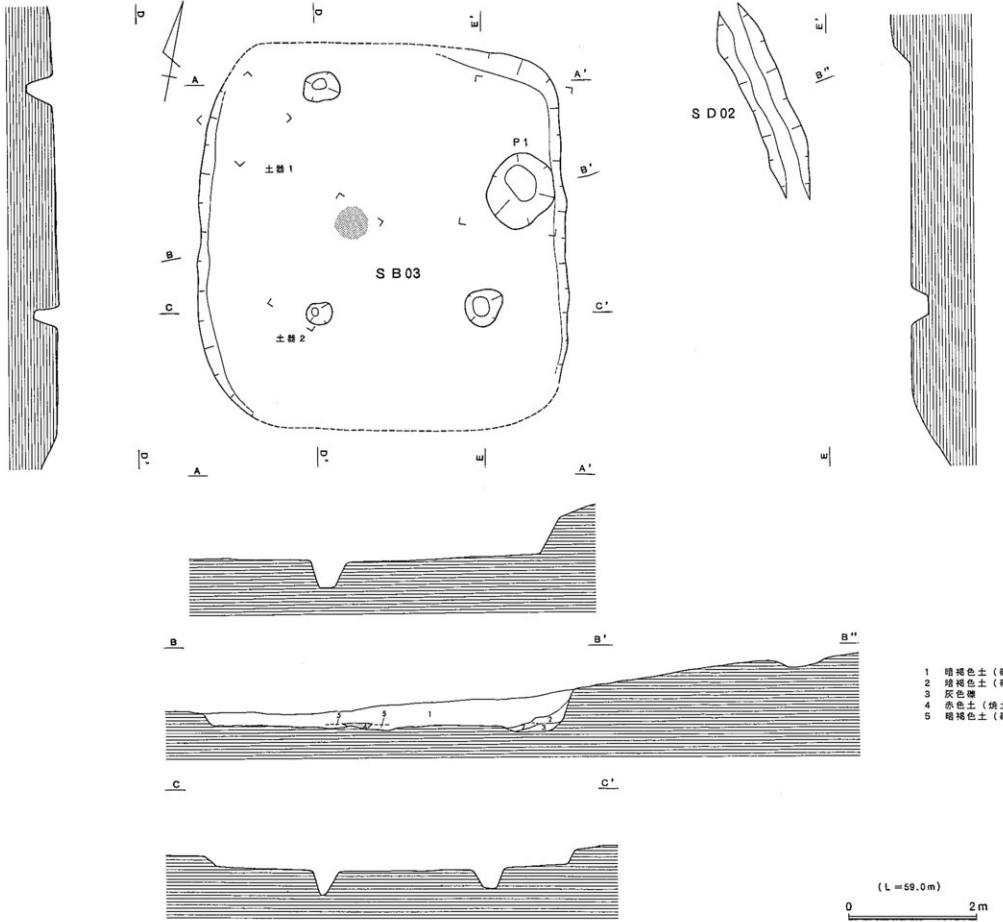
26～28 は台付壺の台部である。27 は外面にモミ痕がある。

29 はミニチュア台付壺の底部～台部であると思われる。底径が 3.0cm と極めて小さな個体である。

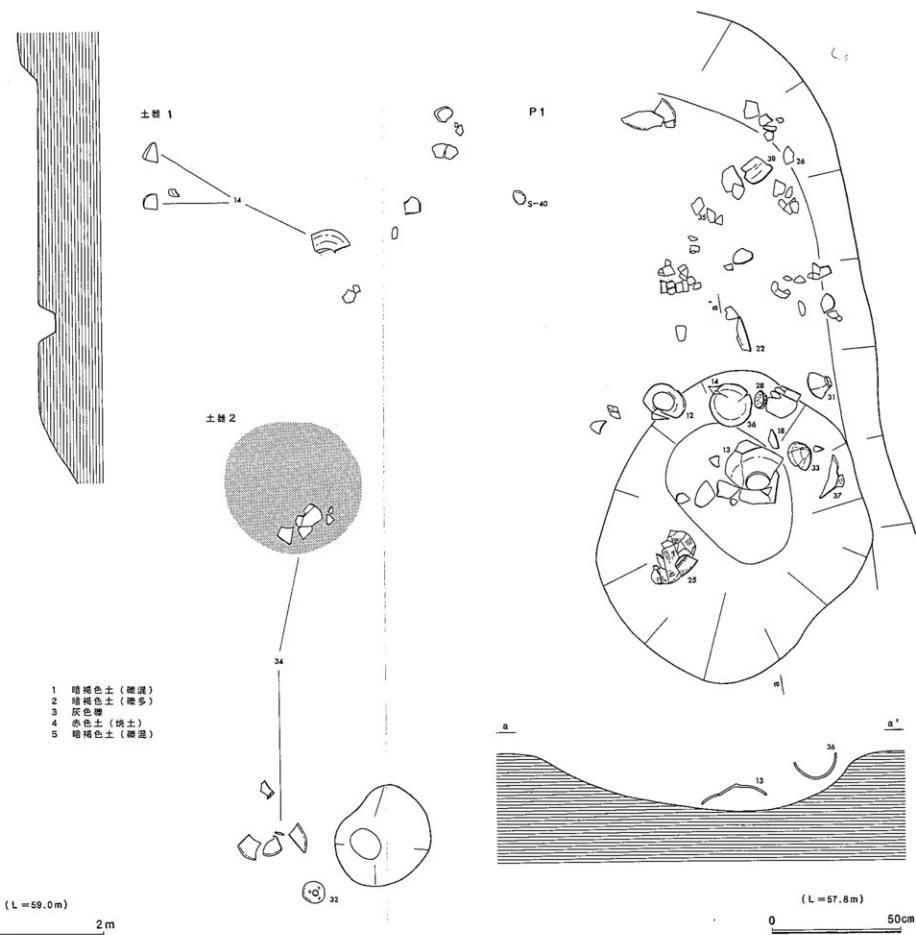
30 以下は高坏である。30 は坏部下半、接合部で剥離している。

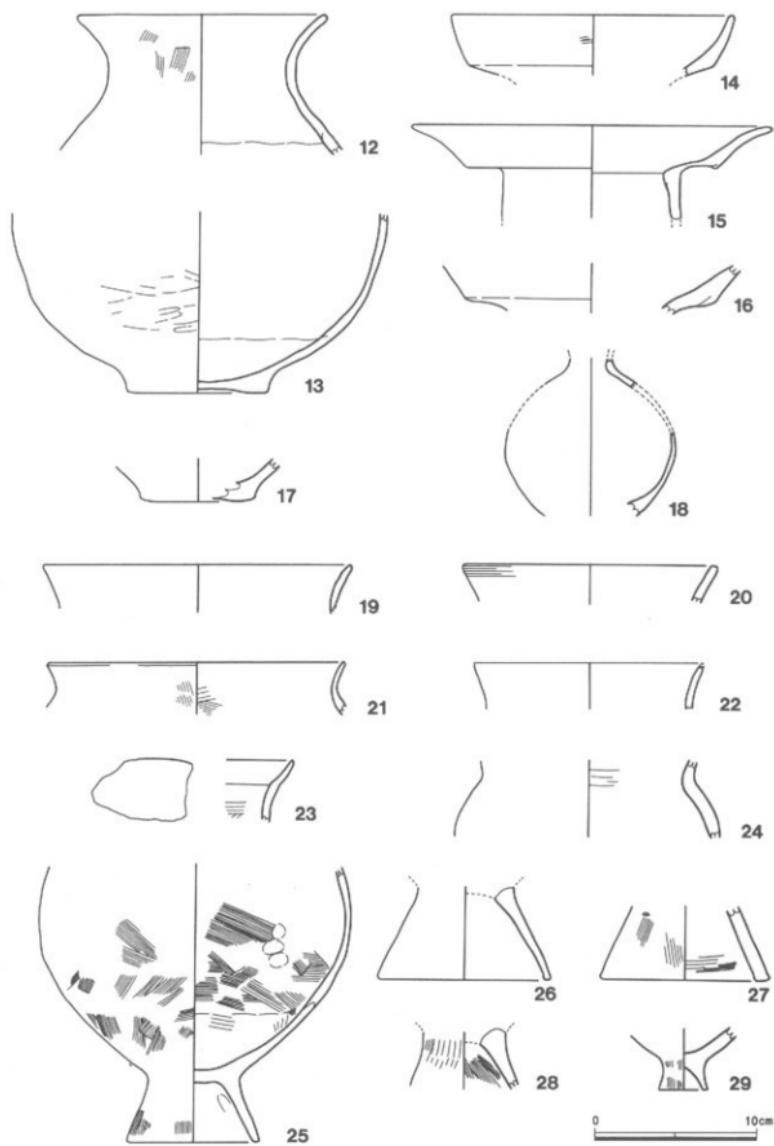
31 は脚部の破片である。内湾し、坏への接合部はまっすぐに立ち上がっている。残っている部位では穿孔は見られない。

32 は脚部の接合部分以下が完存している。3ヶ所の穿孔があり直線的で裾が広がらないタイプのものである。二次焼成のため内外面とも摩滅が激しく調整は不明である。

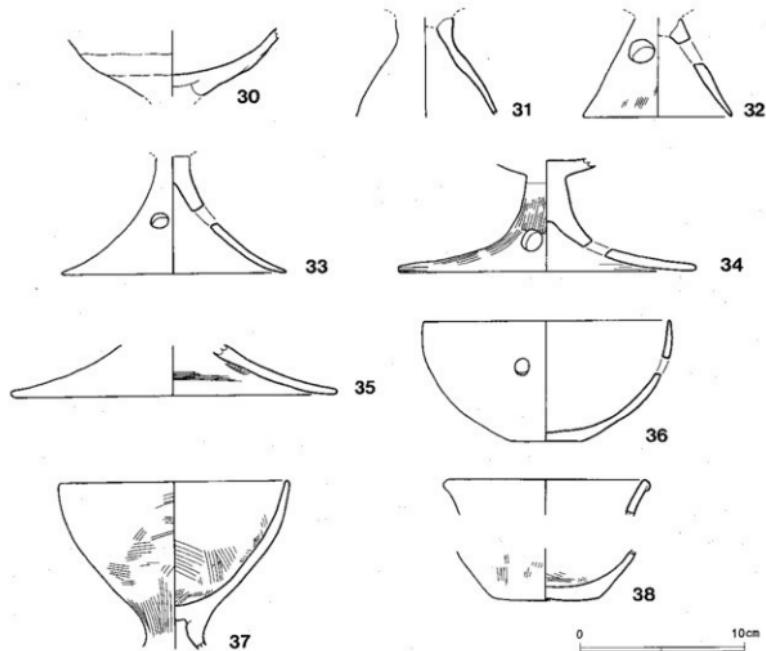


第14図 SB・SD 02実測図
27・28





第15図 遺構出土土器実測図 (SB 03)



第16図 遺構出土土器実測図(SB 03)

33も脚部である。3ヶ所の穿孔がありゆるやかに広がっている。摩滅のため不明瞭ではあるがわずかにミガキの痕跡が残っている。一部に火を受けたと思われる黒変が見られる。

34も3ヶ所の穿孔がある脚部であるが大きく裾が広がっている。坏部をわずかに残し円盤状に打ち欠いている。外面はミガキ、端部はヨコナデが施されている。破片の一部は炉の上に乗っていた。

35は脚部の下半であるが34のように大きく裾が広がるタイプのものである。外面はミガキのようだが摩滅が激しい。内面はハケの調整が残り、二次焼成の黒変もある。

36は半球状の鉢である。器壁は薄く、口縁部から3cmほど下に1ヶ所の穿孔が残存している。何カ所の穿孔があったかは不明である。下半は黒変、上半は赤変と二次焼成を受けている。

37是在地系の小型台付鉢または外来系高環の模倣品であろう。台部は欠損している。鉢部は緩やかに内湾した球形を呈し、内外面ともにハケメが顕著である。

38は小型の鉢の口縁部と底部の破片である。胴部の破片もあるが全体の形は復原できなかった。底部にはわずかにハケメが残っている。口縁端部は小さく折り返し、外面は継にみがいている様子がかすかに観察できる。

以上の他に図化出来なかつたが覆土中からS字甕の胴部破片が2点出土している。S字甕は他の地点からは出土していない。

C区（S B 04・05A・B・07・08）

S B 04（第17図：図版9）

C区北、22・23 Q・R、標高65.4m、尾根が緩やかに南に向かって下がっている緩斜面のやや広いところに位置している。検出されたのは壁が北西角付近・ピット・炉・焼土である。この住居が位置している部分の基盤層は泥岩が切れいで褐色土・黄褐色砂質土となっている。そのためか床面の流出は著しい。

炉の他に目立った焼土を2ヶ所図示したが、他にも焼土の固まりが散在していた。これも床面の流出に伴い炉が崩壊してしまったものと考えられる。炉は南側にわずかに高まりが認められ、S B 05Aに見られるような半円形の高まりを持ったものであったと思われる。

北西のピットのすぐ脇に2個体分の台付甕が組み合わされた形で置かれていた。底部から台部が欠損したもの（42）を逆さまに置き、その中に別の個体の底部以下（43）を納めている。上に載せられていた個体は台の部分が一部欠損している。破損してしまった2つの台付甕を組み合わせることによって、高壊または鉢のような機能を持たせたと思われる。

S B 04のすぐ南に位置するS B 05Bよりイネの炭化物が出土している。そこでこのS B 04においてもいくつかの土壤サンプルを採取し、分析を依頼した。採取したのは、炉、焼土2、壺39・40・台付甕42それぞれの内部の土壤である。焼土2からは種子が3点検出され、うち2点は豆科の種子である。

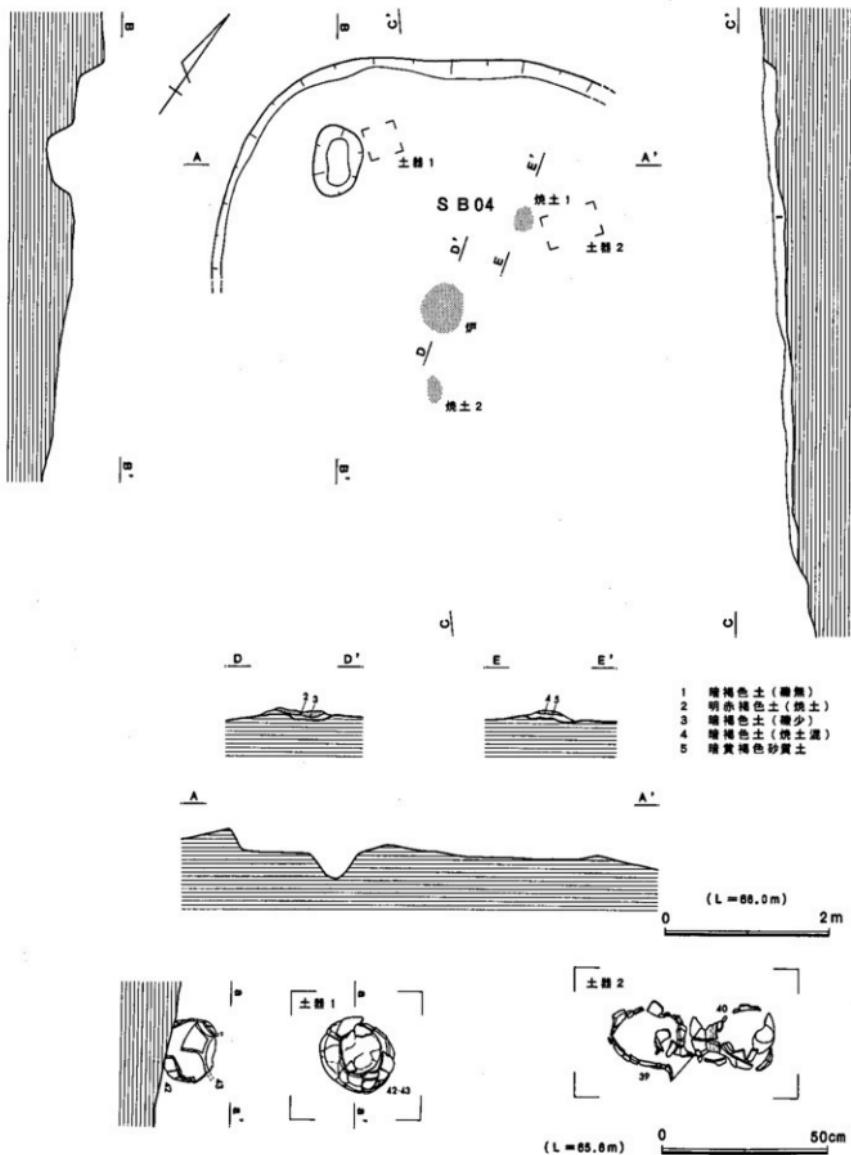
S B 04出土土器（第18図：図版35）

39・40は住居の北東に頸を接し、向かい合うようにして出土した壺である。39は球形に近い胴部を持った単純口縁の壺である。肩部から頸部にかけて櫛刺突斜行文が、時計回りに上にのぼっていく螺旋状に4段施されている。全面をハケ調整の後磨いているが、ミガキは一部しか観察できない。

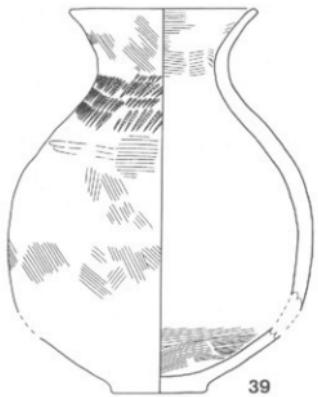
40も単純口縁の壺であるが胴部はかなり下ぶくれである。文様も39同様、櫛刺突斜行文が4段、時計回り螺旋状につけられている。胴部もハケ調整後磨いているようである。

42は台付甕口縁から胴部下方の粘土接合部までが完存している。内外面ともにススが付着している。口縁部にキザミが施されていたような痕跡もあるが、摩滅により不明瞭である。

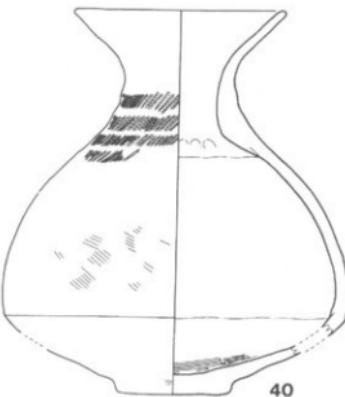
43は台付甕の胴部以下である。台部は一部欠損している。内外面にはススが付着している。



第17図 SB 04 実測図



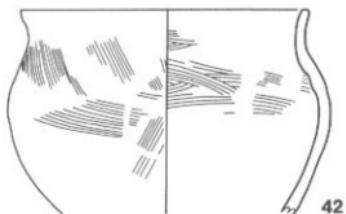
39



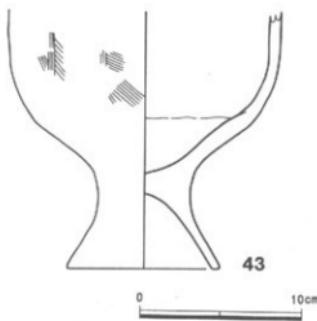
40



41



42



43

0 10cm

第18図 遺構出土土器実測図(SB04)

S B 05A (第 19・20 図 : 図版 10)

C 区北、21・22 Q・R、標高 64.7m、緩斜面上 S B 04 のすぐ南に位置している。S B 04 と S B 05A との距離は 1m ほどであろうと推定される。S B 05A を約半分切り、さらに 50cm ほど掘り込んで S B 05B が作られている。

この地点も東側は岩盤が無く基盤層が黄褐色砂質土であるため、遺構が不明瞭なところがある。

北と西壁の一部、ピット 2 が検出された。北壁の東と西の角付近には壁溝が認められた。

中央に炉が設けられている。炉は粘土により土手状の高まりを半円形に巡らせてている。粘土はかたく焼け締まり赤色、一部は黒色に変色している。この炉は遺存状況が非常に良かったので型取りをして保存した。すぐ北側には壺 44・47 が出土している。

この S B 05A においても型取りした炉と基盤層の間の土壤、北壁やや東よりにみられた焼土をサンプリングし分析を依頼した。とともにイネが検出されている。炉の下の土からはマメ科の種子も検出されている。

S B 05A 出土土器 (第 21 図 : 図版 35・39)

44 は単純口縁の壺で、復原した器高は 34.8cm と大型である。胸部は下ぶくれで稜を持ち、最大径は 31.5cm を測る。底部を炉の近く、破片は炉の上に散乱していた。二次焼成を受けている可能性もある。口縁端部はきれいに面取りされている。

45 は壺の頸から肩にかけての破片でヘラ状工具による刺突羽状文が 3 段施されている。頸部は屈曲し、内面には指頭圧痕が残っている。

46 は下ぶくれした胸部を持つ小型の壺の底部である。外面の一部にミガキが見える。二次焼成によるものか、赤変시스が付着している。

47 も大型の壺で胸部下半～底部である。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる、球形をした胸部である。粘土接合部できれいに打ち欠いてあり、鉢として転用されたようである。外面には一部ミガキが残っている。

48 は折り返し部分にハケ状工具によるキザミを施された口縁部の破片で壺と思われる。

S B 05B (第 19・22 図 : 図版 10・11)

S B 05B は壁が 35cm と深く残っており、柱穴等平面形がよくわかる住居である。規模は 4.7 m × 4.5 m、やや脇の張った隅丸方形である。炉、焼土、ピット 5 が検出されている。壁溝は一部切れてはいるが西壁以外に見られる。

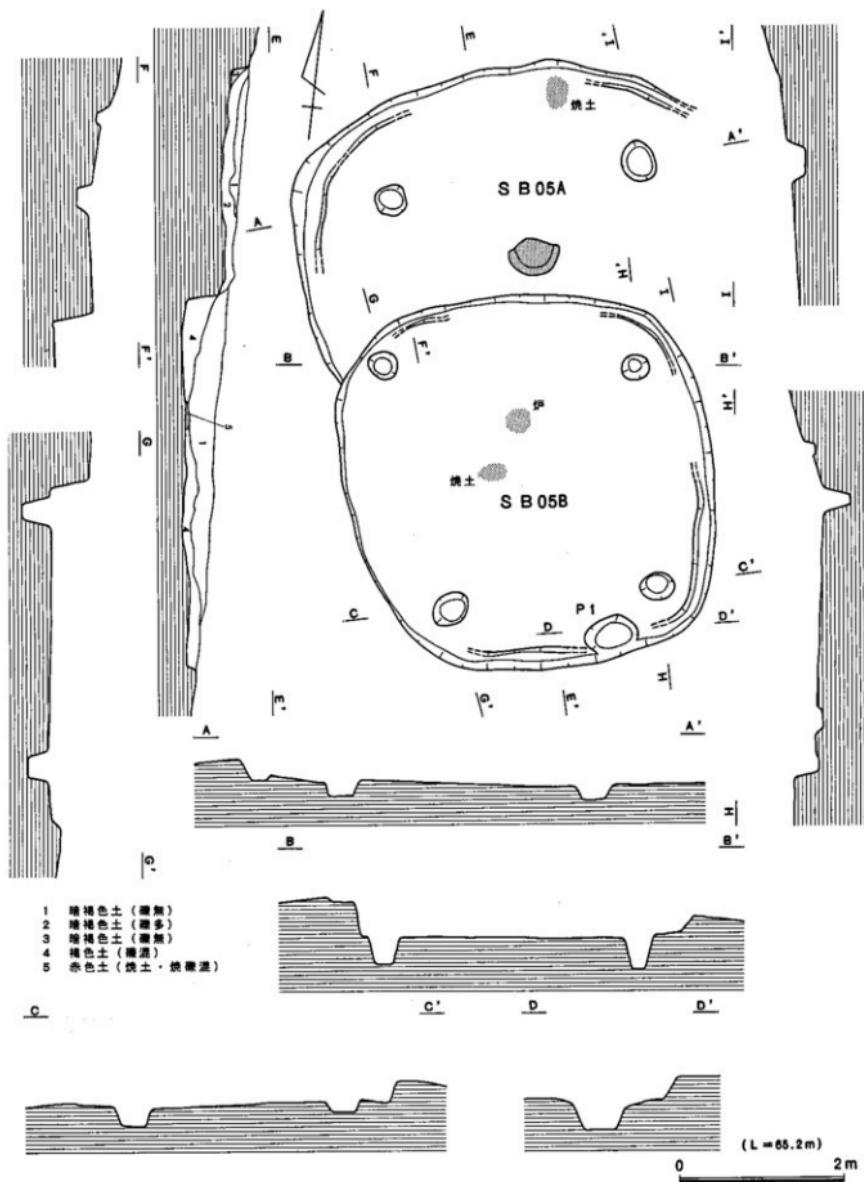
柱穴はコーナー部近くに約 20～40cm の深さで掘られている。柱間は 2.5～3.1m である。

炉は中央やや北寄りに位置している。残存状況は劣悪であったが S B 05A 同様、粘土により土手状の高まりをもった炉であったと思われる。

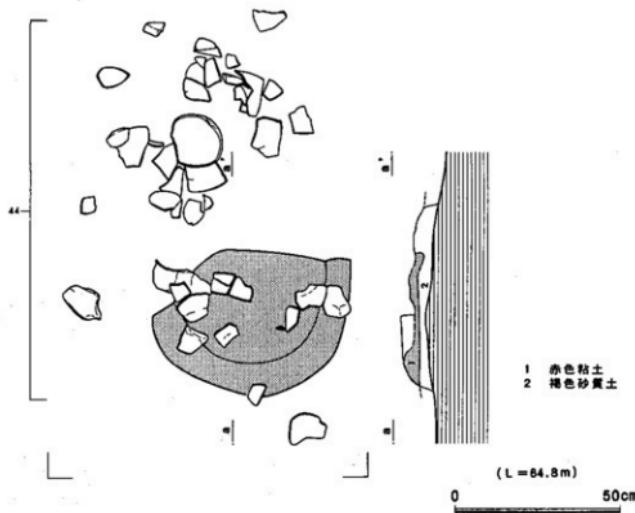
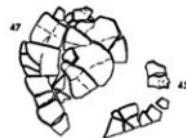
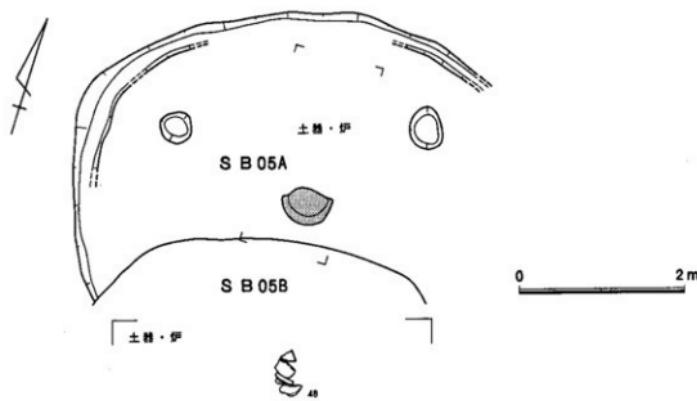
南壁の中央より東寄りに土坑 (P 1) がある。67cm × 42cm の楕円形、深さ 36cm である。底からは壺口縁部 50 と台付甕底部 72 が出土している。

またこの住居跡からは完形に近い土器が数多く出土している (図 22)。他に炉の上には台付甕が乗っていたが、復原・図化はできなかった。完形が少なかった S B 03 とは異なり、居住時の状態に近いと考えられ住居内の生活を復原するための好資料となろう。

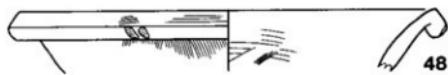
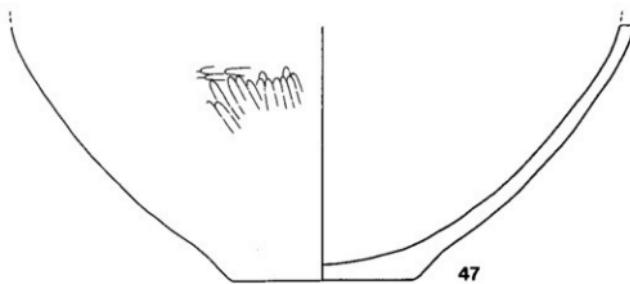
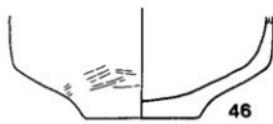
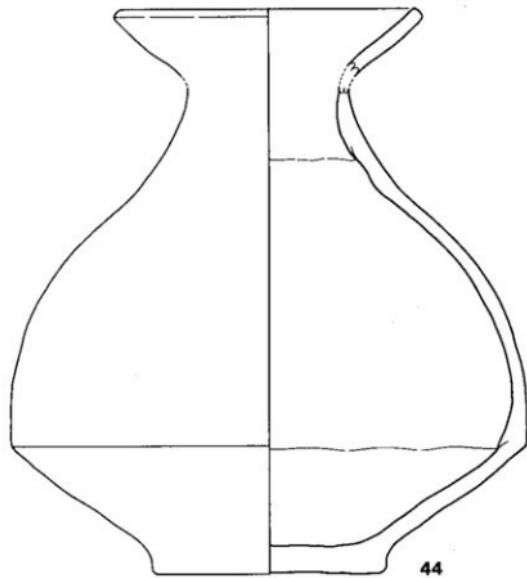
覆土中よりイネと何かが溶けたよう状態の炭化物が出土した。他に炉、焼土、壺 52・台付甕 67 内の土壤をサンプリングし分析を依頼した結果、壺 52 からはイネが検出されている。



第19図 SB 05A+B実測図



第20図 SB 05A 遺物出土状況図



0 10cm

第21図 遺構出土土器実測図 (S B 05A)

S B 05B 出土土器（第 23 ~ 25 図：図版 36・37・39）

49 ~ 61 が壺である。49・50 は単純口縁の口縁部破片である。

51 は複合口縁の口縁部である。摩滅しているため調整等は不明である。

52 ~ 57 は何れも折り返し口縁を持つものである。

52 はほぼ完形で、口縁内面・肩部に 2 段の斜縄文（L R）が施されている。胸部下半にミガキがあるほかはハケ調整と思われる。南よりの東壁に接して倒れた状態で出土している。

53 は口縁内面にくの字に羽状縄文が、端部付近には逆に縄文（R L）が施されている。折り返し部にはヘラ状工具による刺突が細かくなされている。

54 は折り返し部にヘラ刺突、口縁内面にわずかに斜縄文が見られるが摩滅のために詳細は不明である。折り返し部は断面が三角形を呈している。

55 は全面をハケ調整した後、内面に無節の縄文（L）が施されている。結節による S 字状の文様も見られる。端部付近はやや弱い面取りがなされ、R の無節縄文を施し、羽状に表している。折り返し部は断面三角形である。

56・57 は摩滅のため文様は観察できない。56 は折り返し部の断面は三角形、57 では台形である。

58 は同一個体の肩部破片 3 点である。ハケの後に無節の羽状縄文を 3 設施しているが、所々にハケメを残している。58-3 が頭部直下の 1・2 段目、58-1 が 2・3 段目であり、S 字状の結節がある。

59 は頭部から肩部の破片であるが、肩部にはヘラ刺突羽状文が施されている。

62 ~ 72 は壺・台付壺である。

62・63 は口縁部小破片である。62 にはキザミらしき痕跡がある。

65 は口唇部に櫛状工具によるキザミがあり、粉痕も見られる。やや肩が張った器形をしている。大きめの破片ではあるが割れた状態で出土している。復原の結果底部から口縁部までの全体像は把握できるが全体の約半分しか残存していない。

66 もやや肩が張った器形の小型品である。二次焼成を強く受けている。炉の北側やや西よりに 65 の台付壺と一部重なるようにして出土している。

67 は頸・口縁部を失っているものの肩が丸いことがわかる。二次焼成を受けている。北壁やや東よりもほとんど壁に接するように倒れた状態で出土した。

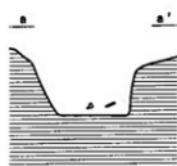
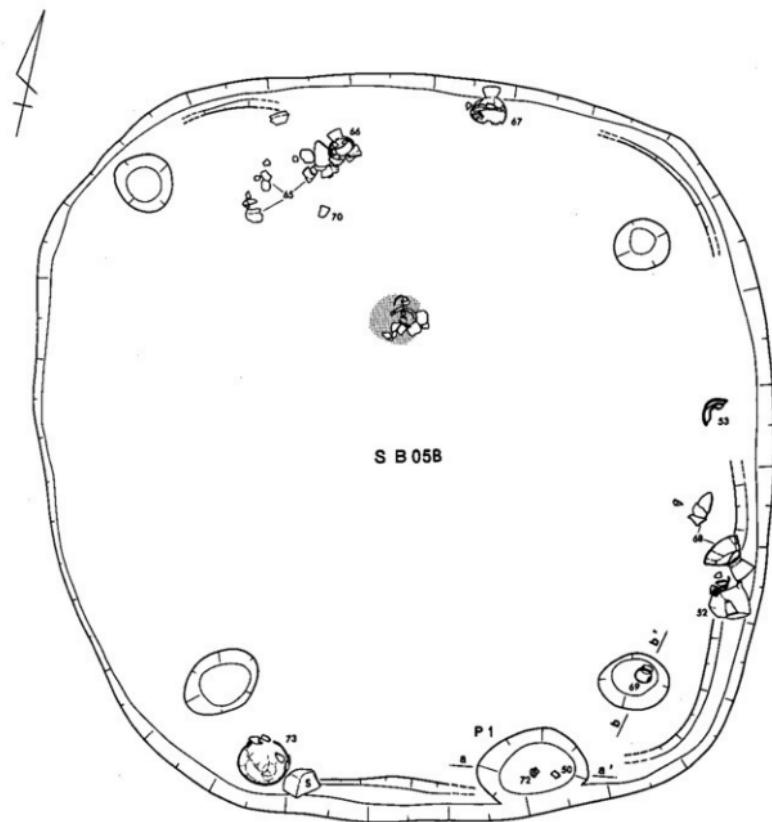
68 は胴下部以下が完存している。粘土接合部で打ち欠いて器台または高坏として使用されていたと思われる。台部との接合部は縦に強く指ナデをしている。台部底径が 14.0cm と大型で、端部は折り返されている。

69 ~ 72 は台部の破片である。70 ~ 72 はいずれも二次焼成の痕跡が明瞭で、ススの付着、赤変・黒変が見られる。

73 は大型鉢で胴は球形を呈している。一部にミガキが観察される。口縁は単純に開きヨコナデで仕上げている。南壁の西端に置かれていた。

74 は口径 9.1cm、器高 3.4cm の小型鉢で、底部は厚く粘土を付け足している。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁はナデで仕上げている。二次焼成によるものか、赤変・黒変が見られる。

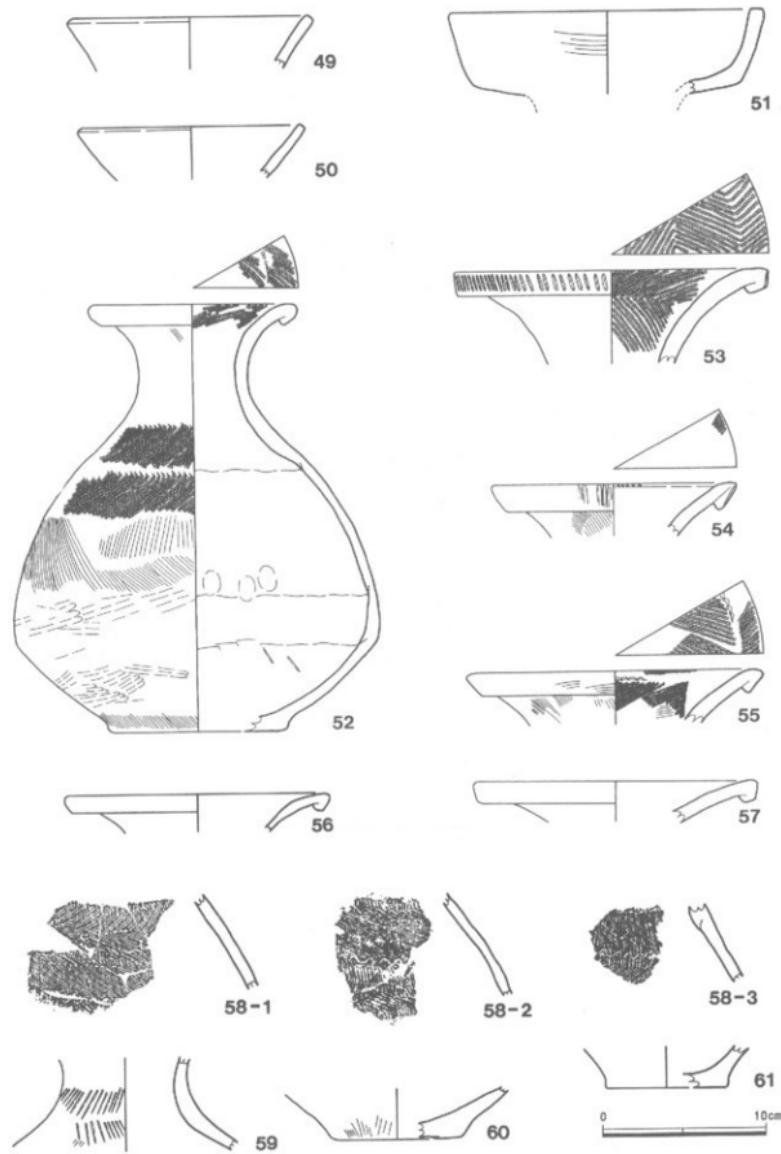
S B 05B からは破片も含め多くの土器が出土している。そのうち完形に近いものは、壺 1、台付壺 3、鉢 1、小型鉢 1 である。また器台または高坏として使用されてと考えられる台付壺の体部下半以下がある。破片と比較して完形の壺が 1 点のみと少ないが、一軒の住居において使用された土器の傾向は示していると思われる。壺は折り返し口縁で口縁内面と肩部に縄文を施すものが主体である。台付壺には大きさの差があり、使い分けていたことが考えられる。高坏はこの住居をはじめ S B 03 以外の住居からはほとんど出土してなく、当遺跡では主要な器種ではなかったと思われる。



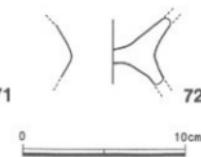
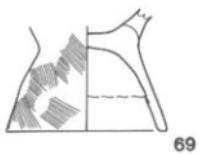
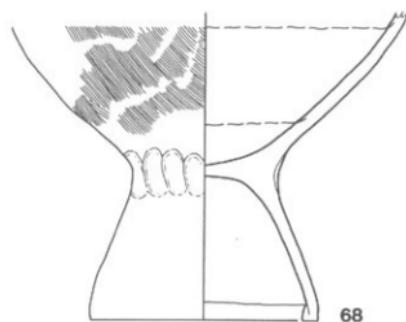
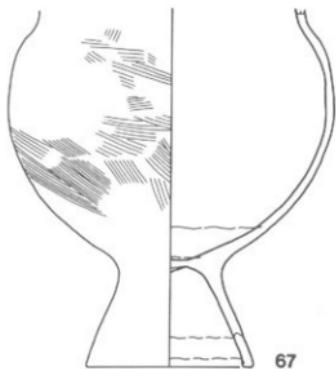
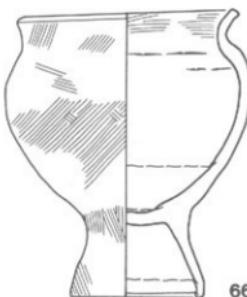
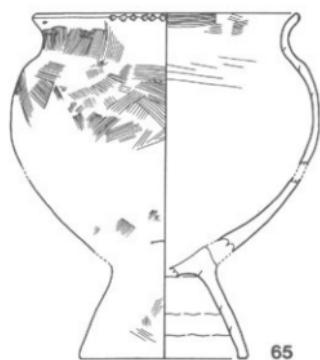
(L = 64.4 m)

0 1 m

第22図 SB 05B 遺物出土状況図

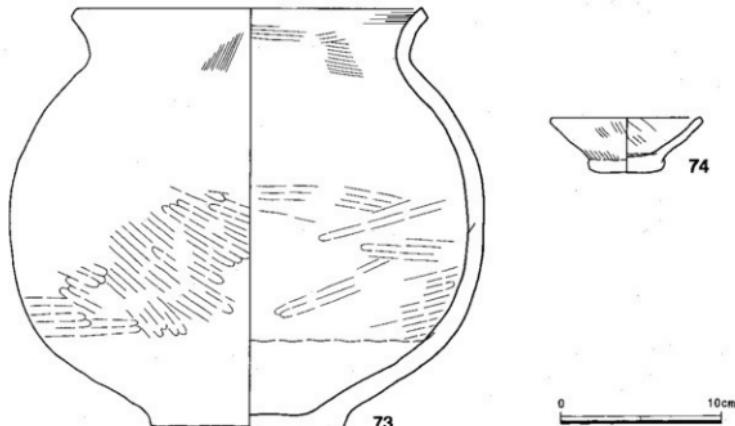


第23図 遺構出土土器実測図 (S B 05B)



0 10cm

第24図 遺構出土器実測図 (S B 058)



第25図 遺構出土器実測図(SB 05B)

SB 07・SX 01 (第26図: 図版12)

C区南、18P、標高66.7mの丘陵頂部に位置する。5.1m×約4.2mの胴張りの隅丸方形である。中央やや東をSX 01により大きく壊されている。壁は南西隅・東壁以外が残っており、ピット(柱穴)3を検出した。炉と柱穴の一つはSX 01によって壊されたと考えられる。

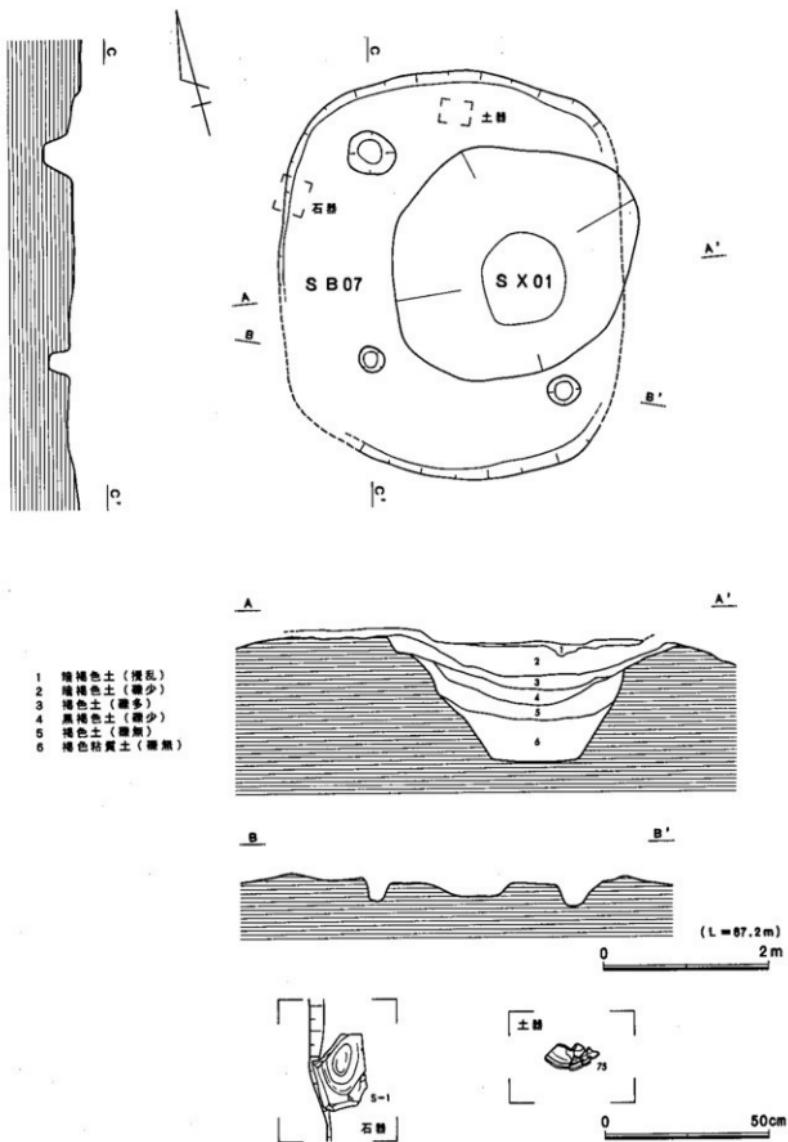
SX 01は直径約3m、深さ1.5mのすり鉢状の大きな土坑である。図26に示した土層2はII層(遺物包含層)であり、調査前においてもくぼみとして残っていた。土坑の西側に土器小破片が散在していた。集落と同時期の遺物以外は出土せず時期は不明である。土層の状態は自然堆積を示している。土器はいずれも小破片であり図化できるものはなかったが、敲石(第65図6)・砾石(第66図21)が出土している。

SB 07 出土遺物 (第27・28図: 図版41)

SB 07は頂部に位置するため流出が激しく、さらにSX 01によって大きく壊されている。遺物は少なく図化できた土器は75だけである。折り返し口縁の壺の口縁部破片で、摩滅が著しく表面の調整等は不明である。

西壁やや北よりに石皿が置かれていた。大きく欠損していて、残存部は長さ21.2cm、幅16.5cm、厚さ6.2cm、重さ2.45kgである。流紋岩質凝灰岩製で様々な使用痕が認められる。出土時に上を向いていた表面は楕円形の大きな窪みができる。その窪みには同心円状にスリによる痕跡が見られる。わずかに残っている縁の平坦面にはトギの痕跡が観察できる。裏面にも中央部にスリによる楕円形の浅い窪みがある。破断の線上には3カ所の凹みがあり、径1.8~2.8cm、深さ5~7mmの穴の半分である。繩文時代の凹石、蜂の巣石と呼ばれるものと同様な痕跡である。側面はトギによる平坦で滑らかな面となっている他、2カ所のタタキによる小さな凹みがある。

所々に被熱による赤変が見られるが、裏面・縁辺部等の使用が見られない部分であり、被熱した後の使用期間がある程度あったと思われる。



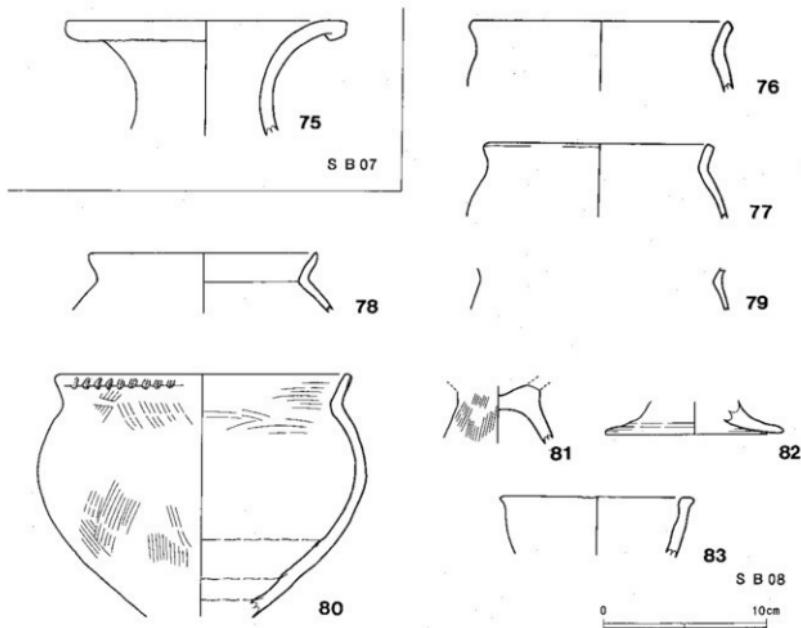
第26図 SB 07・SX 01 実測図

この石皿は当初 30cm×20cm ほどの長方形をしていたと考えられる。裏面の 3ヶ所の凹みを結ぶ線で割れていることから、大きく窪んでいる表面を下にし、凹みに置いた何かを敲いたために割れたと想像できる。割れたことによって表の皿部分が使いにくくなってしまったために、裏の残った部分のほぼ中央を磨る所として使い始めたと考えられる。同時にタタキの台としての凹みは側面に移動している。また当初は置磁石として側面を使用していたものが、その面をタタキに使用するようになると表面の縁をトギに利用するようになったと思われる。

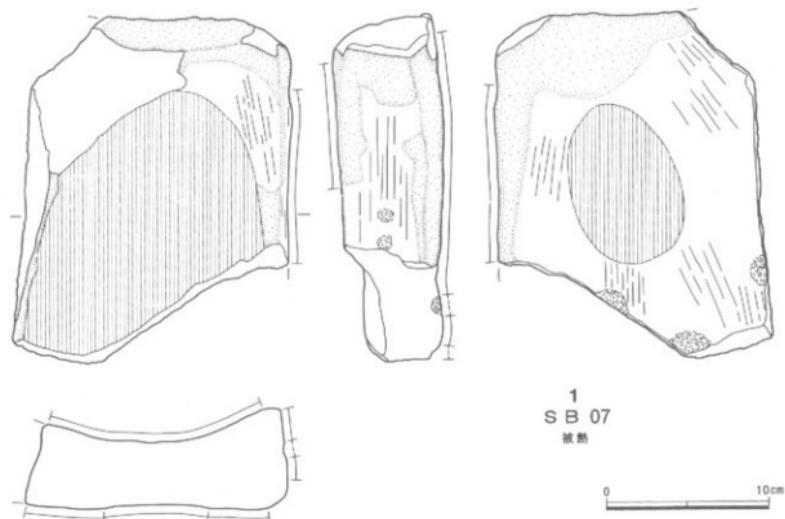
タタキ・スリ・トギと目的に応じ使用する面を使い分けていたようである。そして長年愛用して使いやすくなっていた石皿が割れてしまっても何とか使い続けたが、住居を移る際には壁際に置き去っていったと想像できる。

S B 08 (第 29 図: 図版 13)

C 区南、17 O、標高 65.7 m、S B 07 がある頂部のすぐ南の狭い鞍部に位置する。4.4 m × 約 3.8 m の小規模な住居である。平面形は隅丸方形と思われる。壁は北と南は 24cm ほどのが高さが残っていたが東西は流出している。ピット 5 と炉 2 が検出された。P 1 を切って P 2 が掘られている。ともに深さ 20cm ほどが残っていたが、P 1 上の台付壠の台部が床面上であり、P 2 は深さ 40cm 程であったと思われる。



第 27 図 遺構出土土器実測図 (S B 07-08)



第28図 遺構出土石器実測図(SB 07)

炉2とP1の前後関係としては、P1が埋まってから炉2が使用されている様子がうかがえた。よってP1と炉1、P2と炉2の2段階の建て替えを想定してよいと考える。

一見すると4本の主柱に見えるが、掘り方のプランとピットの配置にずれが見られる。建て替え、規模が小さいことなどから、SB 02同様異なる構造の住居を考えたい。

炉1・2の土壤をサンプリングして分析を依頼したが何も検出されていない。

SB 08 出土土器（第27図：図版37）

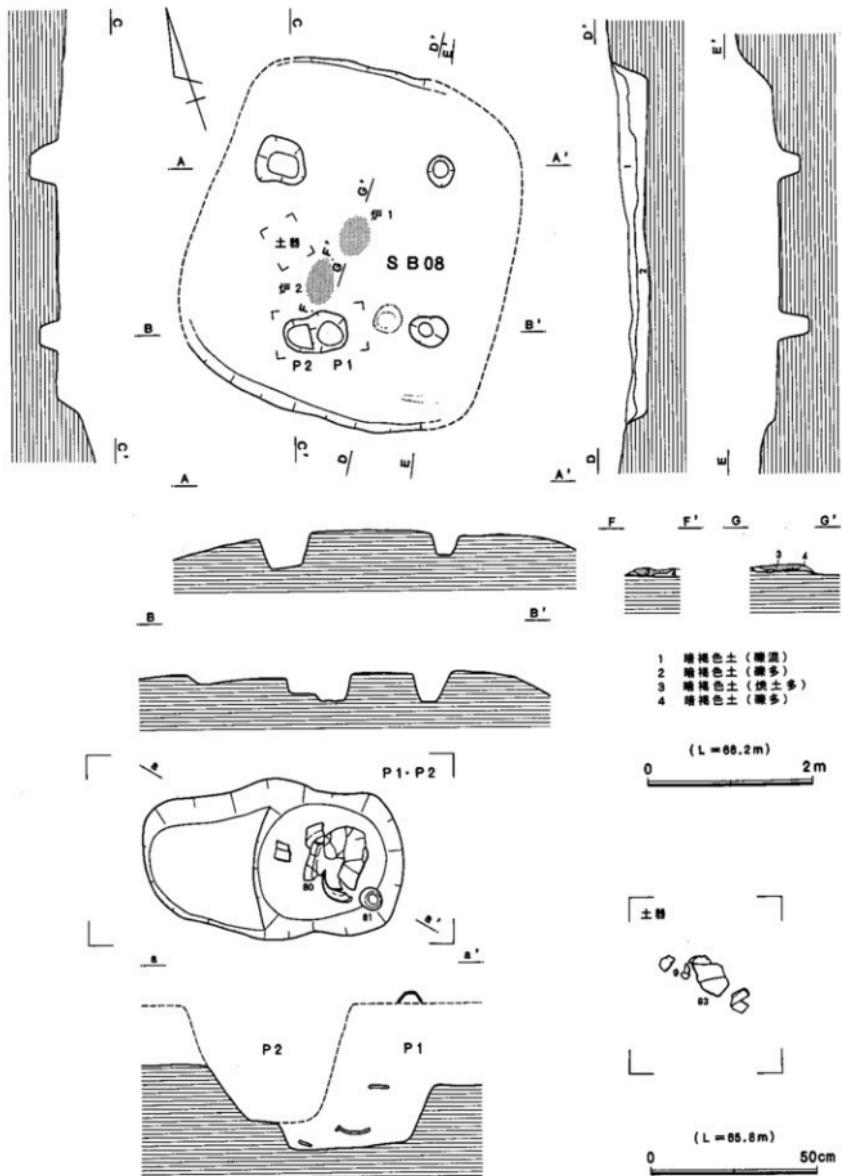
76～79は甕の口縁部片である。何れも小破片であるため全体像は不明だが、口唇部にはキザミがない。

80はP1内より出土している。台部の全てと胴部の約半分を欠いている。口縁はまっすぐに開き、口唇部には櫛状工具によるキザミが施されている。外面と内面口縁部付近・底部にはススが付着し、二次焼成を強く受けたため剥落も多い。

81は台付甕の台部であるが端部は全て失っている。転用も考えられるが摩滅により断定はできない。

82は高壊脚部の破片である。胎土には細かな雲母を含んでいる。端部は指によるヨコナデによって仕上げている。

83は鉢である。口唇部は外につまみ出している。胎土は精製されたものを使用しているが、内面は丁寧に仕上げられてはいない。



第29図 SB 08 施測図

E 区 (S B 09・10A・B・11・12・19・13A・B・14A・B・18・15・16・17・S X 02)

S B 09 (第 30 図: 図版 15)

E 区北、11・12 K、標高 70.8 m、尾根上のわずかな高まり部分に位置する。北壁と南壁のごく一部、ピット 4、炉を検出した。規模が 4.3 m × 約 3.9 m の隅丸方形と推定される。炉は中央北より、ほぼ柱間に位置する。竪穴の深さは最大でも約 12cm しか残存していなかったため、遺物は少なく図化できた土器もなかった。

S B 10A・B (第 31 図: 図版 15)

E 区北、11 J、S B 09 の南わずかに下がってやや広い平坦なところ、標高約 69m に位置する。

S B 10A を約半分切って、S B 10B が作られている。

S B 10A は北壁と炉、ピット 2 を検出したが、根による攢乱が激しく正確なプランは検出できていない。炉はピットの外側、北壁に近いところにある。

S B 10B は北と南東隅の壁と炉、ピット 3 を検出した。ここも攢乱が激しく正確なプランが検出できていない。しかし規模が小さくピットの位置も不規則であることが観察できる。炉は北側のピットに接するような位置にある。

S B 10B からは平根系の鉄鎌の破片 (第 64 図 1: 図版 43) が出土している。

S B 10A・B 出土土器 (第 33 図: 図版 39)

S B 10A 出土で図化できたのは 84 のみである。台付壺の台部であるが、摩滅が激しく表面の調整等は不明である。

S B 10B 出土が 85 ~ 89 である。

85 は壺の肩部片である。櫛刺突羽状文が 3 段施されている。86 も壺肩部片で文様は無節の羽状繩文である。

89 は鉢の口縁部破片である。緩やかに内湾し、端部はヨコナデにより面取りをしている。

S B 11 (第 32 図: 図版 16)

E 区北、10 I・J、S B 10A・B の南、標高 69.8 m の鞍部やや広い平坦面に位置する。

ここも S B 10A・B 同様根による攢乱が激しく、平面形は不確実である。南北の壁とピット 4、炉を検出した。東西の壁は流出している。炉は中央やや北よりに位置しているが、炉以外にも焼土が散布していた。

S B 11 出土土器 (第 33 図: 図版 39)

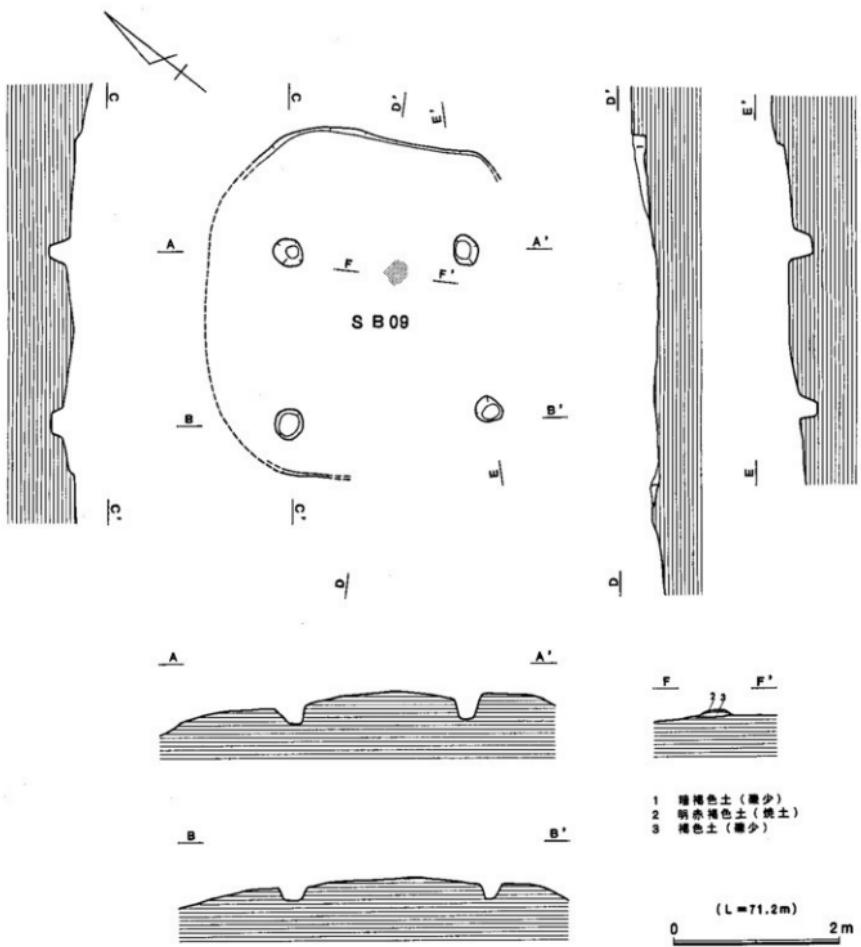
90 ~ 92 は壺の肩部の破片である。90 は貼付突帯の下に櫛刺突羽状文が施文されている。91 も櫛刺突羽状文である。小さな単位で 4 段の施文を行っている。92 も 4 段の櫛刺突羽状文である。

93 は壺口縁部の破片である。折り返し部分はやや薄い台形である。摩滅のため調整は不明である。

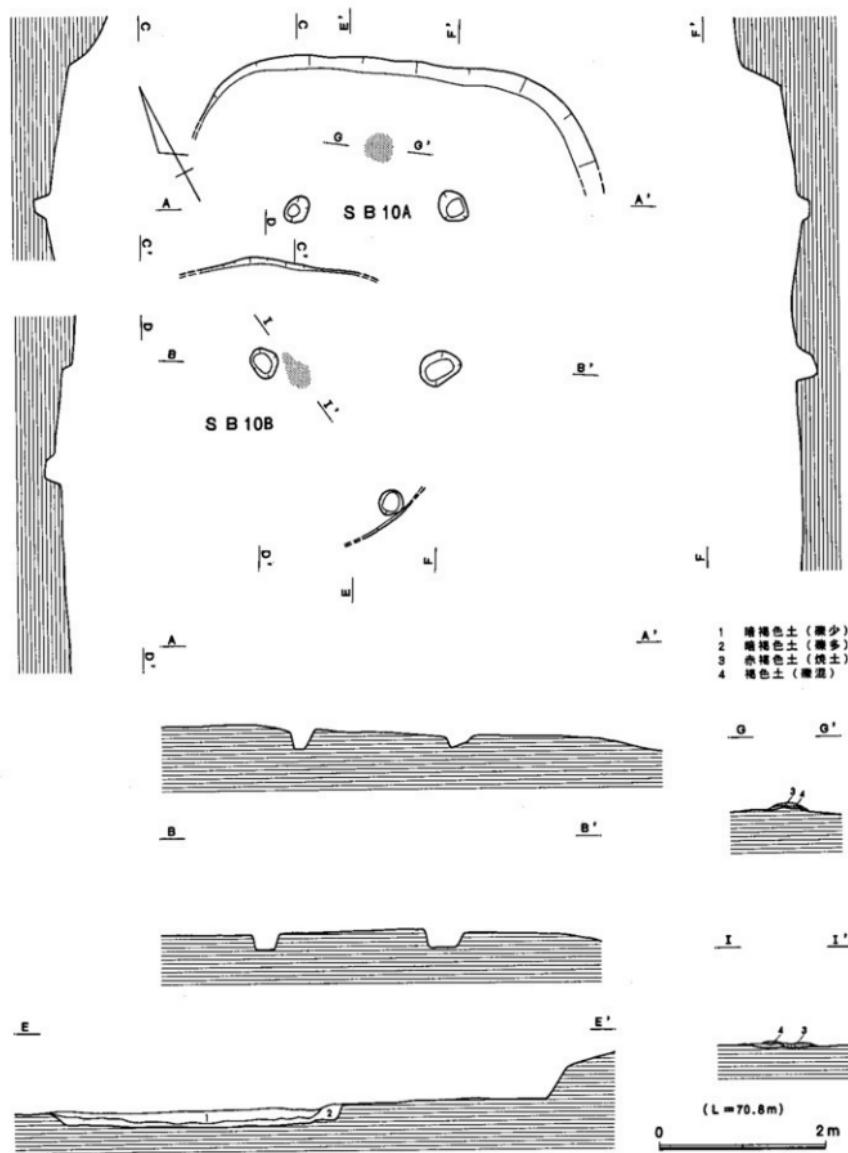
94 は台付壺台部の破片である。内面にはハケの痕跡を明瞭に残している。

95 は壺の胴上部から口縁部の破片である。口縁は短く、開ききっていない。口縁外面の一部にススが付着している。強い二次焼成を受けている。

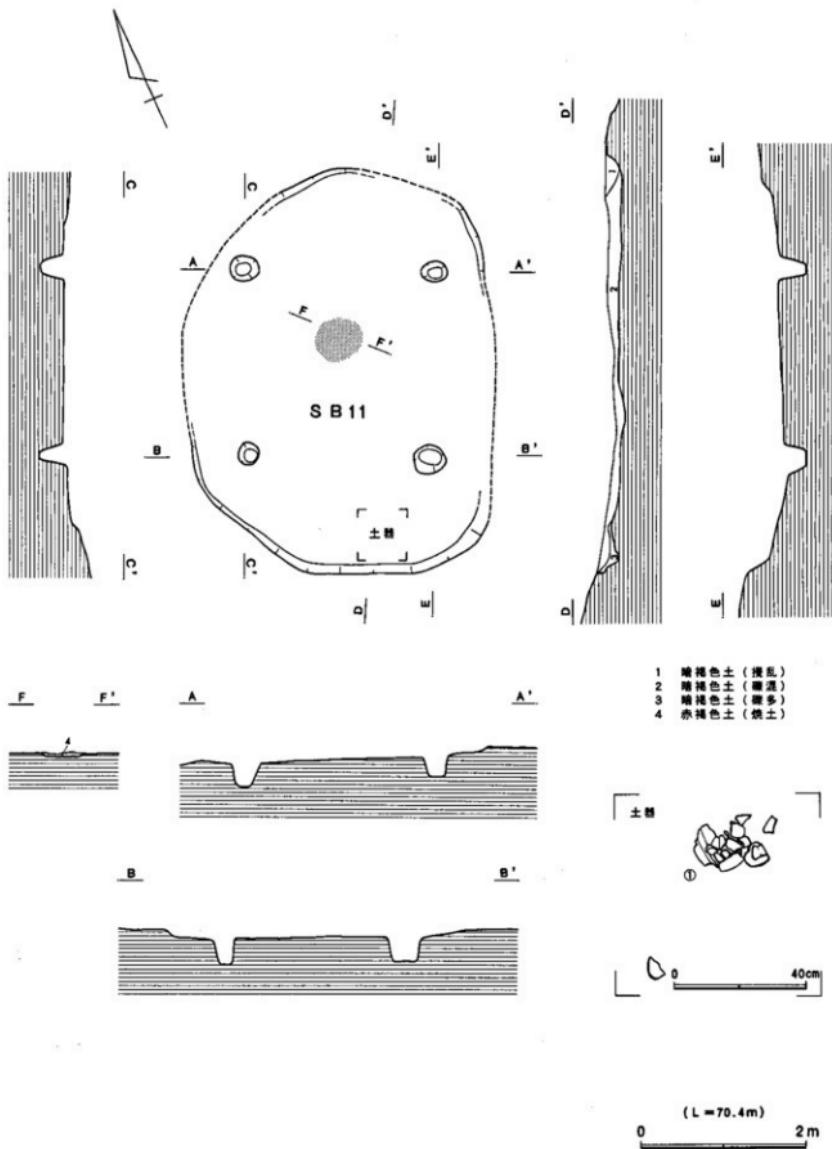
その他として、第 32 図①は台付壺であるがあまりに細片であり、復原・図化ができなかった。



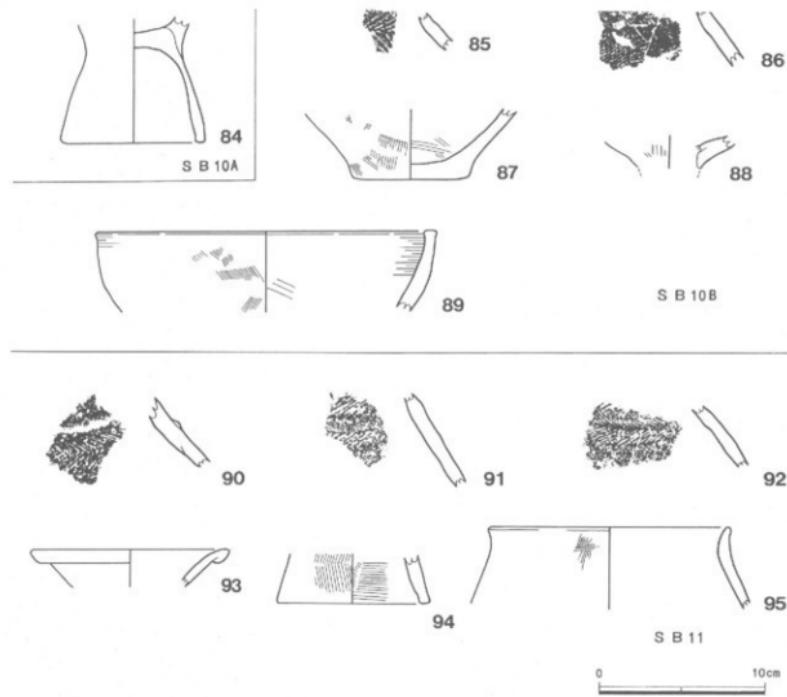
第30図 SB 09 実測図



第31図 SB 10A+B 実測図



第32図 SB 11 実測図



第33図 遺構出土土器実測図 (S B 10A・10B・S B 11)

S B 12 (第34図: 図版16)

E区北、9 I・J、S B 11の南、標高71.3m、尾根の中央の稜線よりやや西側、北西斜面に位置する。約3.6m×4.0mとやや小規模な隅丸方形である。東と南の壁とピット(柱穴)4、炉を検出した。南壁には壁溝がともなっている。柱穴間も1.3~2.0mと小さくS B 02・08・10Bなどに近いが、柱穴は四角く配置され四主柱である点が異なる。炉は中央よりやや西に位置している。

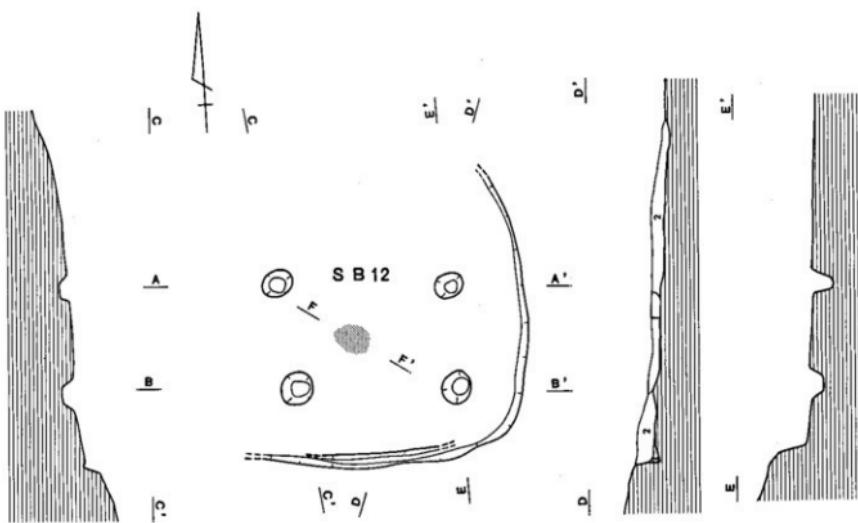
遺物は壁が深く残っていたにもかかわらずほとんど出土せず、図化できるものもなかった。折り返し口縁の壺、縄文が施された胴部片が見られる程度である。

南壁西端近くより筋砥石(第62図34: 図版42)が出土している。

S B 19 (第35図: 図版17)

E区北、8 I・J、S B 12の南、標高73.8mの尾根頂部に位置する。南壁とピット6を検出した。壁のほとんどは流出しているが、ピットの位置から推定した規模は4.8m×4.7mと大きな部類に属する。

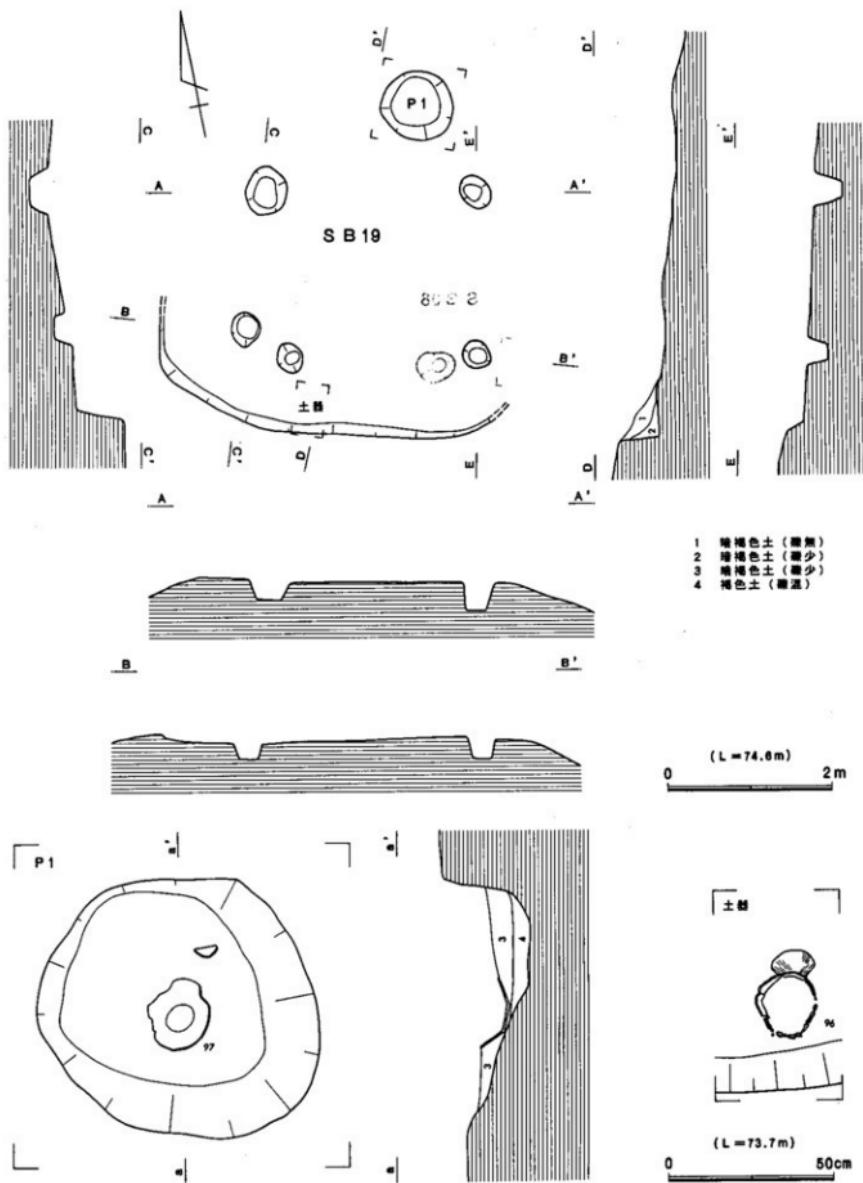
P 1は直径約90cmの円形、深さ28cmの土坑で底から鉢97が正位で出土した。住居の北壁中央より



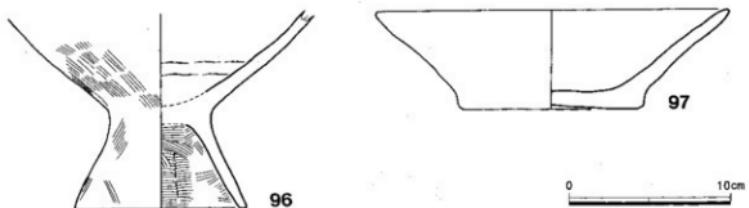
- 1 細褐色土(擾乱)
 2 褐色土(砂多)
 3 細褐色土(砂少)
 4 細褐色土(燒土多)
 5 褐色土(砂多)

(L = 72.2m)
 0 2m

第34図 SB 12実測図



第35図 S B 19 実測図



第36図 遺構出土土器実測図(SB 19)

やや東に位置するものと考えられる。P 1の覆土からは焼土塊が少量出土している。

3辺の壁が残っていないために遺物はほとんど出土していないが、南壁付近に台付甕 96 が出土している。また西側の斜面からは多くの土器片が出土しており、この住居にともなう遺物が流出したものと考えられる。

炉は検出されなかった。

SB 19 出土土器（第36図：図版37）

96は南壁中央には置かれていた台付甕である。胴部下位以下しか復原できなかったが、頸部までの破片があり、ほぼ完形で置かれていたと考えられる。内面にはススが付着し外面は二次焼成を受けている。

97は摩滅のため口縁の判断がにくく壺底部の可能性もあるが、出土状態から鉢としてP 1内に埋設されていたと考えられる。上げ底の底部から直線的に開いて立ち上がっている。

SB 13A-B（第37図：図版19）

E区南、5 I、標高72.7m、尾根のやや長い鞍部に位置する。SB 13Aをわずかに残してSB 13Bが20cmほど深く掘り込まれている。

SB 13Aは住居の南側の約1/3ほどが残っていると思われる。ピット1を検出したのみである。推定される規模が小さいことから、P 1はSB 02・08・10Bのような不規則に配置されている柱穴の一つである可能性が考えられる。

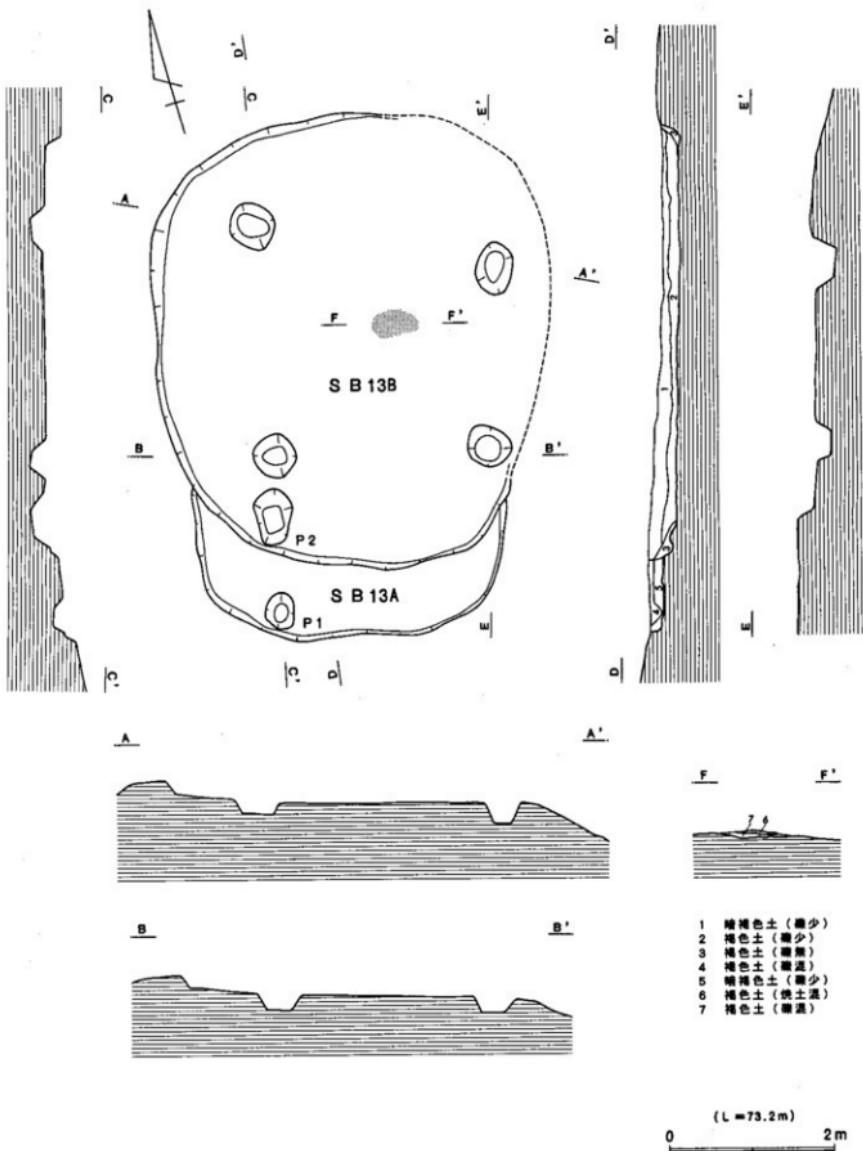
遺物はほとんど出土していないが、団化した台付甕 98 以外に敲石（第60図7）砾石（第65図30）が出土している。

SB 13Bは東以外の壁とピット5、炉を検出した。規模は5.7m×約4.9mとやや大きく、胴の張った隅丸方形である。炉は中央や北よりに位置する。

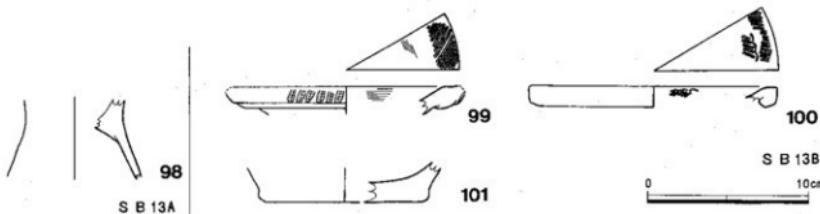
P 2はSB 13AのP 1と同じ位置にあるが、この住居では他の4つのピットが柱穴であり、P 2は柱穴とは異なる目的のためのピットと考えられる。P 2からは遺物は出土していない。

住居内覆土から遺物はそれほど多く出土していないが、1.5cm角ほどの黒耀石の小破片が出土していることが注目される。人工的に剥離されたものであることは観察できるがどのような性格のものかは不明といわざるをえない。

また焼土塊がSB 13A-Bの双方から少量出土している。



第37図 SB 13A+B 実測図



第38図 遺構出土土器実測図(S B 13A+13B)

S B 13A・B 出土土器 (第38図: 図版39)

S B 13A 出土土器で図化できたのは 98 のみである。台付壺の台部の破片で、胸部との接合部分で剥離している。

S B 13B では 99・100 の壺口縁部、101 の壺底部が出土している。

99 は薄い折り返し部分に段を有し、端部は櫛状工具による刺突が施されている。口縁内面を面取り、ハケ・ナデの後、R L の繩文が施されている。

100 は台形状に厚く折り返され、内面に LR の繩文が 2 段施されている。繩文には S 字状の結節がある。

S B 14A・B (第39図: 図版20)

E 区南、3 G、標高 75.3 m の尾根の高まり、北と西の尾根が下がっていく見晴らしがよい所に建てられている。

住居跡の東側部分では基盤層である岩盤がとぎれていって、赤褐色土が基盤層を形成している。北から西にかけての壁と南壁、一部に壁溝が検出されている。柱穴と思われるビット 9 と炉が 2ヶ所検出されていることから少なくとも 2 段階あり、床面がほぼ同じである切り合った住居跡であると考えられる。

柱穴の位置・壁・炉などをあわせて考えると、P 1~4・南壁・炉 1・P 8 からなる 1 軒 (S B 14A)、と P 5~7・北西壁・炉 2 からなる 1 軒 (S B 14B) の 2 軒が考えられる。ビットの数から建て替えも含め、もう一つの段階があった可能性もある。

北壁西端に台付壺台部が他の土器片の上に載った状態で検出された。このことから北壁の住居 (S B 14B) の方が新しい可能性が高いと考えられる。

どちらの炉も基盤層の岩盤を強く焼いていることから、炉を作るにあたっては掘りくぼめたりといったことをせず、そのままの状態で設置していたことがわかる。

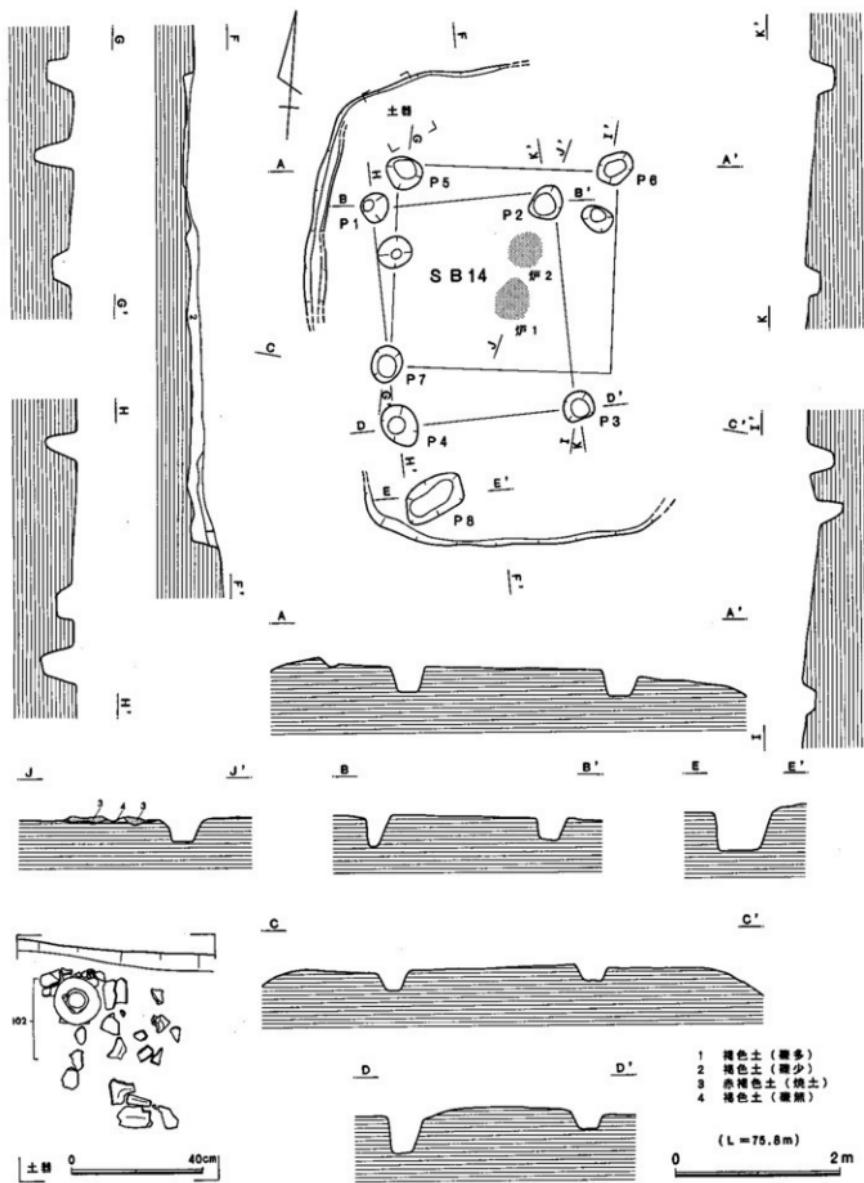
検出面が床面付近ということで遺物の出土量は少ない。どちらの住居にともなうかは不明であるが覆土中より鉈の破片 (第64図2: 図版43) が出土している。

S B 14A・B 出土土器 (第40図: 図版37)

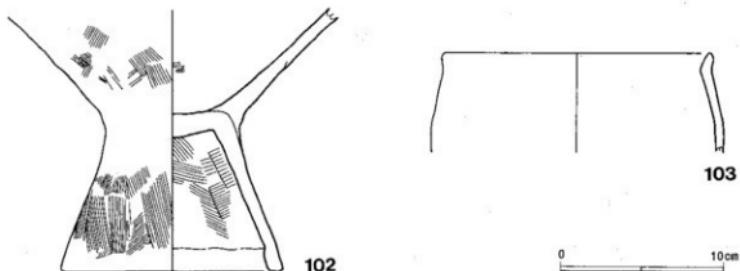
遺物の出土量が少なく図化できたのは以下の 2 点のみである。第39図中に示した台付壺 102 周辺の破片は壺胸部の破片であるがほとんど 102 と接合していない。

102 は台付壺の胸部下半以下である。内底部にスス・炭化物が付着しているほか、台内面上部にもススが付着している。台端部は折り返している。

103 は壺と思われる破片で、胴上部から口縁の部分である。口縁は短いものである。



第39図 SB 14 実測図



第40図 遺構出土土器実測図(SB 14)

SB 18(第41図:図版21)

E区南の南端、2G・H、標高76.1m、SB 14の南、やや平坦な所に位置する。調査した住居の中では最高位に位置する。北西半分を検出したが南東側は調査区外である。

竪穴内には柱穴を検出できず、炉と焼土が見つかったのみである。壁の外にはピットを5つ検出した。壁を失った住居の可能性も考えられるが、調査区境ということともあって確証は得られない。

覆土には土器片が多いが、完形に近いものは壺107のみである。壺107内の土壤は分析を依頼したが何も検出されなかった。また住居の半分が調査区外であることを利用して調査区境の壁面より住居跡内床面直上、覆土床上約20cm、住居外地山直上の土壤をサンプリングし分析を依頼した。

SB 18出土遺物(図42・43:図版37・39~41)

104~112は壺である。

104は単純口縁の壺口縁部片で内面下位に結節の繩文が施文されている。上位はハケメが明瞭に残る。口縁端部にもハケメが見られる。

105も単純口縁である。摩滅が激しいが内面に結節の繩文(LR)がかろうじて観察できる。

106は折り返し口縁である。折り返し部は摩滅のためか丸い感じになっている。

107は頸部以上を尖い胸部以下が完存しているのだが、頸部で切り離されたものと考えられる。器面は横位に丁寧なミガキが施されている。底部には木葉痕がある。

108の2片は接合しなかったが、同一個体の頸から胸部にかけてある。頸から肩にかけて櫛刺突羽状文を3段有する。模式図で示しているが、文様は1/4周で向きを変えて付けられており、転換部では菱形・X状を呈している。頸部内面はヨコミガキによって仕上げている。

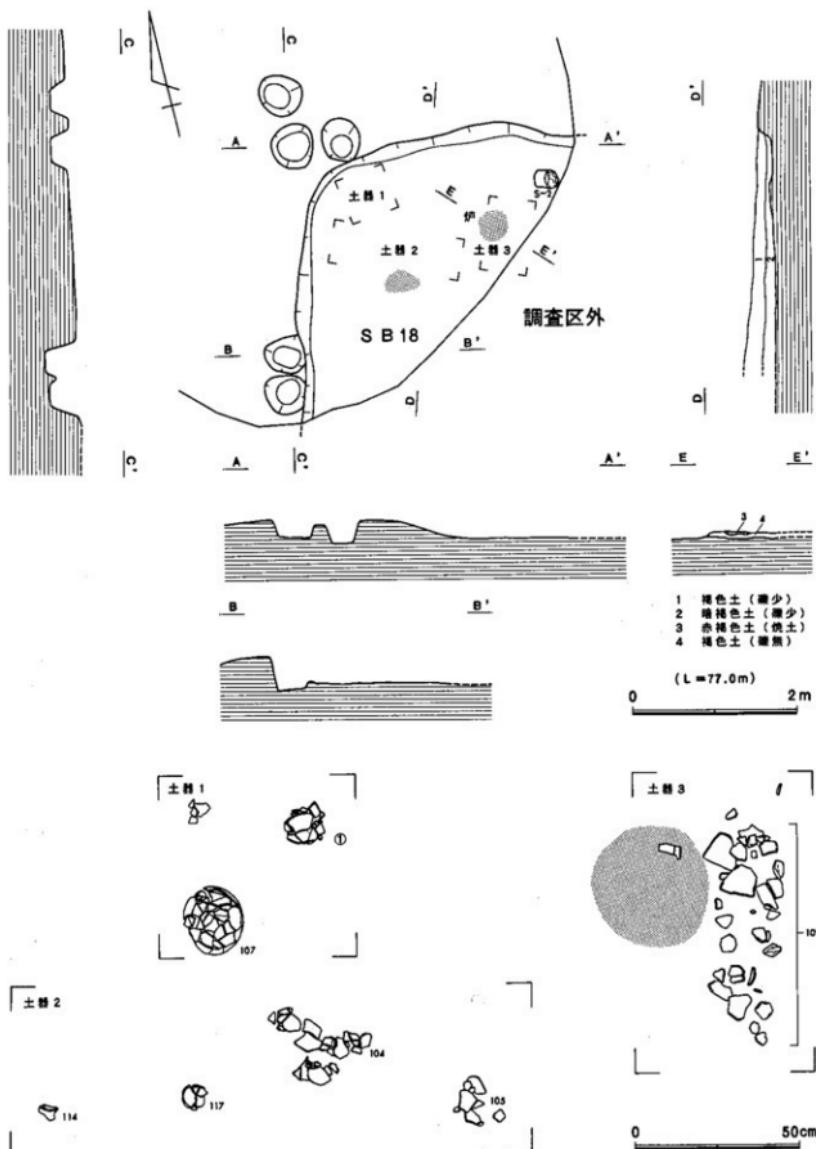
109は大型の壺で底部と肩部~胸部上半である。胸部はミガキ調整で強く屈曲しているようである。

110~112は壺の底部である。

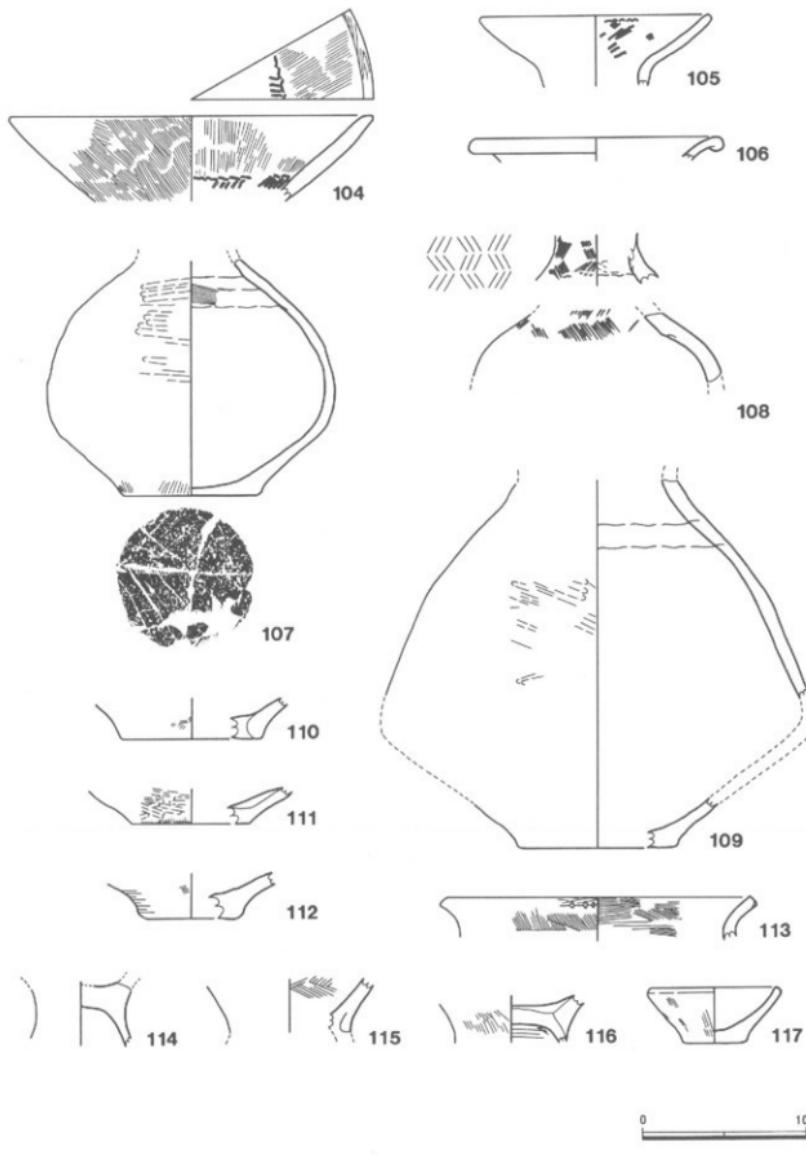
111はミガキが施されている。108と同一個体であると思われる。

113は甕口縁部で、口唇部はしっかり面取りをした後キザミを付けている。内外面ともにススが付着している。

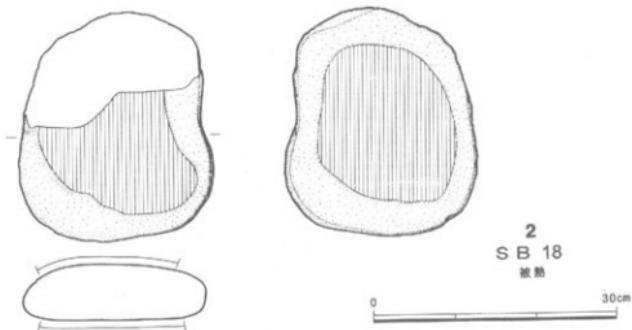
114~116は台付甕の底部と台部との接合部分である。



第41図 SB 18 実測図



第42図 遺構出土土器実測図 (S B 18)



第43図 遺構出土石器実測図(SB 18)

116は大型で、胴の底部分にススが付着している。

117は小型鉢でSB 05Bの74と同様、直線的な器形である。口縁端部は面取りの後ナデているようである。

壺107近く出土の①は壺の破片であるが摩滅が激しく復原・図化できなかった。

住居の北東、炉のすぐそばに台石が欠損している面を上にして置かれていた。

長さ27.8cm、幅23.0cm、厚さ6.8cm、重量6.56kgの中粒砂岩である。中心で2つに割れていて、さらに上面は3分の1ほどが欠損している。上下両面の中央付近はスリまたはトギといった使用により滑らかな面となっている。剥離面付近にはわずかにタタキのような痕跡が見られる。上面は凸だが下面是中央部がやや凹んでいる。全体に火を受けており断面の中心部まで赤変している。

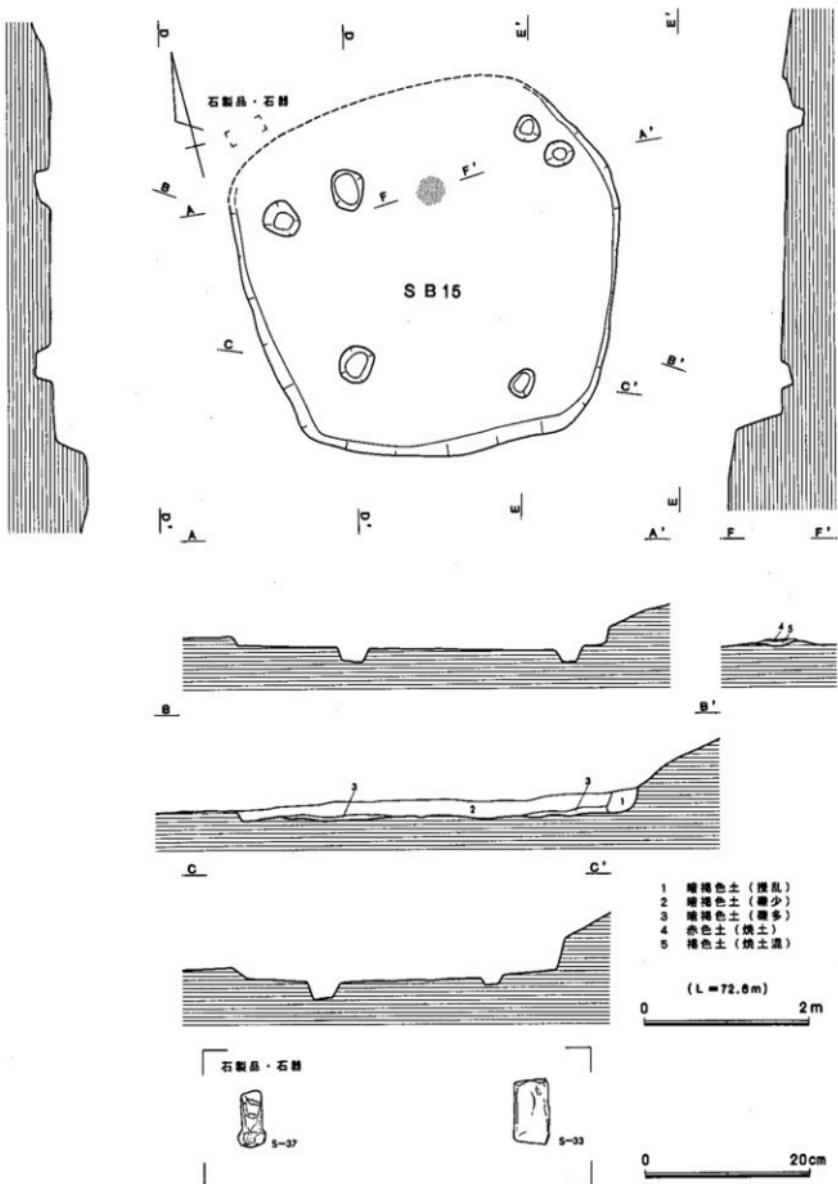
S B 15 (第44図: 図版22)

E区南、4F、標高71.3m、SB 14の頂部から西に延びる尾根の斜面や北寄りに位置する。根による擾乱があり平面形はやや不明確である。規模は約4.7m×4.6m。北以外の壁、ピット6、炉が検出されている。深さは最大で39cmある。6つのピットは深さが20cm前後と何れも浅く、そのうちの4つを柱穴として選び出すことはできない。炉は中央北、ピットの間にある。検出できた焼土層は非常に薄いものであった。

立地が尾根の稜線上からややすれている点でSB 12と似ている。

推定プランの外側ではあるが北西より石棒(石劍: 第63図39: 図版42)と砥石(第62図33: 図版42)が30cmほど離れて出土している。石棒は縄文時代の遺物と認められ集落の時期とは大きく異なるのだが、覆土の流出、砥石と接近して出土していることを考えあわせると本来住居内にあったものと考えられる。

SB 15は床面付近から完形に近い土器は出土せず、覆土中から多くの破片が出土している。住居を廃絶した時に土器は持ち去り、その後埋みとなったところに土器を廃棄していたと考えられる。



第44図 SB 15 実測図

S B 15 出土土器 (第45図)

118～121は壺の口縁部片である。118は単純口縁で直線的に開くものである。摩滅剥離が著しい。
119以下は折り返し口縁で摩滅のためかいずれも折り返し部分が薄くなっている。119は焼きひずみがあり、折り返し部も均一でない。

122からは甕である。122は内面ヨコハケ、外面ナデ調整で、口唇部に櫛状工具によるキザミが斜めに施されている。

123から126は摩滅が激しい小破片であり、不明な部分が多いが、みなキザミを持たない。

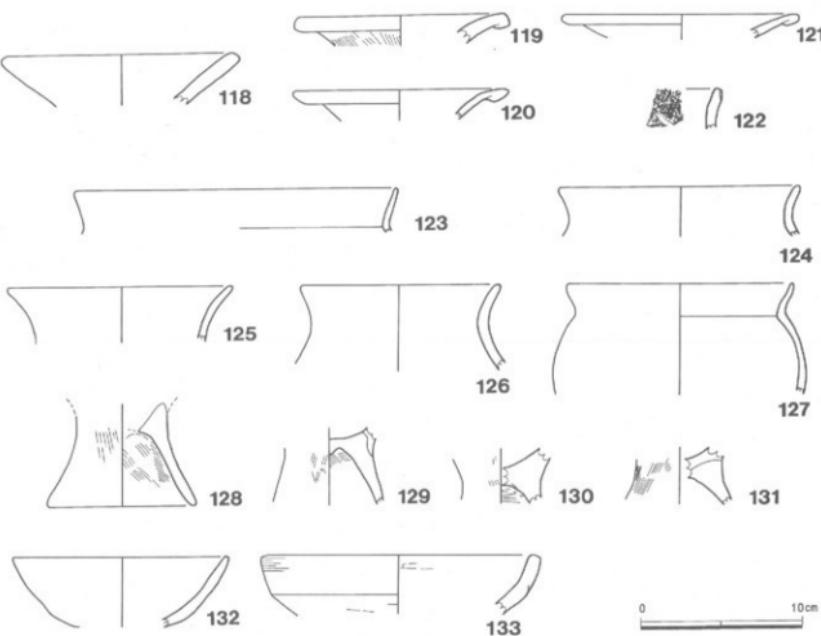
127は比較的大きな破片で、球形をした胴部にやや内湾した口縁部を持つ。

128は台付甕台部で、内面上部にはやや光沢のある炭化物が付着している。

129は台部の破片で二次焼成を強く受けている。台部内部の中央がヘソ状に突出している。

132は高環の坏部で、稜を持たずゆるやかに内湾している。

133は鉢の口縁部である。摩滅しているが、内外面ともにミガキの痕跡が見られ、端部はヨコハケにより仕上げている。



第45図 遺構出土土器実測図 (S B 15)

S B 16 (第 46 図 : 図版 23)

E 区南、4 C・D、標高 67.7 m、S B 14A+B の頂部から西に延びる尾根の緩斜面に位置する。推定で $3.7 \text{ m} \times 3.6 \text{ m}$ とやや小型である。北と東の壁とピット 5 が検出された。

明瞭な炉・焼土はなかったが、P 1 と P 2 の中間の地山に火を受けた痕跡が見られた。炉の位置を示していると考えられる。

P 3 のすぐ横で完形の鉢 138 と小型の壺 134 が置かれたような状態で出土している。

鉢 138 内の土壤を分析依頼したが炭化物等は何も検出されなかった。

S B 16 出土土器 (第 48 図 : 図版 38)

134・135 は小型壺である。

134 は下ぶくれの胴部で最大径付近に稜線を作っている。頸部より上は不明である。外面は全体的に磨かれているようであるが一部にハケの痕跡を残す。

135 は小さく突出した底部に球形の胸を持っている。胸上半部より上は不明である。内面にはヘラの痕跡、外面にススの付着がみられる。

136 は壺の底部片である。底の部分は厚みがある。摩滅が激しく調整等は観察できない。

137 は台付甕台部である。胴内面の底部分に炭化物が付着している。

138 の鉢は大きめの底部から直線的に開き、口縁部でややすぼまる、植木鉢のような形をしている。一部にハケが残るが大部分は摩滅・剥離している。

S B 17 (第 47 図 : 図版 24)

E 区南、5 B、標高 65.3 m、S B 16 の西、さらに西へと延びる尾根が高まりとなる直前の鞍部に位置する。平面形は $4.1 \text{ m} \times 3.7 \text{ m}$ のやや胴張り隅丸方形で、壁が全周残っている。ピット 4、炉を検出した。深さは 26cm を計り、残存状況はよいものである。

柱穴は全体的に南西にずれとこに位置し、南西の柱穴は壁のコーナー部分に接してしまっている。焼土は北西の柱に近いところに位置する。

北のコーナー部付近で台付甕の台部 142 と磨石 (第 60 図 8) が出土した。

豊穴が全周、比較的深く残っていたが遺物の出土量は少なかった。

S B 17 出土土器 (第 48 図 : 図版 38・40)

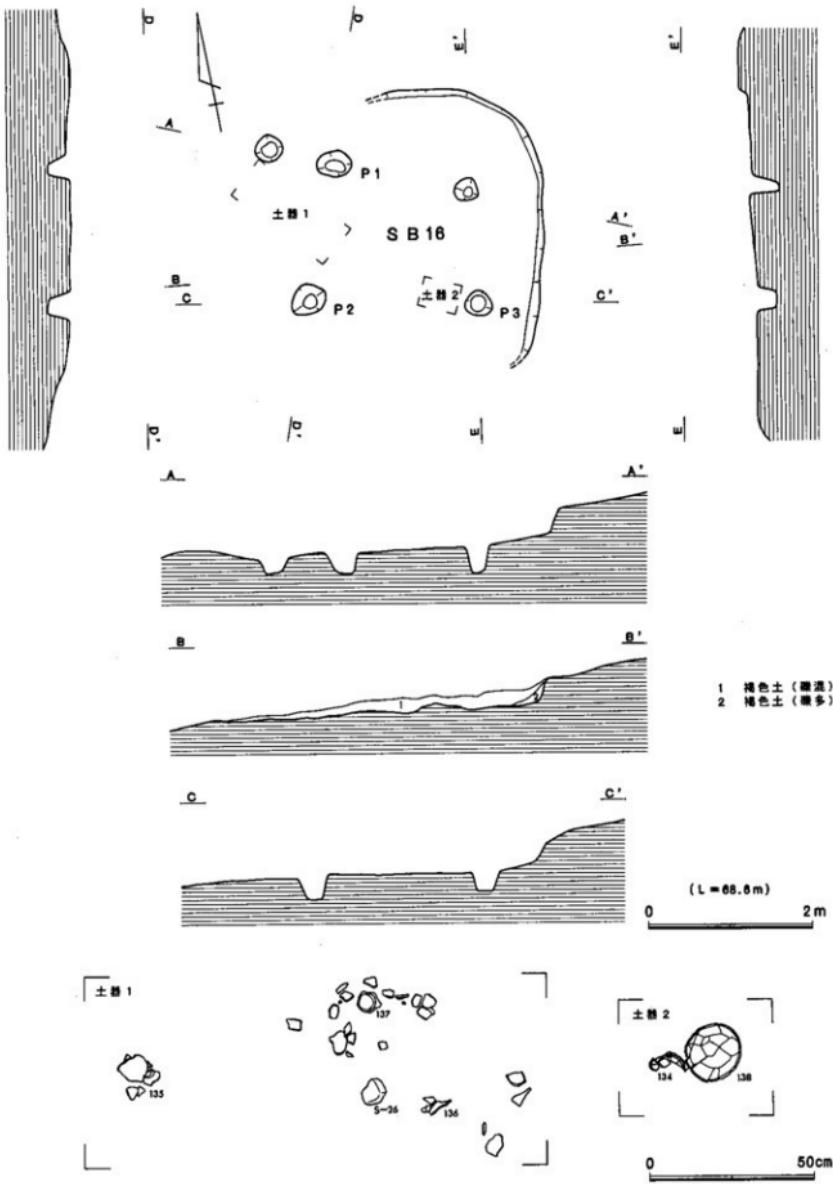
139 は壺の肩部である。くの字状に櫛刺突羽状文が付けられているが、櫛目の痕跡はごくわずかに観察できる程度である。

140 と 141 は甕の口縁部片である。

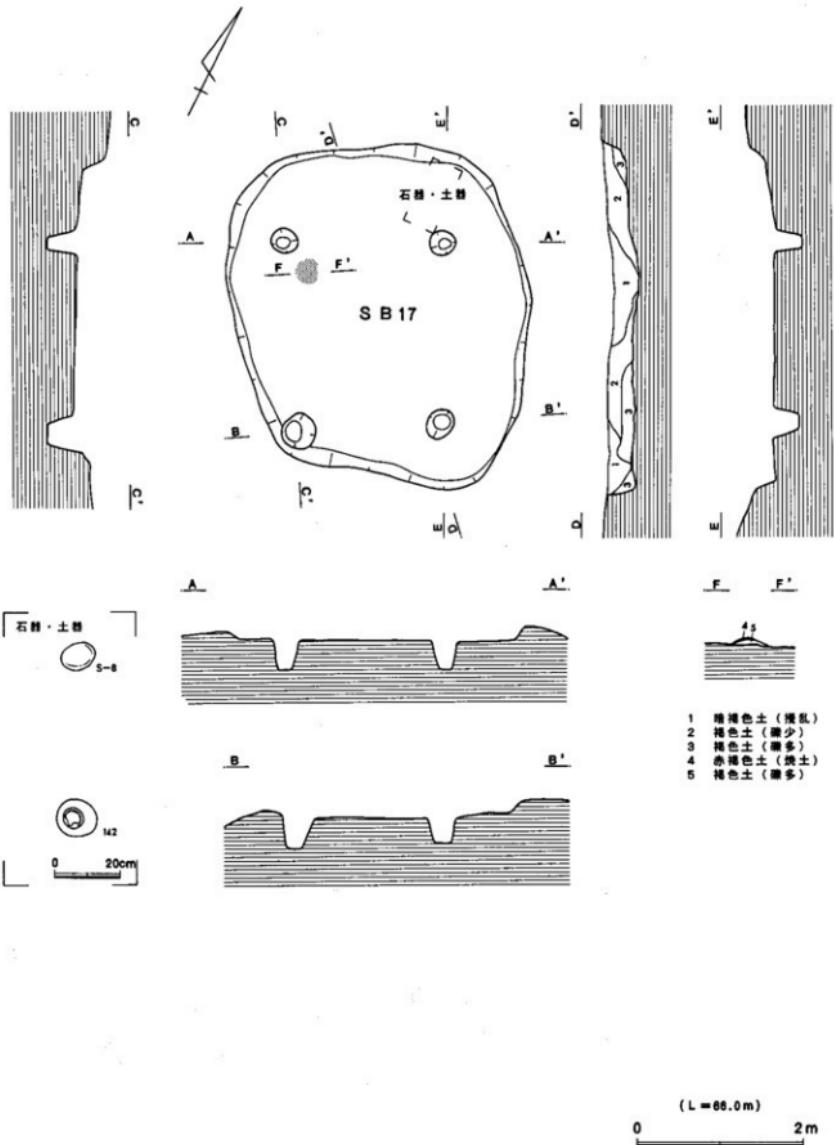
140 は内外面ともにススが付着している。口縁はあまり開かない形状である。

141 はやや直線的に開く形である。摩滅が顕著である。

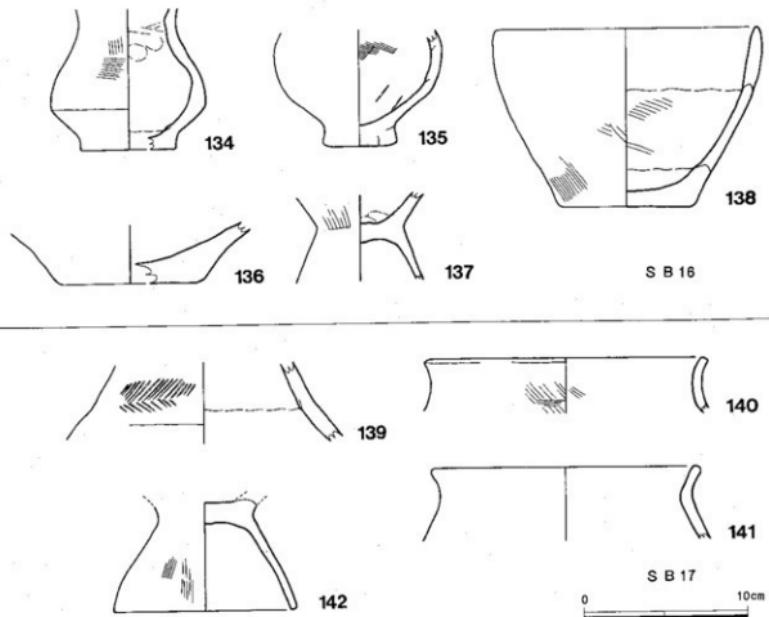
142 は台付甕の台部がすべて残存している。形はやや内湾気味である。胴部を意図的に切り離した転用品の可能性が考えられる。



第46図 SB 16 実測図



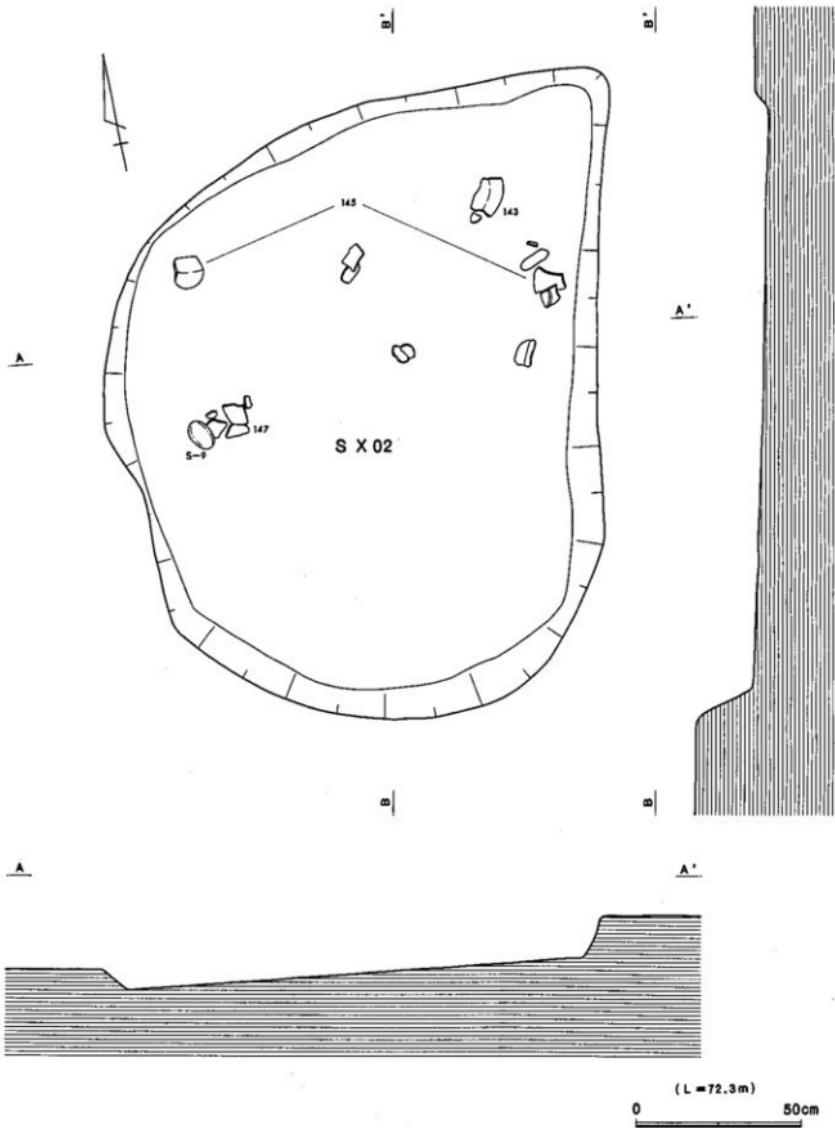
第47図 SB 17 実測図



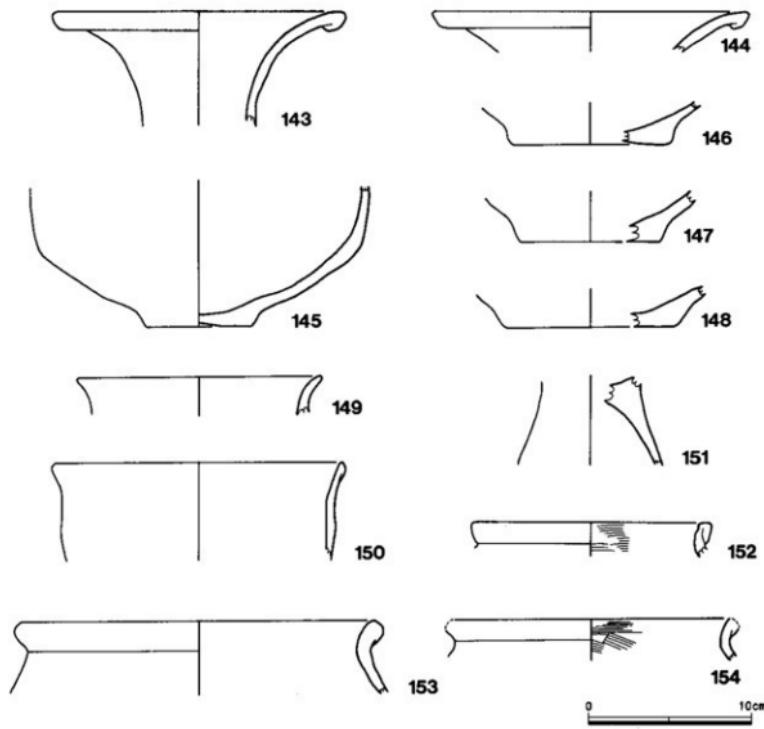
第48図 遺構出土土器実測図(SB 16・17)

S X 02 (第49図:図版19)

E区南、6I、SB 13A・Bの北約4m程のところ、尾根の稜線の中心よりやや西にずれて位置している。長径1.9m・短径1.5mの不整形な椭円形状で、検出面からの深さは11cmと大きさの割には浅い土坑であったと思われる。皿状に掘り込み、底はほぼ平らで斜面に従って傾斜している。覆土からは多くの土器片が出土しており、廃棄土坑のような性格が考えられる。敲石(第60図9:図版42)も出土している。



第49図 S X 02 実測図



第50図 遺構出土土器実測図(S X 02)

S X 02 出土土器(第50図)

143～148が壺である。143・144は口縁部、145～148は底部である。

143・144は折り返し口縁である。143は頸部以上で頸は長く口縁に向かってゆるやかに外反している。摩滅しているが折り返し部は台形状を呈していることがわかる。144も断面が台形状をした折り返し部分を持っている。

145は上げ底、胴は下ぶくれしている感じである。

149・150は甕口縁部である。150は口縁部を外面に肥厚させている。

152～154は甕の口縁部破片で152と154は同一個体の可能性がある。口縁部外面に粘土を貼り付けることによって口縁部を肥厚させ、内面はハケで仕上げている。外面は摩滅により不明である。

G区 (S B 20・23)

S B 20 (第51図: 図版26)

G区、14・15 G、標高60.7m、中央の尾根から北西に延びる尾根の鞍部に位置する。堅穴の規模は3.4m×3.4mと小規模なものである。南北の壁は残存しているが、東西は流出している。南北の壁には壁溝が伴っている。ピット2、炉を検出した。ピットは堅穴の南よりに位置しているが、壁のラインとはずれている。

炉は中央よりやや北側に位置し、粘土で作った高まりが観察できる。一部壊れているがS B 05Aと同様に半円形に巡らせていましたと考えられる。

炉の周辺に炭化材が検出され、住居西半分には所々焼土のまとまりが見られた。しかし明確な焼土層は認められず、焼失住居の可能性は低い。炭化材の樹種は広葉樹(散孔材)とアカガシ亜属という同定結果が得られた。

住居の南、ピットの中間に台石(第53図3)が置かれている。

炉の土壤を採取、分析を依頼したが何も検出されなかった。

S B 20 出土遺物 (第52・53図: 図版39)

155と156は折り返し口縁の壺である。

155は直線的に開き、折り返し部は薄い。折り返し部外面にヘラ状工具によるキザミが施されている。端部はハケにより面取りがなされている。

156は直立気味の口縁部分である。摩滅のためもあるが折り返し部は厚さが2mmほどと薄いものである。

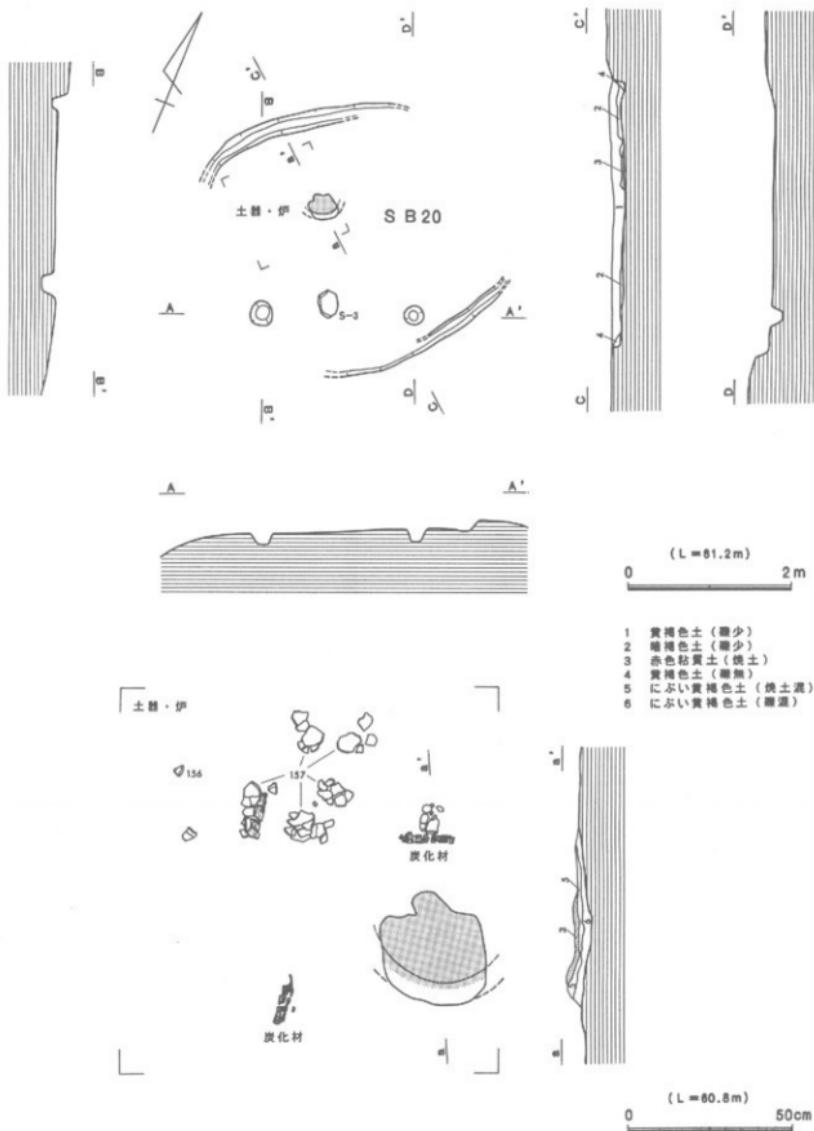
157は台付甕胴部の破片で、口唇部には明瞭にキザミが施されている。内外面ともにスヌの付着が目立つ。

台石は長さ33.4cm、幅21.6cm 厚さ6.4cm 重量7.49kgの龜の甲羅のような形をした粗粒砂岩である。上下面の一部は強く火を受けて赤変している。両面ともに中心付近は磨られ、その周りにタタキの跡が多く見られる。上面はやや凸、下面は皿状にわずかに湾曲している。また下面の縁の一部は斜めの研ぎ面となっている。

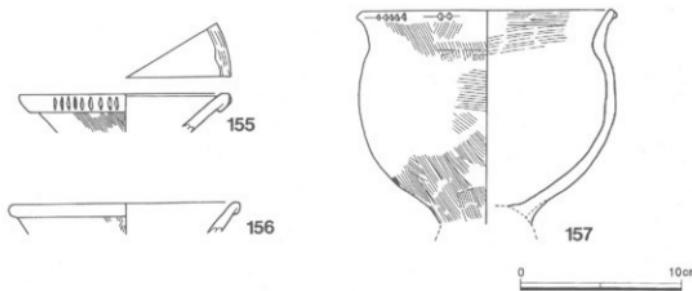
S B 23 (第54図: 図版27)

G区14 H、S B 21のすぐ東側に位置する。尾根が東に向かって下がってゆくところにわずかな平坦面を形成して、ピットが2つと焼土(炉)のみが検出された。細い丘陵鞍部であるため、他の柱穴とともにすべての壁が流出した堅穴住居跡であると考えられる。S B 21とは4mほど離れて存在し、尾根の中央よりわずかに南にずれて建てられていたと思われる。ピット間の距離は2.9mとやや大きめの住居であったようである。

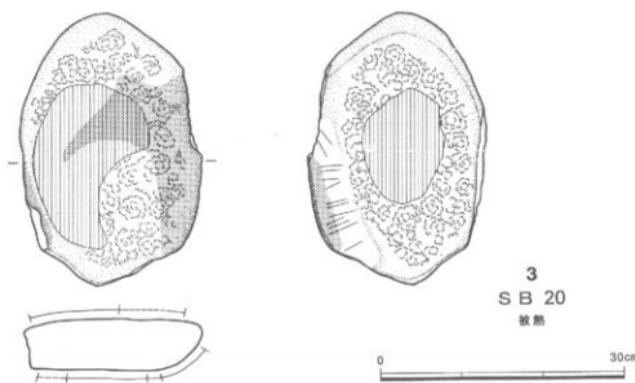
特にこの住居に伴うと考えられる遺物は出土していない。



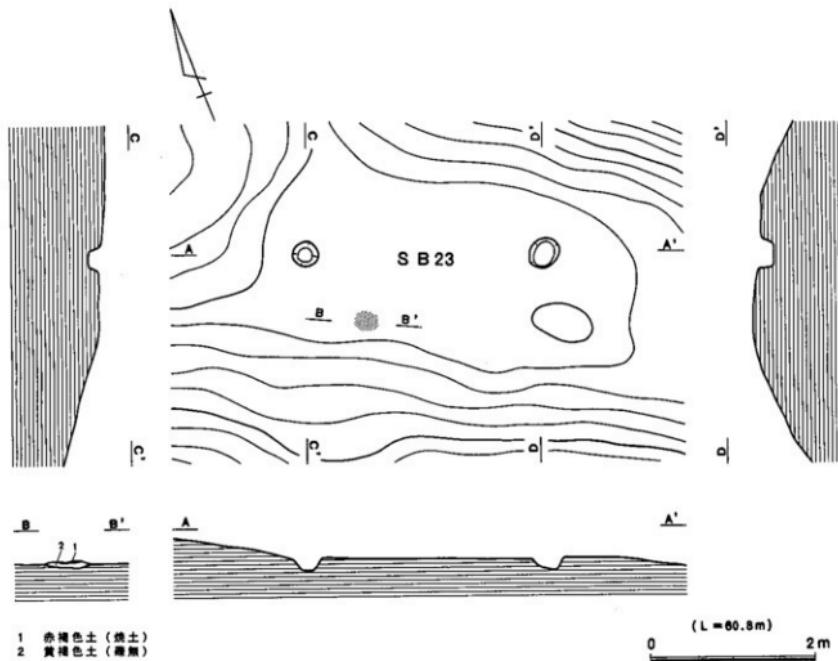
第51図 SB 20実測図



第52図 遺構出土土器実測図(SB 20)



第53図 遺構出土石器実測図(SB 20)



第54図 SB 23実測図

H区 (SB 21)

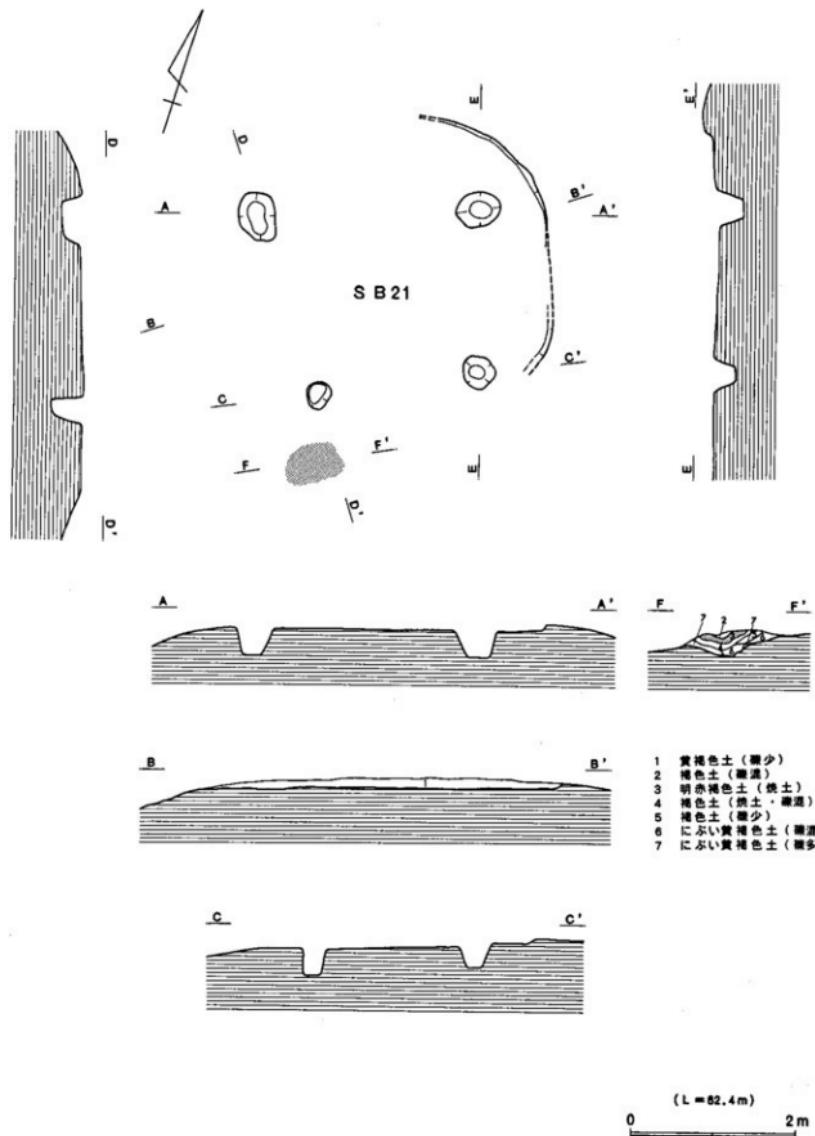
SB 21 (第55図: 図版26)

H区、20C・D、標高62.1mの頂部に位置する。推定3.9m×4.1m。東の壁とピット4、焼土を検出した。

焼土は住居の南西、柱穴の外側に位置し住居の壁付近である。基盤層が激しく焼けており、位置、焼け方など他の住居とは様相を異にしているため、住居とは関係のない後の時代の遺構の可能性を考えられる。

SB 21は単独で検出されたが、G・H・I区は茶畠として利用されており改植等により付近の住居は破壊されてしまっている可能性が高い。

流出が著しく図化できるような遺物は出土していない。



第55図 SB 21 実測図

(2) その他の遺物

遺構外出土土器

遺構外、包含層より出土した土器を以下に示す。遺構外ではあるが細く長い調査区、丘陵の稜線上と
いう地形的な理由から関連する遺構が推定できるものが多い。よって調査区ごとに紹介していく。

A区北（第 56 図：図版 38）

何れも 32 P より出土していることから、S B 22 にともなう遺物と考えられる。

159 は高環もしくは器台の脚部である。わずかに 1ヶ所の穿孔部が残っている。

160 は確認調査時に 32 P 付近より出土した高環もしくは器台である。穿孔は 3ヶ所が認められる。外
面にはハケの痕跡が顕著である。

B区北（第 57 図：図版 38・40）

遺物は主に南斜面より出土している。S B 02・ピット列に関連した遺物と考えられる。

163 は壺口縁の破片である。内面に羽状繩文（単節）が施されている。

165 は高環脚部である。環部との接合部は突起となっている。残っている部分では穿孔は見られない。

167 は小型鉢である。底は平底で厚みがある。摩滅が激しいが外面脚部下半にミガキの痕跡が認めら
れる。球形の胸にわずかに外に開く口縁を持っている。

B区南（第 57 図）

S B 03 周辺、北斜面より出土しており、S B 03 にともなうと思われる。S B 03 同様高環の量が際
だっている。

172～176 は壺・台付壺、177～183 は高環である。

180 は脚部の破片である。穿孔は 1ヶ所が残っているのみである。

181 も脚部片で、穿孔が 1ヶ所残っている。

182 は脚端部で、屈折外反しておらず、S B 08 出土の 81 に近い器形である。

C区北（第 58 図：図版 40）

184 は壺肩部の破片である。羽状繩文の下段にヘラ刺突斜格子文が施されている。

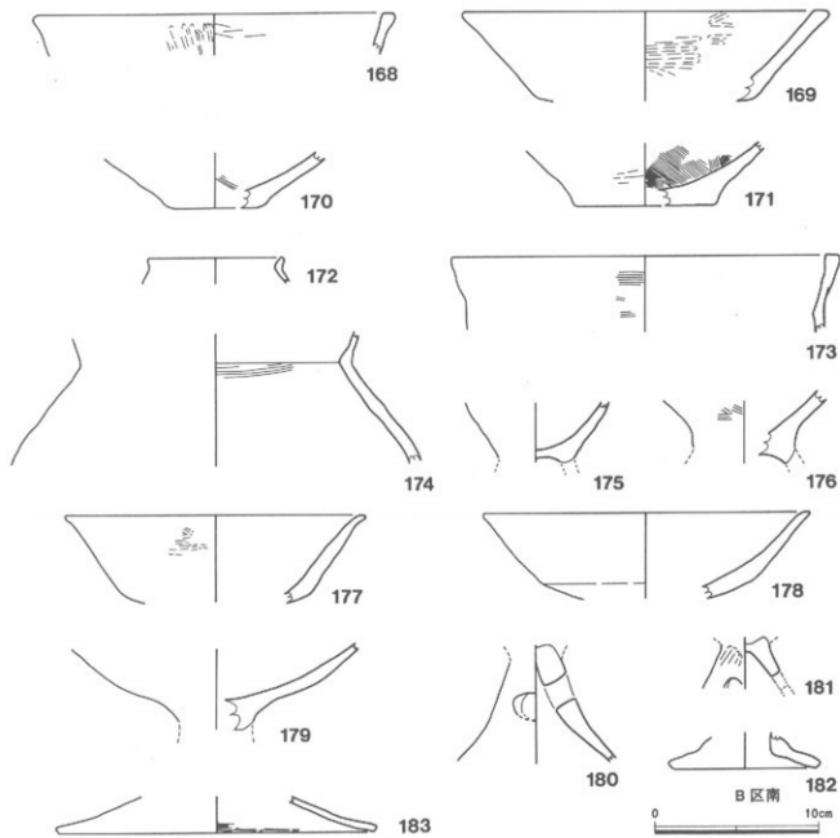
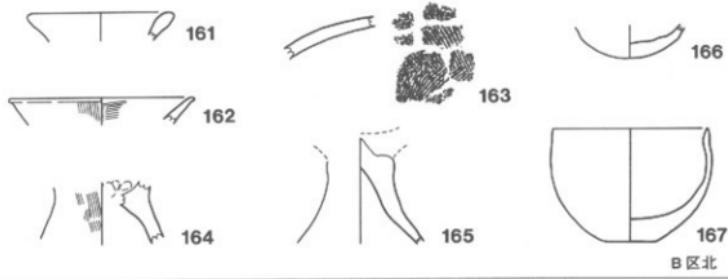
192 は鉢の口縁部の破片である。小破片のため口径は不明確である。口縁部にヘラ状工具によるキザ
ミがあり、突帯の様な段を有する。

C区南（第 58 図）

193 は高杯脚部で、18 P グリットから出土していることから S B 07 にともなうと考えられる。



第 56 図 遺構外出土土器実測図（A 区）



第 57 図 遺構外出土土器実測図 (B 区)

D区（第58図：図版38）

D区からは確認調査時に小型高坏またはミニチュア台付甕が3点出土している。

194は半球形の坏部に台形状の脚部を持つ。摩滅により外面の調整は不明であるが、脚内面は指ナデ、ハケ調整が見られる。二次焼成によると思われる、赤変・黒変が認められる。

195は194に器形が類似したものである。坏と脚との接合部には指ナデの跡をわずかに残している。

196は坏部のみであるが194・195と同様、半球形の坏部であることがわかる。胎土はやや粗い。二次焼成を受けている可能性がある。

E区北（第59図：図版40）

S B 19の西側斜面、8Iからの出土が多い。

201は壺肩部の破片である。貼付突帯下に逆くの字にヘラ刺突羽状文を施している。

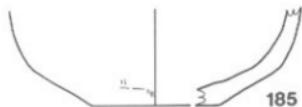
206は高坏脚端部である。菊川式に特徴的な脚裾部に段を有するものである。



184



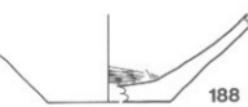
187



185



186



188
C区北



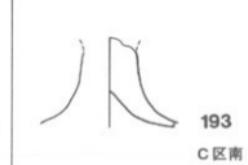
189



190



191



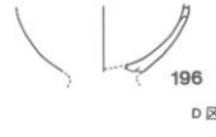
193
C区南



194



195



196
D区



第58図 遺構外出土土器実測図(C区・D区)

E区南 (第59図)

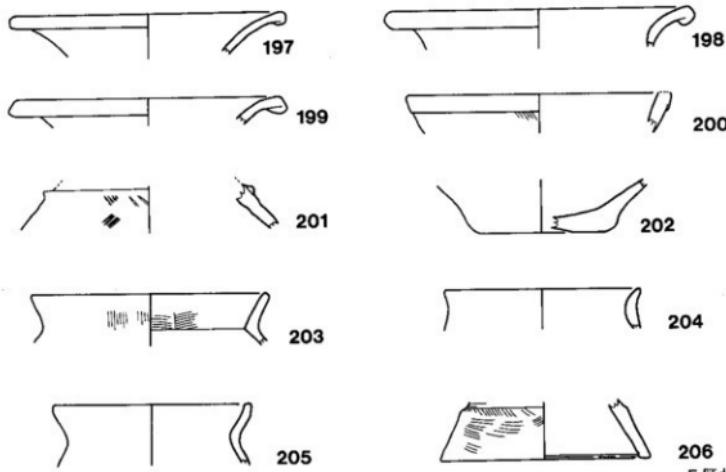
207と208はS B 14にともなうと考えられる。

208は台付壺の台部である。肩部と台部の接合部分は縦に強く指ナデしている。

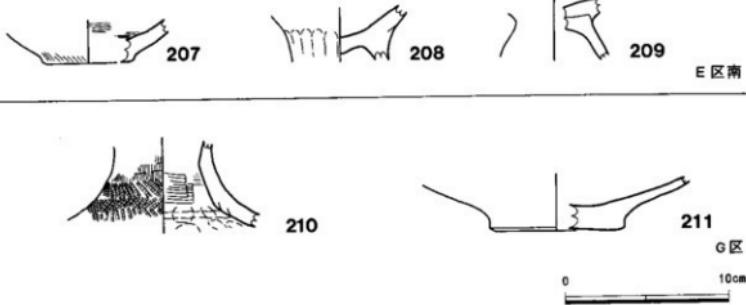
G区 (第59図: 図版40)

210・211とも確認調査時に16E付近から出土している。周囲に遺構がないが、丘陵の頂部、茶畠として利用されていたことから住居が存在していたが削平されてしまった可能性が考えられる。

210は壺の頸部の破片である。櫛刺突羽状文が3段にわたって施されている。



E区南



G区

第59図 遺構外出土土器実測図(E区・G区)

表3 弥生土器・土師器観察表(1)

図版番号	遺物番号	写真版番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	備考	部位	
						口径	高さ	側面最大径						
8	1		壺	A	SB01(P3)	(19.5)	(3.3)	-	-	棕	密	良好	口唇部キザ有	口縁部
8	2		高壺	A	SB01	-	(2.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		壺部
8	3	33	台付壺	A	SD01	(13.9)	14.7	-	7.9	灰白	密	良好		
8	4	33	台付壺	A	SD01	-	(6.3)	-	(10.6)	淡黄緑	密	良好		台部
8	5	33	台付壺	A	SD01	-	(5.0)	-	-	棕	密	良好		台部
8	6	33	小型丸底壺	A	SD01	-	(5.6)	-	-	にぶい橙	密	良好		
11	7		壺	B	SB02	-	(2.8)	-	(6.2)	にぶい棕	密	良好		底部
11	8		壺	B	SB02	(16.0)	(3.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口縁部～頭部	
11	9		壺	B	SB02	(17.8)	(1.9)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口縁部	
11	10	33	台付壺	B	SB02	(10.5)	(7.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部
12	11		壺	B	ピット列(SP07)	-	(1.8)	-	(7.8)	淡黄緑	密	良好		底部
15	12	33	壺	B	SB03	(14.9)	(8.6)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	軽用	口縁部～頭部
15	13	33	壺	B	SB03(P1)	-	(11.1)	(22.8)	(8.7)	にぶい黄緑	密	良好	軽用	胴下部～底部
15	14		壺	B	SB03	(17.0)	(3.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	複合口縁	口縁部
15	15	33	壺	B	SB03	(21.5)	(5.7)	-	-	棕	密	良好	二重口縁	口縁部～頭部
15	16		壺	B	SB03	-	(3.0)	-	-	明黄緑	密	良好	二重口縁	口縁部
15	17		壺	B	SB03	-	(2.6)	-	(7.1)	淡黄	密	良好		底部
15	18	34	ミニチュア壺	B	SB03	(2.3)	*9.5	(10.4)	-	灰白	密	良好	頭部 胴下部	
15	19		壺	B	SB03	(18.8)	(2.9)	-	-	淡黄緑	密	良好	口縁部	
15	20		壺	B	SB03	(15.2)	(2.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口縁部	
15	21		壺	B	SB03	(18.1)	(3.2)	-	-	棕	密	良好	口縁部～頭部	
15	22		壺	B	SB03	-	(2.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口縁部	
15	23		壺	B	SB03	-	(3.8)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口縁部～頭部	
15	24		壺	B	SB03	-	(4.8)	-	-	にぶい棕	密	良好	頭部～肩部	
15	25	33	台付壺	B	SB03(P1)	-	(16.9)	-	(7.4)	にぶい黄緑	密	良好	胴上部～合部	
15	26	34	台付壺	B	SB03	-	(5.7)	-	(10.2)	明黄緑	密	良好	台部	
15	27		台付壺	B	SB03	-	(4.5)	-	(10.4)	にぶい黄緑	密	良好	台部	
15	28		台付壺	B	SB03	-	(3.5)	-	-	にぶい棕	密	良好		
15	29	34	ミニチュア台付壺	B	SB03	-	(3.8)	-	(3.0)	淡黄	密	良好	胴下部～台部	
16	30		高壺	B	SB03	-	(4.0)	-	-	棕	密	良好	壺部	
16	31		高壺	B	SB03	-	(5.9)	-	-	棕	密	良好	脚部	
16	32	34	高壺	B	SB03	-	(5.9)	-	(9.0)	黄緑	密	良好	穿孔3軽用	脚部
16	33	34	高壺	B	SB03	-	(7.2)	-	(13.5)	にぶい棕	密	良好	穿孔3軽用	脚部
16	34	34	高壺	B	SB03	-	(6.7)	-	(18.0)	棕	密	良好	穿孔3軽用	脚部

表3 弥生土器・土師器観察表(2)

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	備考	部位	
						口径	高さ	横断最大径						
16	35	34	高杯	B	SB03	-	(3.1)	-	(19.7)	にぶい黄緑	密	良好		脚部
16	36	34	鉢	B	SB03	(15.0)	7.3	-	(4.0)	にぶい緑	密	良好	穿孔(1)	体部
16	37	34	小形台付鉢 又は高杯	B	SB03	(14.1)	(10.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		体部
16	38		小型鉢	B	SB03	(12.0)	(2.2) (3.1)	-	(6.4)	にぶい黄緑	密	良好		口縁部底部
18	39	35	壺	C	SB04	(11.3)	*23.5	(19.0)	(5.8)	浅黄緑	密	良好	側面突起行文	ほぼ完形
18	40	35	壺	C	SB04	(12.5)	*23.5	(21.1)	(7.0)	にぶい黄緑	密	良好	側面突起行文	
18	41		壺	C	SB04	-	(3.0)	-	(6.7)	明黄緑	密	良好		
18	42	35	台付壺	C	SB04	(17.4)	(12.5)	-	-	にぶい緑	密	良好	口縁部キズミ?	口縁部~肩部
18	43	35	台付壺	C	SB04	-	(15.7)	-	(9.2)	にぶい黄緑	密	良好	転用	胴中部~台部
21	44	35	壺	C	SB05A	(17.9)	*34.8	(31.5)	(14.2)	緑	密	良好		ほぼ完形
21	45	39	壺	C	SB05A	-	(5.9)	-	-	にぶい黄緑	やや粗	良好	ヘリ状突起行文	頸部~肩部
21	46	35	壺	C	SB05A	-	(6.2)	-	(7.0)	にぶい黄緑	密	良好		頸下部~底部
21	47	35	壺	C	SB05A	-	(15.5)	-	(11.1)	明黄緑	密	良好	転用	胴中部~底部
21	48	39	壺	C	SB05A	(25.3)	(3.8)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	口唇部キズ?	口縁部
23	49		壺	C	SB05B	(14.4)	(3.2)	-	-	浅黄	密	良好		
23	50		壺	C	SB05B(P1)	(12.2)	(3.2)	-	-	明黄緑	密	良好		口縁部
23	51		壺	C	SB05B	(19.0)	(5.1)	-	-	にぶい黄	密	良好	腹凸縁	口縁部
23	52	36	壺	C	SB05B	(12.1)	26.6	(22.4)	(10.9)	にぶい黄緑	密	良好	折り返し口縁 (口縁内面) 斜状縫文	ほぼ完形
23	53	36	壺	C	SB05B	(19.1)	(5.8)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	折り返し口縁 (口縁内面) 斜状縫文	口縁部
23	54	39	壺	C	SB05B	(14.5)	(3.3)	-	-	緑	密	良好	折り返し口縁 (口縁内面) 斜状縫文	口縁部
23	55	39	壺	C	SB05B	(17.2)	(3.3)	-	-	緑	密	良好	折り返し口縁 (口縁内面) 斜状縫文	口縁部
23	56		壺	C	SB05B	(15.5)	(2.3)	-	-	緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部
23	57		壺	C	SB05B	(16.8)	(2.4)	-	-	浅黄	密	良好	折り返し口縁	口縁部
23	58	39	壺	C	SB05B	-	(6.5)	-	-	緑	密	良好	輪廓羽状縫文	胴部
23	59	39	壺	C	SB05B	-	(5.7)	-	-	浅黄緑	密	良好	ヘリ状突起行文	頸部~肩部
23	60		壺	C	SB05B	-	(3.1)	-	(8.0)	にぶい緑	密	良好		底部
23	61		壺	C	SB05B	-	(2.5)	-	(7.2)	にぶい黄緑	密	良好		底部
24	62		壺	C	SB05B	(15.4)	(3.4)	-	-	緑	密	良好	口唇部キズミ?	口縁部
24	63		壺	C	SB05B	(14.3)	(3.2)	-	-	緑	密	良好	口縁部~頭部	
24	64		壺	C	SB05B	-	(5.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	頭部~肩上部	
24	65	36	台付壺	C	SB05B	(15.9)	*21.0	-	(10.4)	にぶい緑	密	良好	口唇部キズ?	
24	66	36	台付壺	C	SB05B	12.6	17.3	-	8.2	にぶい黄緑	密	良好		ほぼ完形

表3 弥生土器・土師器観察表(3)

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)				色調	胎土	焼成	備考	部位
						口径	高さ	肩部最大径	底径					
24	67	36	台付壺	C	SB05B	-	(21.9)	-	(10.2)	橙	密	良好		肩上部～台部
24	68	36	台付壺	C	SB05B	-	(18.9)	-	14.0	にぶい黄緑	密	良好	転用	肩下部～台部
24	69	36	台付壺	C	SB05B	-	(6.4)	-	9.8	にぶい黄緑	密	良好		台部
24	70		台付壺	C	SB05B	-	(7.0)	-	(10.4)	にぶい黄緑	密	良好		台部
24	71		台付壺	C	SB05B	--	(4.0)	-	-	橙	密	良好		台部
24	72		台付壺	C	SB05B(P1)	-	(3.9)	-	-	にぶい橙	密	良好		肩下部～台部
25	73	37	鉢	C	SB05B	(21.2)	25.9	-	11.6	淡黄緑	密	良好		ほぼ完形
25	74	37	小型鉢	C	SB05B	9.1	3.4	-	4.5	明黄褐	密	良好		完形
27	75		壺	C	SB07	(16.8)	(7.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部～肩部
27	76		壺	C	SB08	(15.6)	(4.2)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部～肩上部
27	77		壺	C	SB08	(15.6)	(4.2)	-	-	淡黄緑	密	良好		口縁部～肩上部
27	78		壺	C	SB08	(13.8)	(3.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部～肩上部
27	79		壺	C	SB08	-	(2.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部～肩上部
27	80	37	台付壺	C	SB08(P1)	(17.4)	(14.8)	-	--	にぶい黄緑	密	良好	口唇部キザリ	口縁部～肩部
27	81		台付壺	C	SB08	-	(3.5)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	転用？	台部
27	82		高坏	C	SB08	-	(2.0)	-	(10.8)	にぶい橙	密	良好		肩部
27	83		鉢	C	SB08	(11.4)	(3.7)	-	-	にぶい橙	密	良好		口縁部～全体部
33	84		台付壺	E	SB10A	-	(7.6)	-	(8.8)	橙	密	良好		台部
33	85		壺	E	SB10B	-	(2.6)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	彫刻尖羽状文	肩部
33	86	39	壺	E	SB10B	-	(3.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	羽状構文	肩部
33	87		壺	E	SB10B	-	(4.3)	-	(7.2)	にぶい黄緑	密	良好		底部
33	88		台付壺	E	SB10B	-	(2.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		肩下部
33	89		鉢	E	SB10B	(20.5)	(5.0)	-	-	淡黄	密	良好		口縁部
33	90	39	壺	E	SB11	-	(4.2)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	彫付尖羽状文	肩部
33	91		壺	E	SB11	-	(5.8)	-	-	にぶい橙	密	良好	彫刻尖羽状文	肩部
33	92	39	壺	E	SB11	-	(3.7)	-	-	橙	密	良好	彫刻尖羽状文	肩部
33	93		壺	E	SB11	(12.0)	(2.3)	-	-	橙	密	良好	折り返し口縁	台部
33	94		台付壺	E	SB11	-	(3.0)	-	(9.5)	にぶい橙	密	良好		口縁部～肩上部
33	95		壺	E	SB11	(14.3)	(5.0)	-	-	にぶい橙	密	良好		肩下部～台部
36	96	37	台付壺	E	SB19	-	(12.0)	-	(10.6)	橙	密	良好		ほぼ完形
36	97	37	鉢	E	SB19(P1)	(21.4)	6.1	-	(11.5)	明黄褐	密	良好	転用？	台部
38	98		台付壺	E	SB13A	-	(5.1)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部
38	99	39	壺	E	SB13B	(13.4)	(1.7)	-	-	にぶい橙	密	良好	折り返し口縁 (口縁内裏) 羽状構文	口縁部

表3 弓生土器・土師器観察表(4)

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土遺構	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	備考	部位			
						口径	高さ	断面最大径								
38	100		壺	E	SB13B	(14.8)	(1.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	折り返し口縁 (口縁内張 格納範丈)	口縁部		
38	101		壺	E	SB13B	-	(2.1)	-	(9.4)	にぶい黄緑	密	良好		底部		
40	102	37	台付壺	E	SB14	-	(16.0)	-	(13.6)	にぶい黄緑	密	良好		胴下部~ 口縁部		
40	103		壺?	E	SB14	(16.2)	(6.1)	-	-	淡黄緑	密	良好		口縁部~ 胴上部		
42	104	40	壺	E	SB18	(22.0)	(5.2)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部		
42	105	40	壺	E	SB18	(13.9)	(4.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部		
42	106		壺	E	SB18	(14.5)	(1.4)	-	-	淡黄緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部		
42	107	37	壺	E	SB18	-	(14.4)	17.6	8.2	にぶい緑	密	良好	木葉柄 軸用	肩部~ 底部		
42	108	39	壺	E	SB18	-	(3.1)	-	(3.6)	(15.0)	-	にぶい緑	密	良好	頭部突起状	頭部~ 胴上部
42	109		壺	E	SB18	-	*22.3	-	(9.9)	明黄緑	密	良好		肩部~腰中部		
42	110		壺	E	SB18	-	(2.5)	-	(8.6)	にぶい黄緑	密	良好		底部		
42	111		壺	E	SB18	-	(2.1)	-	(7.2)	にぶい黄緑	密	良好		底部		
42	112		壺	E	SB18	-	(2.8)	-	(5.6)	にぶい黄緑	密	良好		底部		
42	113		壺	E	SB18	(18.4)	(2.7)	-	-	灰褐	密	良好	口唇部キザミ	口縁部		
42	114		台付壺	E	SB18	-	(3.9)	-	-	淡黄緑	密	良好		台部		
42	115		台付壺	E	SB18	-	(3.2)	-	-	緑	密	良好		胴下部		
42	116		台付壺	E	SB18	-	(2.9)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		胴下部		
42	117	37	小型鉢	E	SB18	7.7	3.4	-	4.0	にぶい黄緑	密	良好		完形		
45	118		壺	E	SB15	(13.6)	(3.1)	-	-	緑	密	良好		口縁部		
45	119		壺	E	SB15	(12.8)	(1.8)	-	-	淡黄	密	良好	折り返し口縁	口縁部		
45	120		壺	E	SB15	(12.9)	(1.9)	-	-	明黄緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部		
45	121		壺	E	SB15	(14.0)	(1.4)	-	-	淡黄	密	良好	折り返し口縁	口縁部		
45	122		壺	E	SB15	-	(2.5)	-	-	灰褐	密	良好	口唇部キザミ	口縁部		
45	123		壺	E	SB15	-	(2.8)	-	-	明黄緑	密	良好		口縁部		
45	124		壺	E	SB15	(14.8)	(3.1)	-	-	緑	密	良好		口縁部~ 頭部		
45	125		壺	E	SB15	(13.8)	(3.4)	-	-	淡黄緑	密	良好		口縁部~ 頭部		
45	126		壺	E	SB15	(12.4)	(5.2)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部~ 頭部		
45	127		壺	E	SB15	(13.9)	(6.7)	-	-	淡黄緑	密	良好		口縁部~ 頭中部		
45	128		台付壺	E	SB15	-	(6.3)	-	(8.8)	にぶい緑	密	良好		台部		
45	129		台付壺	E	SB15	-	(4.4)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部		
45	130		台付壺	E	SB15	-	(3.4)	-	-	緑	密	良好		胴下部		
45	131		台付壺	E	SB15	-	(3.5)	-	-	緑	密	良好		台部		

表3 弥生土器・土師器観察表(5)

団版 番号	遺物 番号	写真 団版 番号	器種	地区	出土遺構 ・位置	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	備考	部位
						口径	高さ	肩部最大径					
45	132		高壺	E	SB15	(13.0)	(4.2)	—	—	橙	密	良好	坪部
45	133		鉢	E	SB15	(17.0)	(3.6)	—	—	淡黄	密	良好	口縁部
48	134	38	小型壺	E	SB16	—	(9.0)	(9.6)	(5.8)	にぶい橙	密	良好	頭部～底部
48	135	38	小型壺	E	SB16	—	(7.1)	(10.5)	(4.7)	淡黄	密	良好	肩中部～底部
48	136		壺	E	SB16	—	(3.6)	—	(8.2)	橙	密	良好	底部
48	137		台付壺	E	SB16	—	(5.3)	—	—	にぶい橙	密	良好	脚下部～台部
48	138	38	鉢	E	SB16	(15.9)	10.9	—	(8.8)	明黄褐	密	良好	ほぼ完形
			壺	E	SB16	—	(2.4)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	頭部
48	139	40	壺	E	SB17	—	(4.9)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	側斜突起状
48	140		壺	E	SB17	—	(3.2)	—	—	にぶい黄	密	良好	口縁部～頭部
48	141		壺	E	SB17	(16.0)	(4.4)	—	—	淡黄橙	密	良好	口縁部～頭上部
48	142	38	台付壺	E	SB17	—	(6.6)	—	11.2	淡黄橙	密	良好	紐用?
50	143		壺	E	SX02	(17.0)	(7.0)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	斜面直口縁
50	144		壺	E	SX02	(19.8)	(2.5)	—	—	にぶい黄	密	良好	折少直口縁
50	145		壺	E	SX02	—	(8.5)	—	(6.4)	淡黄橙	密	良好	脚下部～底部
50	146		壺	E	SX02	—	(2.5)	—	(9.4)	橙	密	良好	底部
50	147		壺	E	SX02	—	(3.1)	—	(8.6)	淡黄橙	密	良好	底部
50	148		壺	E	SX02	—	(2.4)	—	(10.9)	にぶい黄橙	密	良好	底部
50	149		壺	E	SX02	(14.8)	(2.4)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	口縁部～頭部
50	150		壺	E	SX02	(17.5)	(6.0)	—	—	明黄褐	密	良好	口縁部～頭上部
50	151		台付壺	E	SX02	—	(5.4)	—	—	にぶい橙	密	良好	台部
50	152		壺	E	SX02	(14.0)	(2.1)	—	—	にぶい橙	密	良好	口縁部
50	153		壺	E	SX02	(21.5)	(4.5)	—	—	灰黄	密	良好	口縁部～頭部
50	154		壺	E	SX02	—	(2.6)	—	—	にぶい橙	密	良好	口縁部～頭部
			壺	E	SX02	(12.7)	(2.7)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	口縁部～頭部
52	155	40	壺	G	SB20	(13.0)	(2.3)	—	—	橙	密	良好	折り返し口縁
52	156		壺	G	SB20	(13.7)	(1.9)	—	—	橙	密	良好	口縁部
52	157	40	台付壺	G	SB20	(15.2)	(13.1)	—	—	にぶい橙	密	良好	口縁部～頭部
56	158		壺	A	北:32P	—	(2.6)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	折り返し口縁
56	159		高壺又は 蓋合	A	北:32P	—	(3.7)	—	(7.6)	にぶい橙	密	良好	穿孔(1)
56	160	38	高壺又は 蓋合	A	北:32P	—	(4.3)	—	—	淡黄橙	密	良好	穿孔(3)
57	161		壺	B	北:28M	(9.0)	(1.7)	—	—	橙	密	良好	口縁部
57	162		壺	B	北: 29M-N	—	(1.6)	—	—	にぶい黄橙	密	良好	口縁部
57	163	40	壺	B	北:29N	—	(2.3)	—	—	にぶい黄	密	良好	(口縁内側) 溶状焼残
													口縁部

表3 弼生土器・土師器観察表(6)

回版番号	遺物番号	写真回版番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	備考	部位	
						口径	高さ	断面最大径						
57	164		台付壺	B	北 :29M-N	-	(3.8)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部
57	165	38	高坏	B	北:28M	-	(5.1)	-	-	緑	密	良好		脚部
57	166		小型鉢?	B	北	-	(2.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		底部
57	167	38	小型鉢	B	北:28M	-	6.9	-	(3.4)	淡黄緑	密	良好		ほぼ完形
57	168		壺	B	南:27M	(21.2)	(2.5)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	広口系	口縁部
57	169		壺	B	南:27M	(22.0)	(5.5)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	複合口縁	口縁部
57	170		壺	B	南:27M	-	(3.4)	-	(5.9)	にぶい黄緑	密	良好		底部
57	171		壺	B	南:27M	-	(3.8)	-	(8.7)	にぶい黄緑	密	良好		底部
57	172		壺	B	南:27M	(8.2)	(1.6)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部~頸部
57	173		壺	B	南:27M	(23.5)	(4.7)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		口縁部~頸部
57	174		壺	B	南:27M	-	(8.1)	-	-	にぶい黄緑	やや粗	良好		口縁部~肩上部
57	175		壺	B	南:27M	-	(3.8)	-	-	淡黄緑	密	良好		肩下部
57	176		壺	B	南:27M	-	(4.3)	-	-	にぶい緑	密	良好		肩下部
57	177		高坏	B	南:27M	(18.0)	(5.3)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		坏部
57	178		高坏	B	南:27M	(19.8)	(5.2)	-	-	緑	密	良好		坏部
57	179		高坏	B	南:27M	-	(4.8)	-	-	黄緑	密	良好		坏部
57	180		高坏	B	南:28M	-	(7.1)	-	-	黄緑	密	良好	肩元口	脚部
57	181		高坏	B	南:27M	-	(3.0)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	肩元口	脚部
57	182		高坏	B	南:27M	-	(2.2)	-	(9.2)	緑	密	良好		脚部
57	183		高坏	B	南:28M	-	(2.2)	-	(19.1)	にぶい黄緑	密	良好		脚部
			壺	B	南	-	(2.8)	-	-	緑	密	良好	二重口縁	口縁部
			壺	B	南:27M	-	(2.7)	-	(5.8)	にぶい黄緑	密	良好		底部
			壺	B	南:27M	-	(2.5)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		底部
			台付壺	B	南:26M	-	(3.8)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部
			台付壺	B	南:27M	-	(3.2)	-	-	黄緑	密	良好		台部
			台付壺	B	南:27M	-	(3.1)	-	-	にぶい黄緑	密	良好		台部
			高坏	B	南:27M	-	(2.2)	-	-	黄緑	密	良好		坏部
58	184	40	壺	C	北:21R	-	(5.2)	-	-	にぶい黄緑	密	良好	資料編文 ～昭和廿年十二月	肩部
58	185		壺	C	北:23R	-	(5.8)	-	(7.6)	にぶい黄緑	密	良好		肩下部~底部
58	186	40	壺	C	北:23R	-	(2.7)	-	(8.6)	淡黄緑	密	良好	木裏底	底部
58	187		壺	C	北:21R	-	(3.3)	-	(7.0)	にぶい黄緑	密	良好		底部
58	188		壺	C	北:21R	-	(5.3)	-	(7.4)	にぶい黄緑	密	良好		底部
58	189		壺	C	北 接土	(16.0)	(3.1)	-	-	にぶい緑	密	良好	口唇部キヅ	口縁部
58	190		壺	C	北:21R	(14.0)	(4.3)	-	-	にぶい緑	密	良好		口縁部~頸部

表3 弥生土器・土師器観察表(7)

図版 番号	遺物 番号	写真 図版 番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)				色調	胎土	焼成	備考	部位
						口径	高さ	綫部最大径	底径					
						(mm)	(mm)	(mm)	(mm)					
58	191		台付壺	C	北:21R	—	(6.3)	—	—	にぶい黄緑	密	良好		肩下部
58	192	40	鉢	C	北:21R	(15.8)	(2.2)	—	—	にぶい橙	密	良好	口唇部キザミ	口縁部
			壺	C	北	(12.4)	(4.5)	—	—	橙	密	良好		口縁部～頸部
58	193		高壺	C	南:18P	—	(5.4)	—	—	黄緑	密	良好		肩部
			壺	C	南:16O	—	(3.0)	—	(9.1)	淡黄	密	良好		底部
58	194	38	小型蓋坪 又は ミニチャップ 直筒型	D	21L	—	(7.4)	—	(7.2)	橙	密	良好		ほぼ完形
58	195	38	小型蓋坪 又は ミニチャップ 直筒型	D	21L	—	(7.7)	—	—	橙	密	良好		ほぼ完形
58	196	38	台付壺 又は ミニチャップ 台付壺	D	21L	—	(4.0)	—	—	にぶい黄緑	密	良好		壺部
59	197		壺	E	北:8H	(16.3)	(2.5)	—	—	橙	密	良好	折り返し口縁	口縁部
59	198		壺	E	北:8E	(16.1)	(2.4)	—	—	明黄緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部
59	199		壺	E	北:8E	(15.8)	(1.7)	—	—	浅黄緑	密	良好	折り返し口縁	口縁部
59	200		壺	E	北:8E	(16.0)	(2.4)	—	—	浅黄	密	良好	折り返し口縁 底口系?	口縁部
59	201	40	壺	E	北:10J	—	(2.7)	—	—	にぶい黄緑	密	良好	柱付圓筒 へラ剥離平底式	肩部
59	202		壺	E	北:8E	—	(3.2)	—	(7.8)	浅黄	密	良好		底部
59	203		壺	E	北 排土	(14.2)	(3.2)	—	—	橙	密	良好		口縁部～頸部
59	204		壺	E	北:8I	(11.6)	(2.5)	—	—	浅黄緑	密	良好		口縁部～頸部
59	205		壺	E	北:8I	(12.2)	(3.7)	—	—	浅黄緑	密	良好		口縁部～頸部
59	206		高壺	E	北:8I	—	(3.5)	—	(12.8)	淡黄	密	良好		脚部
59	207		壺	E	南:3G	—	(2.6)	—	(5.6)	にぶい黄緑	密	良好		底部
59	208		台付壺	E	南:4G	—	(3.3)	—	—	浅黄緑	密	良好		肩下部～台部
59	209		台付壺	E	南 排土	—	(3.8)	—	—	にぶい黄緑	密	良好	備考交羽吹文	頸部
59	210	40	壺	G	16E	—	(5.8)	—	—	浅黄緑	密	良好		底部
59	211		壺	G	16E	—	(3.5)	—	(7.4)	にぶい黄緑	密	良好		底部

口径・肩部最大径の()は推定値
高さの()は残存値、* は推定値

石器・石製品

遺構のところで触れた石皿1点（SB 07・第28図）、台石2点（SB 18・第43図。SB 20第53図）以外に遺構内外より以下に示す石器類が出土している（第60～63図：表4：図版41・42）。

菖蒲ヶ谷遺跡の立地する丘陵は掛川層群・土方泥層の泥岩からなっており、表土層においてもその他の岩石は含まれていない。よって基盤層以外の礫は人為的に運ばれてきたものと見て間違いない。その泥岩はもろく石器として利用できないため、用途に適した石材を採集してきたようである。多くは天竜川系の石材で、太田川流域・可憐丘陵・磐田原台地に分布し、逆川・原野谷川流域にはみられないものである。

ここで図として提示したものは使用痕が認められたものである。これら以外にも加工された礫など、多くの運ばれてきた石が存在している。

石皿・台石・敲石・磨石・砥石と分類したが、ほとんどのものが単一の用途に使用されたものではない。石皿・台石はその形態・大きさ・出土状態から分類し、住居との関連性が強いと考え出土遺構とともに既に述べている。敲石・磨石と砥石（荒砥石）の分類は困難である。いずれも拳大ほどの砂岩の礫を用い、一つの石に異なる使用痕が認められるものもある。まずタタキが顕著であるものはその点を優先して敲石と分類した。スリとトギは使用面の観察からは明確に区別ができる、使用面が凸であるものをスリ、平坦面もしくは溝状に窪みができるものをトギと推定し分類した。砥石としたものにも敲打痕があるものもあり、複数の使用法があったことがわかる。

砂岩以外の凝灰岩などを用いたものは仕上げ用の砥石である。

他に不明石器としたが楔形石器といえるものが2点。石棒（石剣）が1点出土している。

敲石・磨石（第60・61図：図版42）

4から18を敲石・磨石とした。石材は15が花崗岩である他はいずれも粗粒・中粒の砂岩である。

4は三角錐形をしておりうち2つの端部にタタキの痕跡が見られる。SB 01のビット（P 5）より出土している。一部の面に砥石として使用したと思われる窪みもある。

5は欠損しているが球形に近い形をしていたと思われる。被熱・赤変している。やや平らな部分と尖った部分にタタキが認められる。

7はやや大きな丸みのある石で端部にタタキが見られる。全体的に被熱しているようで、わずかに赤変が見られる。

9も小判形の円錐で両端部に強くタタキの痕跡があり、つぶれて少し平坦になっている。片面全体に弱いがスリが見られる。またその面はわずかに赤変している。

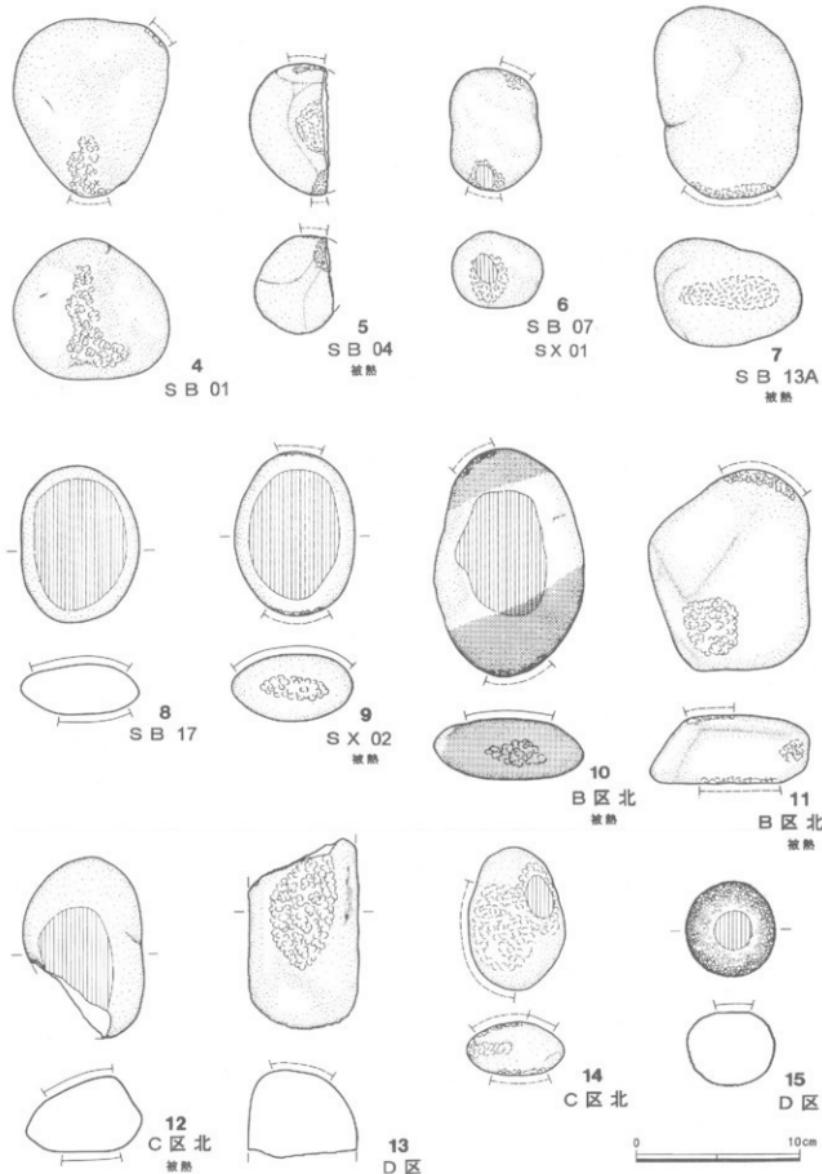
10は大きめの小判形の石である。両端部にタタキと片面にスリが認められる。両端部付近は被熱・赤変しているが、中央部分には見られない。

11は大きめで平らな石である。表面と端部にタタキが見られる。大きさから台石としての使用も考えられる。全体的に被熱・赤変している。

12は強く被熱・赤変し、一部を欠損している。表裏両面に使用が認められる。砥石の可能性もある。

13は確認調査時にD区より出土している。大きく欠損しているため全体は不明であるが台石の可能性も考えられる。

14は小判形の円錐で表裏、側面から端部にかけてタタキが見られる。一部にスリ・もしくはトギが見られる。



第60図 石器実測図(鼓石・磨石)

15 は花崗岩製で径 5.6cm、190g の球形である。風化が進んでいるため使用痕は明確ではない。平坦になっている面をスリ面としたが、投弾の可能性も考えられる。

16 は角が丸い直方体をしていて、一つの角にタタキが強く見られる。

17 は大型で重量は 1.1kg である。端部・側辺にタタキが見られる。台石として使われた可能性も考えられる。

18 は大きく欠損し、端部にタタキが、片面にはスリが見られる。

砥石（第 61・62 図：図版 42）

砥石は砂岩を使った荒砥石と凝灰岩などを用いた仕上げ用の砥石とに分類できる。荒砥石の中では置砥石と手持ちの砥石がある。

砂岩製の荒砥石が第 61 図 19～27 である。

19 は約 15cm 角、重量 2.6kg の置砥石である。中央やや凹んだところと側面が使われている。

20 は欠損している断面三角形の砥石である。うち 2 面を使用していて溝状の窪みとなっている。一部赤変しており被熱しているようである。

21 は大きく欠損していて全体像はわからない。表裏両面を使用している。使用面は緩やかに波打ったようになっている。

22 は小さめで丸みがある。全体的に赤変しており、被熱していると思われる。S B 08 のピット（P 2) より出土している。

23 は細く尖った小礫を使用している。一面が研磨により平坦面となっている。

24 は角が丸まった角柱状をしていたもので、火を受け両端が欠損している。4 面ともに使用されている。

25 は長さ 8.2cm の小さな礫を利用したものである。表裏両面に使用が認められ、片面は緩やかに湾曲している。

26 は将棋の駒のような形をしている。表裏と側面を使用しているが、片面は特に滑らかな面となっている。

27 は一部欠損し、全体的に火を受けて赤変している。断面が三角形であるが、その一番小さな面に幅 2cm ほどの溝状の窪みが斜めにいくつも出来ている。側辺には一部タタキの痕跡が見られる。

第 62 図 28～33 が仕上げ用の砥石である。石材は凝灰岩が多いが他のものも見られる。

28 は泥が混じったやや質の悪いチャート製の砥石である。角柱状を呈し、表裏と両端面を使用している。端面の一つは全体に対し斜めになっている。砥石の方を動かして使用したと考えられる。

29 は石英粗面岩製で断面が菱形をした柱状である。4 面ともに使用されている。

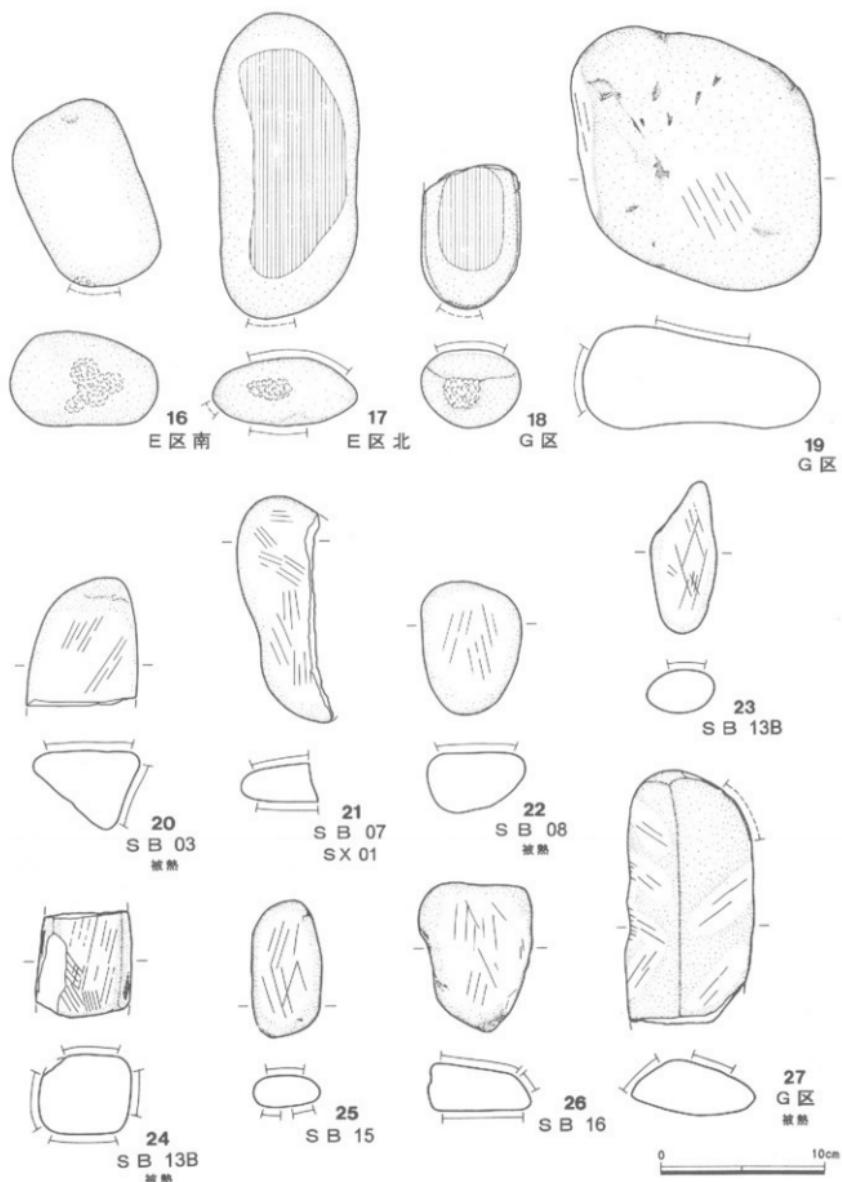
30 は粗粒半花崗岩製で、釣り鐘を四角くしたような形をしている。側面の一部と底面と小さな面を使用している。研ぐ対象物ではなく、砥石を持って動かし使用したと思われる。

31 は石英粗面岩製で舟のような形をしている。平坦な面に研磨による幅 2cm ほどの窪みが重なりあって凹凸を作っている。

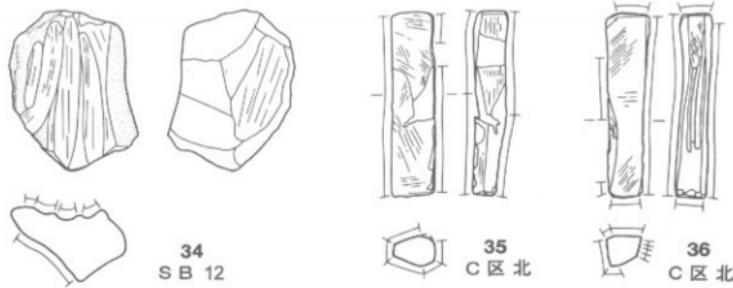
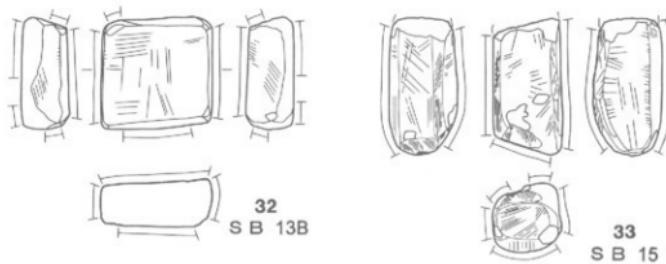
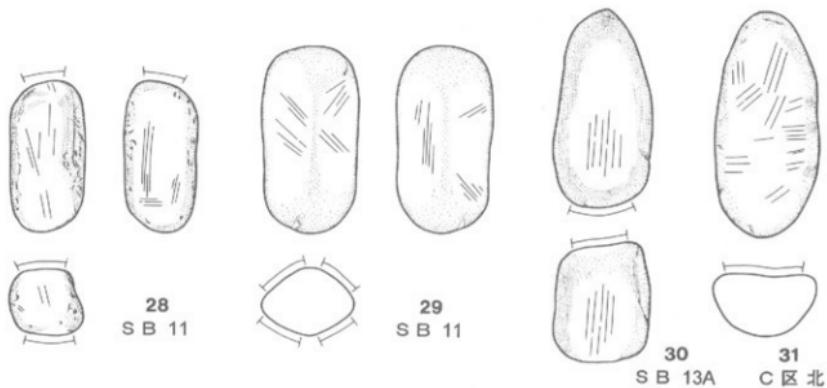
32 は流紋岩質凝灰岩製の直方体をしている。一部に剥落が見られるがほぼ全面が使用されている。

33 も流紋岩質凝灰岩製でやや四角い柱状である。側面のほぼ全てと一端は使用されているが、もう一端は欠損している。

以上の砥石の使用面には平坦な面となるものと幅 2cm ほどの窪みとなっているものの 2 種類がある。これは対称となる物の大きさ・形状による差ではないかと考えられる。



第61図 石器実測図(敲石・磨石・砥石)



第62図 石器実測図(砥石)

34は長さ9.7cm、幅7.1cm、厚さ4.1cm、重量302g、凝灰質細粒砂岩製の筋砥石で玉砥石と考えられる。SB12の床面、壁に接して出土している。幅1.0~1.4cm、深さ4mmほどのU字型の溝が3本あり、縦方向に研がれた痕跡が観察できる。溝の内面は滑らかではなく、荒砥石として使用したと思われる。全体に大きく割れていて角張っている。裏の一つの面も削られて皿状に窪んでおり使用面のようであるが、持ちやすくするための加工とも考えられる。左手に砥石を握り、右手に対象物を持って使用したと想像される。

35・36の2点は柱状を呈している。35は長さ11.2cm、幅2.6cm、厚さ1.9cm、重量78g。36は長さ11.2cm、幅2.5cm、厚さ1.7cm、重量74g。両方も流紋岩質凝灰岩であり、サイズもほとんど一致することから同じ規格で製作された製品と思われる。ともにC区北の包含層より出土した。ほぼ全面が使われており、35は使い込まれて薄くなっている。36は側面に幅1mmほどのごく浅い溝が3本見られる。35の表裏・36の表は、ほぼ中心を境にして面を2つの単位に分けて使用している。類例としては浜北市東原遺跡の例があり、同様に近世の砥石と思われる(松本・松井他1980)。

不明石器(第63図:図版42)

37はB区北、29Nの包含層より出土した。細粒砂岩製で長さ5.2cm、幅3.0cm、厚さ1.0cm、重量13g。表裏ともにわずかに自然面が残るが大部分は剥離している。両側辺にも多くの剥離が見られ、一辺が直線的に、もう一辺はわずかに抉られたようになっている。表裏ともに両端部からの剥離が顕著である。上辺の中心に打撃が加えられ側辺に向かう剥離が進んだために、五角形状になったと思われる。また側辺を同様に使用した可能性もある。

38はSB05Bの覆土より出土した。砂質粘板岩製で長さ4.3cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重量18gである。自然の疊を利用しておらず自然面が多く残る。上側辺の片側に調整と思われる剥離痕がありわずかに抉りを作っている。先端部は両面に3mmほどの研磨部分が残っており、刃部を研ぎ出したことがわかる。反対側にはわずかではあるが研磨された平坦面が残っている。この向かい合う両端部は階段状に深い剥離があるが、対称的で片面に大きく反対の面はわずかである。また側辺に向かう剥離も見られる。

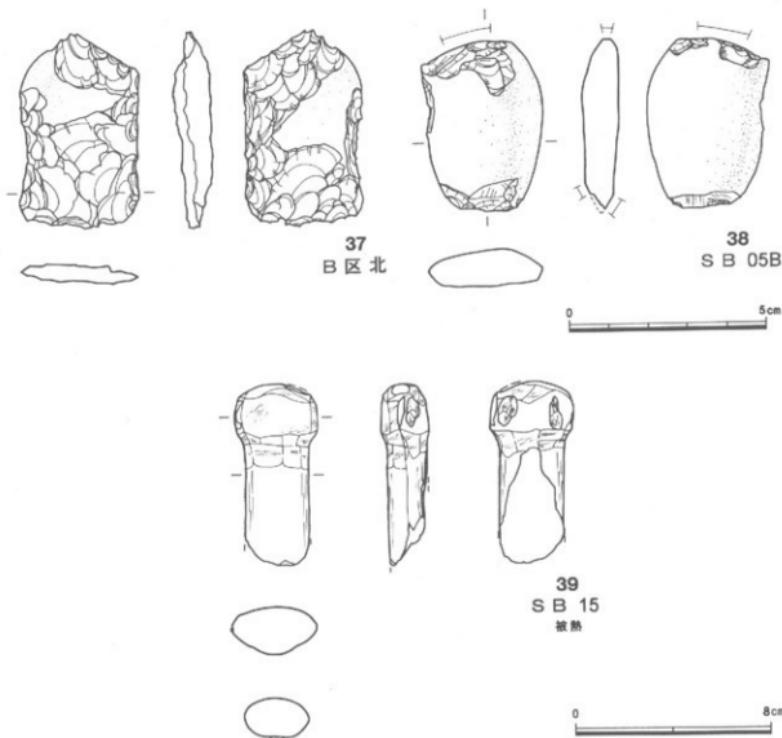
以上2点の石器に見られる特徴は旧石器・繩文時代の楔形石器の両極剥離と同じである。(岡村1983)のことから刃部を対象物に当て、反対側を打撃するというタガネのような使用法が推定できる。37と38とでは剥離痕がやや異なるが、これは石材の違いによる差であろう。使用法としては側辺の抉りに親指をそえ、反対側を人差し指と中指で押さえて先端を対象物にあて、上端に打撃を加えたと思われる。

石棒(石剣)(第63図39:図版42)

SB15から出土している。SB15の推定プランからは外に位置するが、地形・土層・約30cm離れて砥石(33)が出土していることなどから、本来堅穴住居内にあったものが覆土とともに流出移動したと考えられる。また住居のほぼ中心からはきのこに似た奇妙な形をした自然石(表4-45)が出土しており、石棒(石剣)と同じく不思議な形をした石として住居内に持ち込まれたと想像できる。

残存長7.5cm、頭部の幅3.4cm・厚さ1.9cm、刃部の幅2.6cm・厚さ1.6cmである。断面は梢円形を呈している。緑色凝灰岩製でほぼ全面を丹念に研磨されているが、頭部周辺は研磨の単位が面として観察できる。頭部裏側の2カ所を打ち欠いて凹みを作っている。この凹みの部分は研磨がされていない。男根をリアルに表現したものであろう。刃部の大部分が欠損しているが、意識的に折られたものである。また弱いものはあるが火を受けている可能性もある。繩文時代後晩期の遺物とみて間違いなく、被熱・破壊行為はよく見られることである。(渋谷昌彦氏ご教示)。

静岡県西部・旧遠江国において類例を搜すと、研磨の単位が観察できる点と頭部の形状は本川根町山



第 63 図 石器・石製品実測図(不明石器・石棒)

静岡県西部・旧遠江国において類例を捜すと、研磨の単位が観察できる点と頭部の形状は本川根町山王遺跡出土例（黒田・山田他 1985）に近いものであるが頭部裏側の凹みはなく、この様な文様の例は静岡県を始め管見に触れていない。また石材に注目した場合、凝灰岩製と報告されているものには春野町中森遺跡の石劍（市原他 1979）、静岡市羽島・青上の石棒（足立他 1930）がある。大量の石器が製作されている浜松市川山遺跡では石棒・石刀あわせ 219 点が報告されているが凝灰岩製はわずかに 2 点のみである（佐藤他 1995）。

表4 石器觀察表

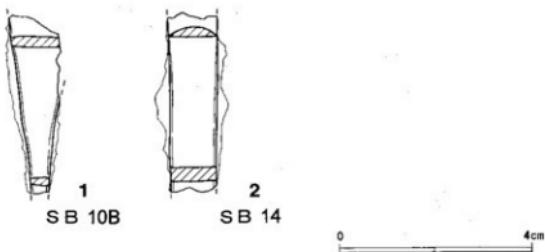
図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土遺構 -グリッド	石材	計測値			被熱	備考
							長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)		
28	1	41	石皿	C	SB07	流紋岩質凝灰岩	21.2	16.5	6.2	2.45(kg)	○ タタキ・スリ・トギ
43	2	41	合石	E	SB18	中粒砂岩	27.8	23.0	6.8	6.56(kg)	○ タタキ・スリ、分割
56	3	41	台石	G	SB20	粗粒砂岩	33.4	21.6	6.4	7.49(kg)	○ タタキ・スリ
60	4		敲石	A	SB01(P5)	中粒砂岩	11.0	9.4	8.6	1.20(kg)	トギ?
60	5	42	敲石	C	SB04	中粒砂岩	8.1	4.8	6.0	311	○ 欠損
60	6	42	敲石	C	SB07(SX01)	中粒砂岩	7.5	5.6	4.7	277	スリ
60	7	42	敲石	E	SB13A	中粒砂岩	11.5	8.8	6.5	995	○
60	8		磨石	E	65	中粒砂岩	9.6	7.3	3.3	300	
60	9	42	敲石	E	SX02	粗粒砂岩	10.0	7.2	4.1	409	○ スリ
60	10	42	敲石	B	北:28M	中粒砂岩	13.9	9.0	3.9	713	○ スリ
60	11		敲石	B	北:28M	中粒砂岩	12.3	9.8	4.3	792	○
60	12		磨石	C	北:21R	粗粒砂岩	10.9	7.2	4.5	468	○ トギ? 欠損
60	13		敲石	D	21L	粗粒砂岩	10.2	6.7	5.3	597	欠損・台石?
60	14	42	敲石	C	北:21R	中粒砂岩	8.7	6.0	3.3	227	スリまたはトギ
60	15	42	敲石	D	21L	花崗岩	5.6	5.6	4.5	190	投弾?
61	16		敲石	E	南:5D	中粒砂岩	11.4	7.7	5.8	813	
61	17		敲石	E	北:12K	硬質中粒砂岩	18.7	8.8	4.1	1.12(kg)	スリ・台石?
61	18		敲石	G	14H	硬質中粒砂岩	8.7	6.0	4.8	331	スリ
61	19		砥石	G	15F	粗粒砂岩	15.0	14.6	6.2	2.60(kg)	重磁石?
61	41		砥石?	E	SB14付近	中粒砂岩	16.7	10.2	6.6	1.20(kg)	重磁石?
61	20		砥石	B	SB03	中粒砂岩	7.5	6.5	4.7	318	○ 溝状へこみ、欠損
61	21		砥石	C	SB07(SX01)	中粒砂岩	13.0	4.2	2.3	211	○ 溝状へこみ、欠損
61	22		砥石	C	SB08(P2)	中粒砂岩	8.1	6.0	3.7	299	○
61	23		砥石	E	SB13B	中粒砂岩	9.2	4.0	2.6	126	小穢
61	24	42	砥石	E	SB13B	凝灰質細粒砂岩	6.3	5.7	4.8	317	○ 角柱状・欠損
61	25		砥石	E	SB15	細粒砂岩	8.2	4.2	1.9	118	小穢
61	26	42	砥石	E	SB16	細粒砂岩	9.0	7.0	2.9	302	
61	27	42	砥石	G	14H	中粒砂岩	15.5	7.7	3.3	595	○ 溝状へこみ・タタキ・欠損
62	28	42	砥石	E	SB11	チャート	9.2	4.4	4.0	264	角柱状
62	29	42	砥石	E	SB11	石英粗面岩	11.4	5.7	4.2	429	柱状
62	30		砥石	E	SB13A	粗粒半花崗岩	12.1	5.9	7.1	803	
62	31	42	砥石	G	北	石英粗面岩	13.9	6.2	3.7	443	溝状へこみ・タタキ
62	32	42	砥石	E	SB13B	流紋岩質凝灰岩	6.6	6.7	2.8	193	直方体
62	33	42	砥石	E	SB15	流紋岩質凝灰岩	8.2	4.2	4.1	206	角柱状
62	34	42	砥石	E	SB12	凝灰質細粒砂岩	9.7	7.1	4.1	302	3条の溝、筋砥石
62	35	42	砥石	C	北	流紋岩質凝灰岩	11.2	2.6	1.9	78	棒状
62	36	42	砥石	C	北	流紋岩質凝灰岩	11.2	2.5	1.7	74	棒状
63	37	42	不明石器	B	北:29N	細粒砂岩	5.2	3.0	1.0	13	
63	38	42	不明石器	C	SB05B	砂質粘板岩	4.3	3.0	0.9	18	
63	39	42	石棒 (石剣)	E	SB15	緑色凝灰岩	7.5	3.4 (2.6)	1.9 (1.6)	60	○ 人為的に折られている () : 刃部計測値
40			丸石	B	SB03	細粒半花崗岩	7.0	5.8	3.1	175	
42			丸石	E	SB11	カンラン岩	5.4	4.7	2.2	81	
43			丸石	E	SB13A	細粒砂岩	5.4	4.4	3.7	117	加工・投弾?
44			丸石		表採	中粒砂岩	5.6	5.0	3.5	135	投弾?
45			礫	E	SB15	方解石脈入り細粒砂岩	3.6	3.4	3.2	82	
			剥片	E	SB13B	黒墨石	1.5	1.6	0.3		
			剥片	C	SB05A	凝灰質泥岩	2.3	1.5	0.2		

鉄製品

集落にともなう鉄製品は5点出土している(表5)。何れも破片であるが、器種が判明した2点を図示した(第64図:図版43)

1はSB 10Bより出土した平根系の鉄鎌の破片である。残存部での長さ3.68cm、幅1.06cm、重量3.0gである。

2はSB 14より出土した鏟で、残存部での長さ3.68cm、幅1.05cm、重量4.3gである。茎部から刃部へかけての部分であり、刃部の断面形を観察すると、蒲鉾状に片面を曲面に仕上げていることがわかる。



第64図 鉄製品実測図

表5 鉄製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土遺構・位置	計測値			備考
						長(cm)	幅(cm)	重量(g)	
			不明	B	SB03	2.58	0.45	0.7	細い丸棒状。鍔?
			不明	B	南:27N	4.98	0.79	3.5	のみまたは鏟?
64	1	43	鎌	E	SB10B	3.68	1.06	3.0	平根系鎌
			不明	E	SB11	3.19	1.37	4.2	刀子茎または鏟?
64	2	43	鏟	E	SB14	3.68	1.05	4.3	

第3節 山ノ口古墳群

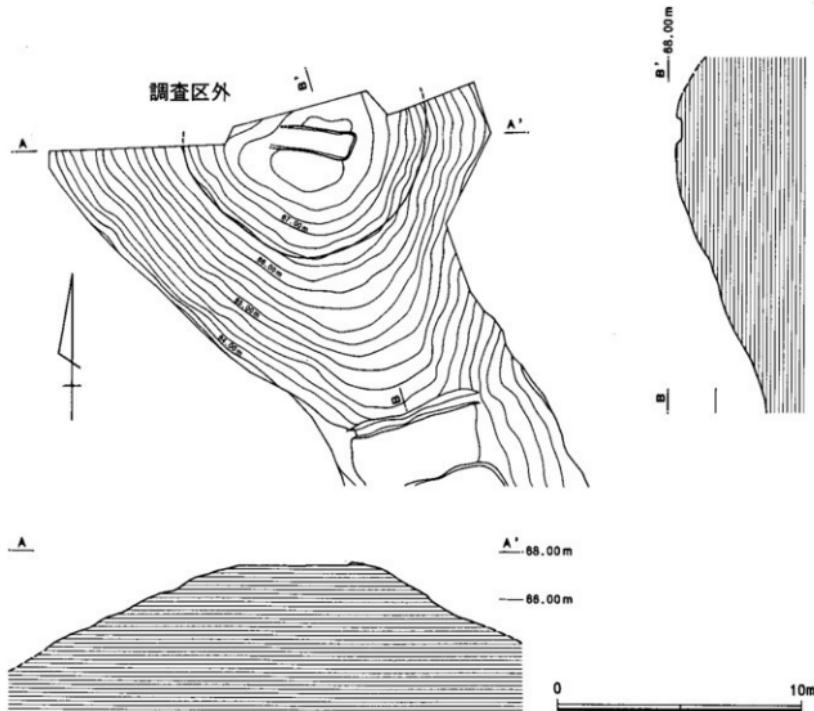
山ノ口3号墳（第65・66図：図版28・29）

3号墳はA区北端、最高位は標高67.7mをはかる。墳丘の北約半分は東名高速道路により削り取られている。残った墳丘においては盛土は認められず、主体部が深さ20cmほど残っていたのみである。墳丘は削りだしたと思われる立ち上がり部分がわずかに認められた。直径が推定10mの円墳で、立ち上がり部分からの残存高は1mである。

主体部はほぼ東西方向を向いている。西端付近は流出等によって検出することができなかった。長軸方向は確認できた部分で約280cm、短軸は100cmである。

覆土は黄褐色粘質土で5cmほどの地山疊を含んでいる。埋葬主体を示す痕跡、疊・粘土等の裏込めなどは検出されなかった。木棺直葬と考えられる。副葬品としては刀子が1点出土した。切先を南、刃を東に、床面から2cmほど浮いた状態で出土した。

主体部の覆土を全てふるいにかけたが、玉類など他の副葬品は発見されなかった。また周辺からも古墳にともなう遺物は検出されていない。



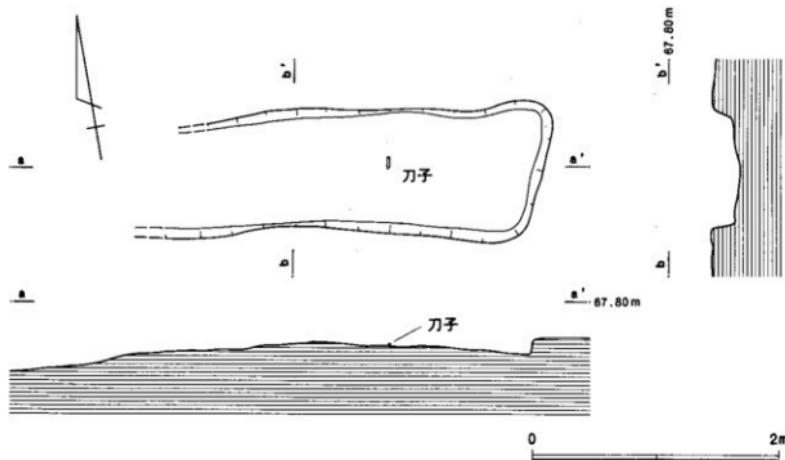
第65図 山ノ口3号墳実測図

刀子（第 67 図：図版 43）

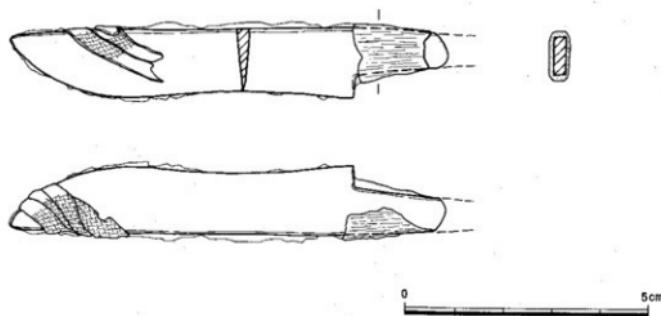
残存長 9.10cm、幅 1.49cm。茎の先端部は欠損している。刃部の中央付近は使用・研ぎによりかなり減っている。

刃部先端付近にひも状の繊維が 4~5 本斜めに巻き付けたような状態で残っている。鞘はなく、布のようなものに直接挟んで副葬されていたと思われる。

茎部には柄材（木質）がわずかに残っている。



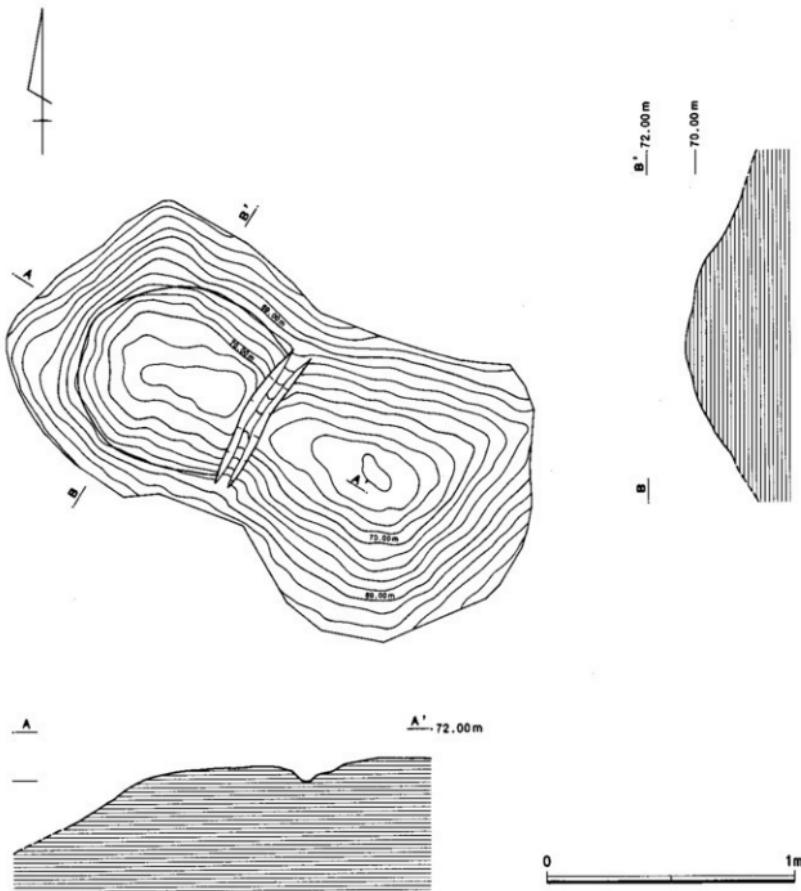
第 66 図 山ノ口 3 号墳主体部実測図



第 67 図 山ノ口 3 号墳実測図

山ノ口 4号墳（第 68 図：図版 29）

4号墳は A区南端、標高 70.4 m と調査区の北側では最も高い場所に位置する円墳である。墳丘は流出しており、盛土・主体部は検出されなかった。もともと東西にやや細長い頂部の中心に直線的な溝を設け、基盤層を削り出すことによって墳丘を形成したと思われる。墳丘は D字のような形をしており、直径約 7.5 m、残存高は約 1.2 m である。溝は幅 1m、深さ 30cm、長さ 6m を検出した。溝をはじめ墳丘周辺から古墳にともなう遺物は出土していない。



第 68 図 山ノ口 4号墳実測図

第4節 その他の時代の遺構と遺物

(1) 焼土・須恵器

C区21Rの焼土と須恵器、G区16Fの焼土と須恵器、A区34Qの須恵器の他、7世紀～8世紀初頭の遺構と遺物を以下に示す（第67～72図：表6：図版30・31・43）。なお須恵器の年代観は遠考研編年（川江1979）を基とした。

21R焼土（第69図：図版30）

C区中心付近、21Rの緩斜面がやや広くなるところで焼土2ヶ所とほぼ完形の須恵器壺蓋2点を検出した。焼土はともに直径50cmほどの楕円形で、2つは約1.5m離れて位置している。断面を観察すると双方とも焼土の厚さは約5cm、地山よりも10cmほど上で、特に掘り込んだりといった痕跡は見られなかつた。須恵器は南の焼土から約1m離れ、3は正位で、4は逆位で出土した。4はつまみが剥離している。ともに7世紀後半と考えられる。周辺には炭化物も多く散布しており、当時の地表面で火を使った痕跡であると考えられる。他に遺構は見つからなかつた。

C区周辺からは他にも壺蓋の破片が7点、壺身の破片が5点出土している。7は21R焼土から10m程北の地点からほぼ完形で出土した（図版31）。時期は8世紀初頭と考えられる。17は壺などの肩の部分と考えられる。

また、土師器脚付盤の壺と脚の結合部分と思われる小破片が2点出土している。あまりの小破片で図化することができなかつたのだが、磐田市事神B古墳群11号墳出土例に類似するものと考えられる。事神B古墳群11号墳出土品の年代は共伴した須恵器より7世紀前半と報告されている（磐田市教委1989）。

16F焼土（第70図：図版31）

C区の北側、16Fの丘陵頂部にも焼土を検出した。こちらの焼土も直径50cmほどの楕円形である。断面では地山のすぐ上に約10cmの厚さで焼土が存在する。C区21Rの場合と同様、他に遺構は検出されなかつた。確認調査時と本調査時に須恵器壺蓋1の破片が散らばった状態で出土している。時期は7世紀中頃と考えられる。他に遺物は見つかっていない。

A区34Q、S B 01検出面からも壺蓋が1点（第71図2）出土している。周辺からは明確な焼土、須恵器にともなうと思われる遺構は見つからなかつた。この壺蓋も時期は7世紀後半と考えられる。

以上をまとめると7世紀～8世紀初頭の間に何度かにわたって、丘陵の上に須恵器の壺・蓋計5～10点、土師質高壺2点などを持ち込み、火を焚いたことが判明した。

これがいったいどのような行為に伴うものであるかは不明といわざるをえないが、今後の類例を待つために報告することとした。



A



B

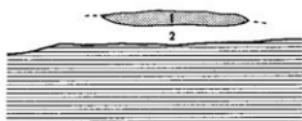


B'



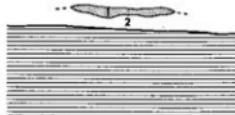
A

A'



B

B'



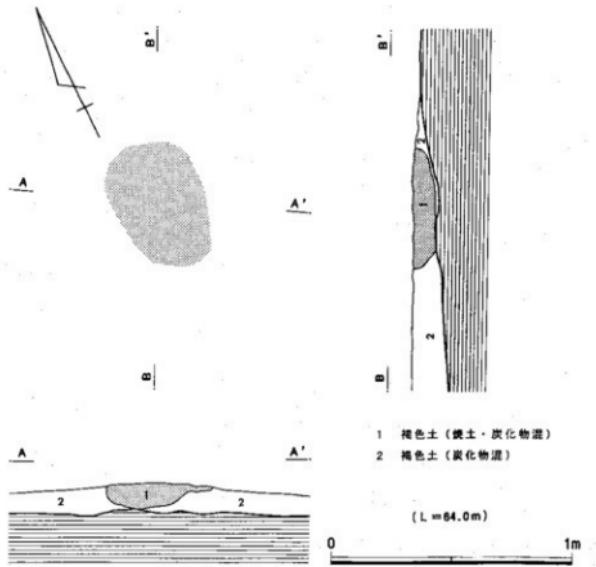
1 赤色土(焼土)

2 線褐色土(炭化物混)

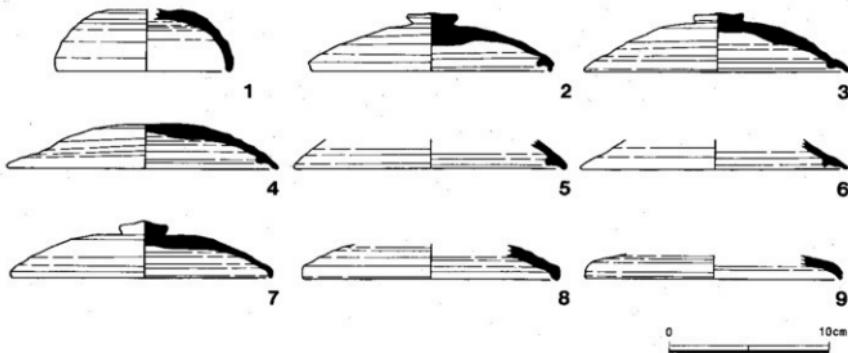
(L = 64.0m)



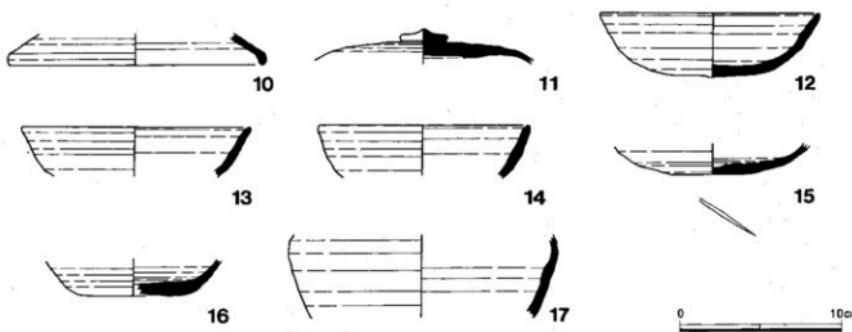
第69図 21R焼土実測図



第70図 16F焼土実測図



第71図 須恵器実測図



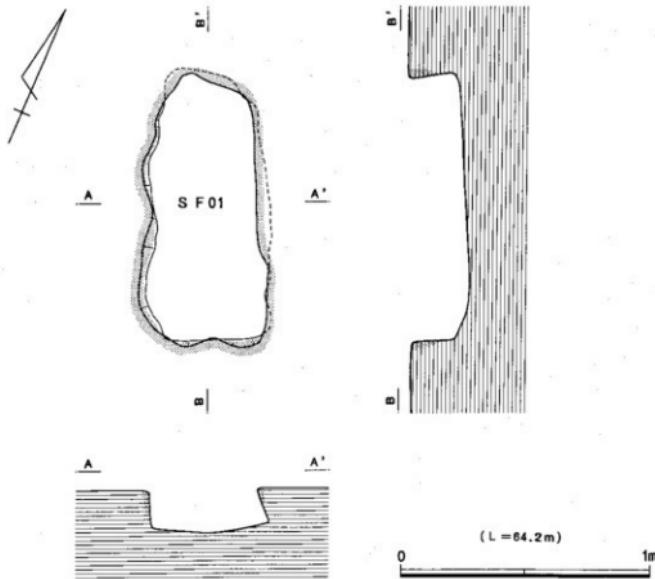
第72図 須恵器実測図

表6 須恵器観察表
()内は残存もしくは推定値

図版番号	遺物番号	写真図版番号	器種	地区	出土位置	計測値(cm)				色調	胎土	焼成	備考	部位	回転
						口径	高さ	最大径	つまみ・底径						
70	1	43	坏蓋	G	16F	(10.2)	(3.8)	(10.6)	-	灰	密	良好			不明
70	2	43	坏蓋	A	34Q	13.8	3.5	15.2	3.2	にぶい黄	密	良好			右・不明
70	3	43	坏蓋	C	21R	15.0	3.7	16.5	3.0	灰白	やや粗	良好			右・左
70	4	43	坏蓋	C	21R	14.5	2.8	16.2	-	灰白	密	良好	つまみ欠損		右・左
70	5		坏蓋	C	22R	(15.6)	(1.8)	(16.9)	-	灰白	密	良好		口縁部片	不明
70	6		坏蓋	C	21R	(14.2)	(1.8)	(16.6)	-	浅黄	密	良好		口縁部片	不明
70	7	43	坏蓋	C	22R	15.0	3.5	15.7	2.8	灰オリーブ	密	良好	自然釉		右・左
70	8		坏蓋	C	21R	(15.6)	(2.1)	(16.0)	-	浅黄	密	良好		口縁部片	不明
70	9		坏蓋	C	21R	(15.4)	(1.5)	(15.9)	-	にぶい黄	密	良好		口縁部片	不明
71	10		坏蓋	C	22Q	(15.0)	(1.9)	(16.0)	-	浅黄	密	良好	自然釉	口縁部片	不明
71	11		坏蓋	C	21R	-	(2.2)	-	3.0	浅黄	密	良好	つまみ天井部		不明
71	12	43	坏身	C	21R	13.3	3.9	-	7.1	灰黄	密	良好			不明
71	13		坏身	C	21R	(13.9)	(3.1)	-	-	灰黄	密	良好		口縁部片	不明
71	14		坏身	C	21R	(12.6)	(3.3)	(12.8)	-	灰白	密	良好		口縁部片	不明
71	15		坏身	C	21R	-	(1.9)	-	5.8	にぶい黄	密	良好		底部片	不明
71	16		坏身	C	21R	-	(2.3)	-	5.0	にぶい黄	密	良好		底部片	不明
71	17		壺?	C	表探	-	(5.1)	(16.2)	-	灰黄	密	良好		肩部片	不明

(2) 焼壁土坑 (S F 01)

焼壁土坑 (S F 01) は A 区北、31 P、尾根上中心よりやや西に設けられていた (第 73 図:図版 31)。主軸方位は N 23°W、1.05 m × 0.43 m の長方形をしている。基盤層を掘り込んでおり、残存した深さは約 20cm、底はほとんど平坦である。壁はほぼ垂直で、所々オーバーハングしている。壁は全面にわたって強く焼けているが、底は焼けていない。被熱・赤変は検出面での厚さが 1 ~ 2cm、上場から約 8cm の部分に見られる。覆土は暗褐色粘質土、分層はできず 1cm ほどの礫を少し含む。炭化物を多く含むが遺物は周辺からも無く、時期は不明である。



第 73 図 焼壁土坑 (S F 01) 実測図

(3) 山茶碗

B 区南斜面より確認調査時に山茶碗片が採集されている (第 74 図)。12 世紀後半と思われる品である。該当する時期の遺構は不明である。この時期に人々がこの丘陵上で活動していた痕跡として報告する。



第 74 図 山茶碗実測図

第IV章 まとめ

第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の集落

(1) 集落の分析

当菖蒲ヶ谷遺跡の中心である弥生時代後期から古墳時代前期の集落について単位群を軸に分析を進めてみる。

竪穴住居跡についてまとめたものが表7である。

住居の平面形を分類するにあたり、客観的なものとしてコーナーの「指数」(比田井 1991) を計測した。指数 100 が正方形、指数 0 が円形である。コーナーが一つしか残っていないものはその値を、複数の場合には平均値を示した。菖蒲ヶ谷遺跡の場合指数 20 以下で「胴張り」で丸い印象を、30 以上で「隅丸方形」と四角に近い印象を受ける。

住居を分類するには面積・柱・住居内土坑に注目した。面積は単純に南北×東西で求めた。正確な床面積ではないが、分類の基準とするには十分であろう。面積が 20 m²以上で住居内土坑を持つものを A 類、面積が 20 m²以下で柱穴の位置が不規則なものを C 類、それら以外を B 類とした。A 類は S B 01・03・05B・19・13B・14A の 6 軒である。C 類は S B 02・08・10B・20 の 4 軒である。

集落の住居群を分析するにあたり、まず竪穴住居の出入口の位置を推定した。出入口は炉と反対側の辺に位置すると考えられる。また住居内土坑が出入口脇に位置することは、東日本の弥生時代からカマド出現期以前において一般的な形態である。以上の点から推定した出入口の大部分は尾根の方向に一致している。このことは狭い尾根上に建てられた住居としては当然と考えられる。住居群は位置、出入口の方向等から 5 つの単位群に分けることが可能であり、I～V 群と呼ぶこととする。各単位群は出入口が向き合うように配置されたまとまりとして認められる。IV 群の S B 12 と V 群の S B 15 は尾根の中心線より離れたところに建てられていて出入口は尾根筋方向ではなく、尾根の中心を向いている。また中心間の距離約 10m の 2 軒が 1 組となっている様子が見受けられる(第 75 図)。

各単位群の様相

I 群は S B 01・22・02・03 の 4 軒からなる。調査区の A 区と B 区にあたる。この群では他の群のように 2 軒のセットは見られなかった。A 区の中央部は削平されており、住居が存在した可能性はある。この I 群の出土土器は従来の編年に従えば、元屋敷式で古墳時代前期に位置づけられる。他の群の出土遺物が弥生後期・菊川式の範疇であると比べ様相が大きく異なっている。S B 01 と 03 には尾根の山側に排水のためと考えられる溝を持っていることも他の群にはいっさい見られない特徴である。その中で S B 03 は高坏が非常に多い点で際立った存在である。規模も 6 m 近くと大きく、この集落の中でも特別な存在であったことが想像できる。ただし立地は西側の支尾根の先端、標高 57.8 m と集落の中で最も低い位置にある。D 区は遺構が見つかなかったが小型の高坏もしくはミニチュア台付壺が 3 点出土しており、祭祀的な様子がうかがえ S B 03 との関係が深いと想像される。S B 01 と 03 が A 類、02 は C 類、22 は不明である。

II 群は S B 04 と 05B、07 と 08 の 2 組、そして 05A の 5 軒である。今回の調査における C 区がその範囲である。S B 04 と S B 05A は接近していく同時に存在できないと考えられる。先行する S B 05A に対応する住居が見つかっていないが、C 区の中央鞍部は削平されておりそこに存在していた可能性が考えられる。S B 08 は建て替えがある。S B 05B が A 類、08 が C 類である。

表7 空穴住居一覧表

地区	SB	グリッド		段階	立地	標高 (m)	方位	規模 (南北×東西m)	面積 (m ²)	ビット ト数	ビット間 (南北×東西m)	深さ (m)
A 北	1	34-35P-Q		1	主 鞍部 平坦	63.7	N14° W	5.9×5.2	30.7	4	3.2×2.4	0.18
	22	32P		1	主 頂部	(64.8)	N14° E	—	—	3	3.0×2.8	—
B 北	2	29M		1	支 緩斜面	59.4	N18° E	3.6×(3.6)	(13.0)	2	1.6×—	0.10
	ビット判	29N		1	支 緩斜面横	(60.6)	N20° E	—	—	2	—×2.2	—
C 南	3	26W		1	支 緩斜面先端	57.8	N9° W	(6.1)×5.7	(34.8)	3	3.6×2.6	0.36
	4	22-230-R		1	主 緩斜面	65.4	N22° W	(5.5)×(5.5)	(30.3)	1	—	0.14
D 北	5A	吉		2	主 緩斜面	64.7	N18° W	(4.9)×(5.4)	(26.5)	2	—×3.0	0.22
	5B	新				64.2	N20° W	4.7×4.5	21.2	4	2.9×2.8	0.35
E 南	6											
	7	18P		1	主 頂部	66.7	N19° E	5.1×(4.2)	(21.4)	3	2.6×2.4	0.16
F 北	8	170		2	主 鞍部	65.7	N38° E	4.4×(3.8)	(16.7)	5	2.1×1.7	0.24
	9	11-12K		1	主 頂部	70.8	N55° E	4.3×(3.9)	(16.8)	4	2.1×2.3	0.12
G 南	10A	吉		2	主 鞍部 平坦	69.9	N32° E	(4.7)×(5.1)	(24.0)	2	—×2.0	0.46
	10B	新				69.6	N34° E	(3.4)×(4.0)	(13.6)	3	—×2.2	0.20
H 南	11	101-J		1	主 鞍部 平坦	69.8	N20° E	(4.6)×(3.7)	(17.0)	4	2.3×2.3	0.14
	12	91-J		1	主 斜面横	71.3	N3° W	(3.6)×(4.0)	(14.4)	4	1.3×2.0	0.46
I 南	19	81-J		1	主 頂部	73.8	N18° E	(4.8)×(4.7)	(22.6)	5	1.9×2.7	0.46
	13A	古		2	主 鞍部 平坦	72.7	N8° E	(3.9)×3.8	(14.8)	0	—	0.16
J 南	13B	新			主 鞍部 平坦	72.5	N9° E	5.7×(4.9)	(27.9)	4	2.6×2.8	0.20
	14A	古?		2-3?	主 頂部	75.3	N9° W	(5.1)×(4.1)	(20.9)	9	2.7×2.2	0.15
K 南	14B	新?				75.4	N2° W	(4.8)×(4.8)	(23.0)		2.4×2.5	0.15
	18	2G-H		3-4?	主 頂部	76.1	N17° E	—	—	—	—	0.25
L 南		古?				76.4	N11° E	—	—	5	3.2×—	—
							N15° E	—	—		3.1×—	—
M 南	15	4F		1	支 斜面横	71.3	N5° W	(4.7)×4.6	(21.6)	6	2.2×2.1	0.39
	16	4C-D		1	支 緩斜面	67.7	N16° E	(3.7)×(3.6)	(13.3)	5	1.6×1.9	0.18
N 南	17	5B		1	支 鞍部	65.3	N39° W	4.1×3.7	15.2	4	2.3×1.9	0.26
	20	14-15G		1	支 鞍部	60.7	N31° W	3.4×(3.4)	(11.6)	2	—×1.8	0.13
O 南	23	14H		1	支 鞍部	60.4	N21° E	—	—	2	—×2.9	—
	H	21	20C-D		1	支 頂部	62.1	N19° W	(3.9)×(4.1)	(16.0)	4	2.2×2.4

[備考]

段階：切り合い・建て替えの回数。

立地：主—主尾根。支—支尾根。

標高：炉・床の標高。

()：推定値。

—：不明。

深さ：住居の壁の最大残存数。

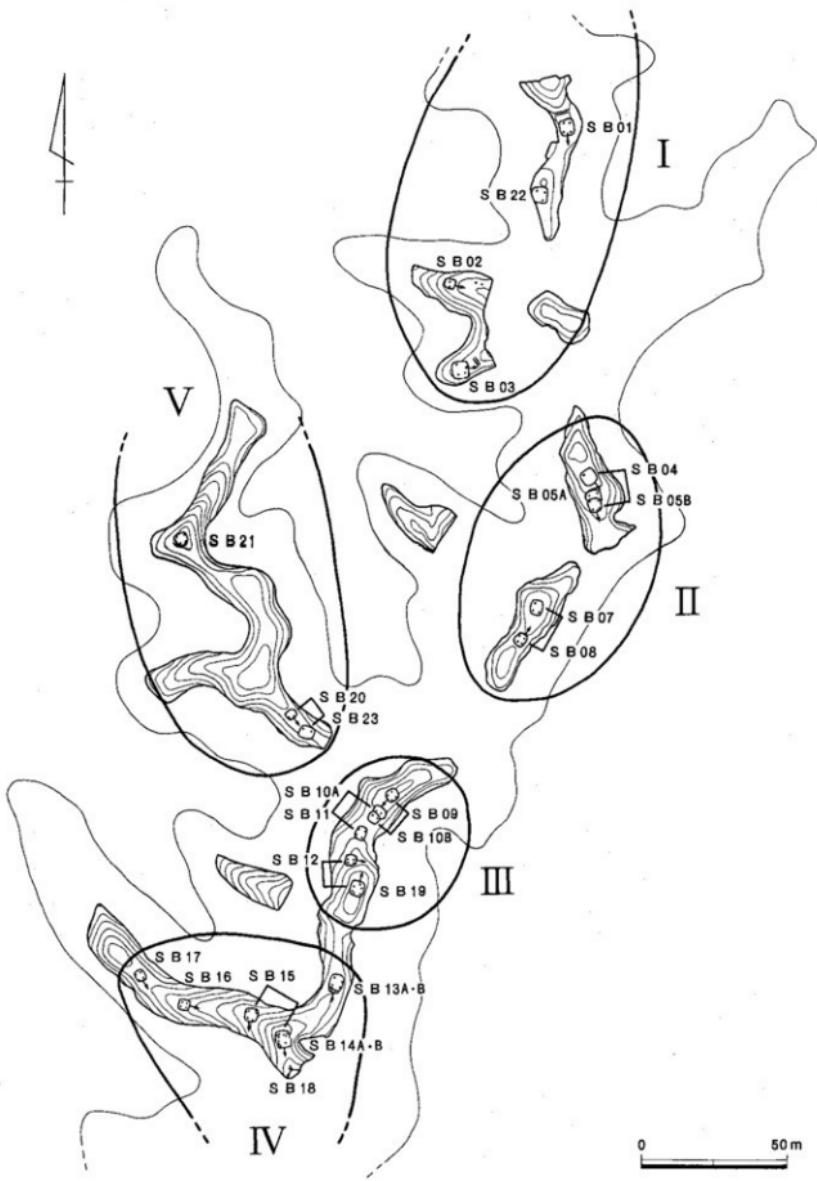
平面形	指數	柱の数・位置	分類	炉	炉の位置	貯蔵穴の有無 (出土遺物)	遺物(土器)量 主な遺物	備考	S B
隅丸方形	29.5	四主柱	A	—	—	有?(鼓石)	極少	SD01(台付壁・小型丸底爐)	1
—	—	—	—	—	—	—	散布		22
隅丸方形?	33.1	不規則	C	地床炉	東・柱外	無	少		2
—	—	—	—	—	—	—	—		ビット判
隅丸方形	43.9	四主柱?	A	地床炉	西寄り	有(壺・台付壺)	多・高坏他・錐?	SD02	3
—	—	—	(B)	粘土炉?	(ほぼ中央)	無	少・壺2・転用台付壺		4
胴張	22.3	(四主柱)	(B)	粘土炉	(北寄り)	—	破片多・壺2		5A
やや胴張	24.3	四主柱	A	粘土炉	北寄り	有(土器・小破片)	多・壺・台付壺3・鉢他		5B
					欠番				6
胴張	21.3	(四主柱)	B	—	—	—	少・石皿	SX01	7
隅丸方形?	32.0	四主柱? 不規則	C	地床炉 粘土炉?	ほぼ中央 南寄り	無	少	建て替え	8
隅丸方形?	—	四主柱	B	地床炉	北・柱間	無	少		9
隅丸方形?	—	四主柱?	(B)	地床炉	北・柱外	—	少		10A
隅丸方形?	—	不規則	C	地床炉	北・柱間	無	少・鉄鎧		10B
胴張?	17.3	四主柱	B	地床炉	北寄り	無	少・鉄片		11
隅丸方形	32.0	四主柱	B	地床炉	西寄り	無	少・筋延石		12
隅丸方形?	—	四主柱	A	—	—	有(鉢)	少・台付壺		13
隅丸方形?	30.5	—	(B)	—	—	有?	少		13A
胴張	10.4	四主柱	A	地床炉	ほぼ中央	有	少・黒曜石片		13B
隅丸方形?	42.7	四主柱	A	地床炉	東寄り	有			14A
やや胴張	27.5	四主柱?	B	地床炉	ほぼ中央	無	やや多・●		14B
隅丸方形?	38.2	—	—	地床炉	北寄り	—	多・壺	台石	
—	—	—	—	—	—	—	—		18
—	—	—	—	—	—	—	—		
胴張?	15.9	四主柱?	B	地床炉	北・柱間	無	破片多・石棒		15
隅丸方形	41.7	四主柱	B	(地床炉)	(西・柱間)	無	やや多・鉢・小型壺	地山に蓄熱の痕跡がわずかに見られた。	16
やや胴張	22.0	四主柱	B	地床炉	南西・柱寄り	無	少		17
隅丸方形?	—	不規則	C	粘土炉	西寄り	無	多	台石 燃失?	20
—	—	—	—	地床炉	中央や西	—	—		23
やや胴張?	—	四主柱	B	地床炉?	南西端?	無	少	炉は住居とは別の造構か?	21

[備考]

指數：平面形指數(比田井 1991 より算出)。

粘土炉：粘土を貼り付け半円形の高まりを作っている。

地床炉：特に施設が認められない。



第75図 積穴住居単位群模式図

III群はSB 09と10B、10Aと11、12と19の3組、6軒である。E区の北側部分である。10Aと11が先行する組で、次の段階として4軒の単位群であったと思われるが、SB 11の継続も否定はできない。SB 19がA類、10BがC類である。

IV群はSB 13A・B・14A・B・18・15・16・17の8軒である。E区の南側部分にあたる。南の調査区外にも現状で平坦なところがあることから、さらに南へ続いている可能性は高い。SB 14A・Bと15が1組と認められるが他には明確な組み合わせを見いだせない。立地からはSB 14A・Bと18を中心としてSB 16さらに17へと展開していったことが想像できる。SB 14A・Bと18には先行する住居が存在し3または4つの段階が存在した可能性もある。SB 13Bと14AがA類である。廃棄土坑と考えられるSX 02はこの群にともなう遺構であろう。

V群はSB 20・23・21の3軒とした。G・H区である。G区からI区にかけては茶畠として利用されていた。G区頂部付近からは遺物が採取されていることから、ある程度の数の住居が破壊されていると考えられる。本来は2つの単位群であったかもしれない。SB 20がC類である。

各単位群にA類が1・2軒、C類が1軒という傾向が見られる。

住居の変遷

住居の切り合いから2つの段階が存在したことは確実である。IV群のSB 15は床面上の土器は無く覆土中より多くの破片が出土していることから、住居の廃絶後にその底に土器が廃棄されていたと考えられる。

そのようなことをふまえて住居の変遷を想定したのが表8である。点線の矢印はその期間にも存在した可能性を示している。

その結果、同時存在していたと考えられる住居の最大数は21軒で、各群は3~6軒で構成されたこととなる。さらに各群の中で2軒のセットがみられるところもある。この数字は周辺地域の調査例とも一致し、菖蒲ヶ谷遺跡においても5軒前後の小単位が集まって集落を形成していたといえよう。ただ周辺の例では小単位ごとにみられる1軒の掘立柱建物が当遺跡においては存在していない。

住居の面積と平面形

各単位群ごとに面積・指數を比較したのが第76図と第77図である。白抜きの印は住居の規模が南北・東西とともに推定値であるものである。

面積を見るとI群でA類の2軒とC類の1軒との差が大きいことがわかる。III群では差が少ないが計測する際に推定の部分が大きく、II~V群はほぼ同じような分布をしているとみてよいであろう。

指數はI群ではA・C類とともに大きく、より方形である。IV群では分散しているが、指數が大きいものは平面形の推定部分が大きいためにそのような結果が出てしまっている可能性がある。全体としては、南のIV群から北のI群に向かって指數が大きくなり、より方形になっていく傾向が見える。

表8 積穴住居変遷表

群	1段階	2段階
I群	-----> SB01	
	-----> SB22	
	-----> SB02	
	-----> SB03	
II群	× SB04	
	SB05A SB05B	
	-----> SB07	
	SB08① SB08②	
III群	-----> SB09	
	SB10A SB10B	
	SB11 ----->	
	-----> SB12	
	-----> SB19	
IV群	SB13A SB13B	
	SB14(A) SB14(B)	
	SB15 土器廃棄	↓
	?	SB18
	-----> SB16	
	-----> SB17	
	-----> SB20	
V群	-----> SB23	
	-----> SB21	

C類は計測できたのがS B 02と08の2軒だけだがともに四角い部類に属する。よってC類の特徴として面積が狭い、柱の位置から4本の主柱ではない、より方形であるという点があげられる。

このC類を考えるのに参考となる遺跡に藤枝市稻ヶ谷遺跡（弥生後期）がある。そこでは面積が広い住居は丘陵尾根上や緩斜面など比較的傾斜の緩やかな場所に位置する。小規模なせまい住居は広い住居のまわりの尾根や緩斜面の縁に位置し、柱穴もそろわざ、炉址・遺物を伴わないものが多い。これらはいくつかは納屋・倉庫としての機能が考えられ、生活の拠点としての大型住居と、納屋・倉庫と考えられる掘立柱建物・小住居が2~6軒からなるまとまりを構成している（八木・磯部 1980）。

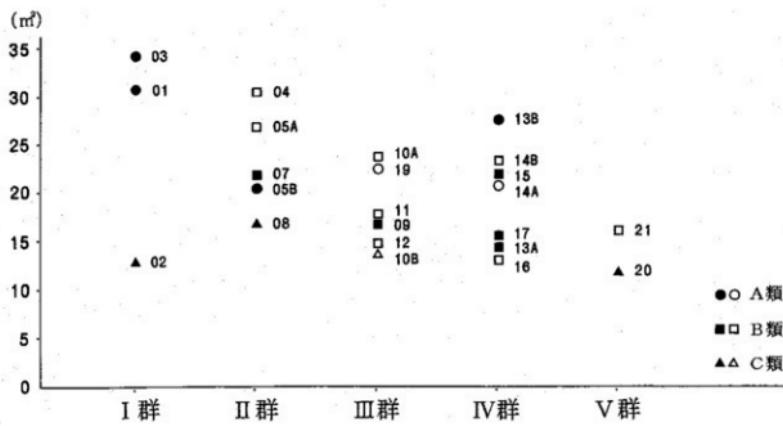
C類の立地は他の住居と違いは認められない。遺物も出土し、炉を持つことから生活の場であったと思われる。一方S B 12と15は尾根筋からずれるという立地、規模が小さいという点で稻ヶ谷遺跡の例と共に通点がある。この2軒とC類をあわせて考えた場合、各単位群に1軒もしくは2軒が存在し、S B 02以外はA類またはB類と2軒のセット関係がみられる。よって納屋・倉庫とまではみなせないが、他のやや規模の大きい住居との関係において存在する住居と考えられる。

結論

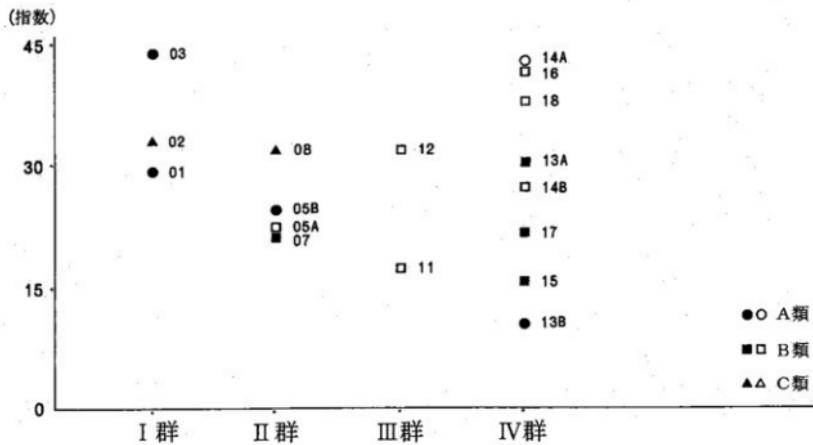
単位群間の比較に戻ると、I群が出土土器だけでなく、溝の存在・A類とC類との面積格差・より方形に近いという住居の形態・2軒のセットがみられない、というような点において他のグループと異なっていることが示される。

ではこの差は何に起因するのであろうか。まず考えるべきは時期差である。南側に住居を築いていた集団が北に移動したのであろうか。しかしきくつかの住居は切り合って同じ位置にとどまっていることから、あえてこのわずかな距離を移動することは考えにくい。では集落が廃絶した後に異なった集団が来たのであろうか。そう考えた場合、全く重ならずに違う地点に集落を築いたとはあまりにも偶然の感が否めない。

そのようなことからI群は他の単位群と最終段階において同時に存在していたと考えたい。この差は単位群の差であり、弥生の伝統を強く受け継ぐ集団と古墳の新しい文化を持った集団の差である。I群は切り合いが無く1段階だけである。V群も同様で1段階である。III群では3または4段階の可能性が考えられ、S X 02・S B 15と土器の集中的な廃棄が見られることから存続期間が他の単位群よりも長かったと思われる。住居の形態が南から北に向かって方形に近づいていくということからも、南のIII群より北に向かって集落が拡大していったという想定が可能であろう。そのような動きの中でI群は新しい時代の要素を取り入れた集団であったと思われる。



第76図 積穴住居面積比較図



第77図 積穴住居平面形指数比較図

(2) 土器の転用について

今回の調査において出土した土器の中に転用されたと考えられるものが見られる。広い意味では壺を製作途中で鉢にしてしまうのも含まれるかもしれないが、ここでは焼成され一度は完成したであろう後に手を加えたものを転用として紹介する。

転用されたと思われる土器を打ち欠きの状況・被熱・欠損に注目し図化したのが第78図である。先に示した実測図は本来の形を推定・復原し打ち欠き部分を破断と表現しているが、ここでは残存状態を示し、打ち欠いてあると思われる部分は壺部として表現している。このほかにもS B 08の81とS B 17の142は台付壺の台部で転用も考えられるが、摩滅が激しく認定するには至らなかった。

12~34はS B 03の出土である。12と13は同一個体と考えられる壺で、肩~口縁部、胸部中央以下と粘土接合部で切り離されている。間には1段か2段の粘土の積み上げがあったであろう。12は外面、内面にわずかにススが付着している。口縁部を上にして住居入り口付近、土坑の脇に置かれていた。置き台として使われたと思われる。わずかではあるがススが付着していることから、火にかけられた可能性もある。13は土坑に逆さまに落ちたように入っていた。詳しくは別項で土坑に関連して述べることとする。

32、33、34はいずれも高環の脚部で32と33は壺部の接合部分で切り離され、34はわずかに壺部を残し円盤状に打ち欠いている。

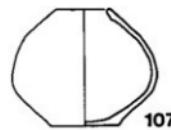
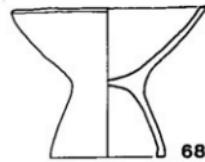
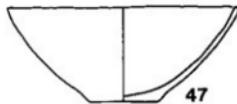
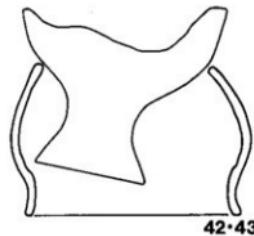
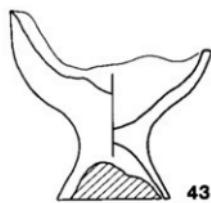
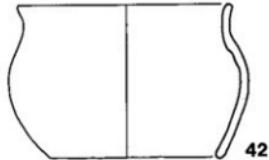
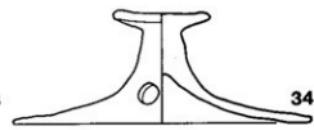
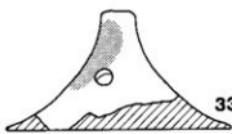
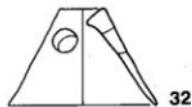
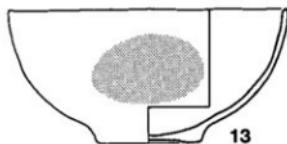
32は炉の近くから出土し、強く火を受けている。33は一部にススが付着している。脚部裾は欠損し、貯蔵穴脇から倒れた状態で出土している。34は裾部の一部が炉の上に乗って出土している。脚端の一部が欠損し、脚内面に火を受けたような痕跡がある。

台付壺の台部3点を使って支脚として使用している例が報告されており(桐原1988)、ここでも高環脚部を3点使用して同様の利用も想定できようが、34は裾が広がりすぎており3点を接近して並べることはできない。その場合はかなり浅く広いものを作せていると考えられる。鉢36は火を受けていて、候補にはなりえるだろうが、被熱の状況からは否定できない。33は出土位置も離れていることからそれ別に使用されている可能性の方が高いようである。

42・43は別個体の台付壺であり組み合わされた状態でS B 04の柱穴脇から出土している(図版7)。組み合わせた状態も第78図に示した。42は胸部中央付近の粘土接合部で切り離されている。43は台部が一部を欠損した胸部下半である。42を逆に置いた中に43が乗せられていた。43の上端部は検出面に近いので使用時はもう少し上部まで存在していたと思われる。台部が破損し不安定となった43を安定させるために42が台として使われている。使用法としては高環のような使い方が考えられるが、上に乗っている43がさらに頸部付近まで残っていたとすると鉢に近づく。S B 16では柱穴の脇に鉢138が置かれており同じような利用がなされていたかもしれない。また42の内面、胸部下端にはススが付着している。当初の台付壺としての使用によりついた可能性もあるが、転用時に火にかけられていたのかもしれない。炉の近くで出土したことから42は胸部以上が残っていて台付壺として使用を続けていた可能性もあるう。

47、68、107は壺・台付壺を接合部で切り離し使用したものである。47は鉢として、68は高環または器台として、107はそのまま壺として使ったであろう。

今回の調査において住居内から完形に近い土器はわずかしか出土せず、集落を移る際に持ち出したことが想像できる。転用された土器が多いことと合わせ、土器を貴重なものとして大事にしていたと思われる。



■ 欠損部

第78図 転用土器観察図

(3) 遺物の出土位置からの住居内空間の復原

今回の調査において計 26 軒の堅穴住居を検出したが、重複している住居はわずかに 4 軒のみである。いくつかの住居跡からは住居廃絶時に遺棄されたと想定できる土器が出土している。それらの出土位置からは住居内空間の利用を推定することが可能であると考えられる。完形もしくは完形に近い土器が出土し、住居廃絶時の位置を表していると考えられるものをいくつか選び出し、土器の出土位置・図を示したのが第 79 図である。ただし S B 03 の壺 13、台付甕 25、S B 19 の鉢 97 は土坑内出土であり、別に住居内土坑について述べる際に触れる。

最も多くの完形に近い土器が出土している S B 05B を中心に見ていくこととする。

まず入り口から奥、炉と壁の間には台付甕が 3 個体置かれている。これ以外にも炉の上に 1 個体がつぶれた状態で出土している。同様なことは S B 19、S B 20 でも見られる。またここでは示さなかったが S B 11 も炉と壁の間で台付甕が出土している。このことから炉で使用される台付甕は最も近い壁際に収納されていた事が想定できる。

次に住居を入って右の空間に注目すると、壺 52 と台付甕 68 が壁際にある。この台付甕 68 は先に述べたように転用され、高坏もしくは器台として使われていたと考えられるものである。壺 52 内の土壌からはイネが検出されておりイネを貯蔵していたと考えられる。

壺の例では S B 04 が同類であろう。S B 05A の壺 44 は底部は炉の北側、胴部は炉の上に乗っていた。鉢に転用されたであろう壺底部 47 がさらに壁際にある。

S B 03 では出入口すぐ右に多くの土器が出土している。壺の口縁から頸の部分である 12 も転用され、台としての機能が考えられる。鉢 36 とセットの可能性が考えられる。

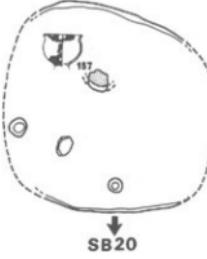
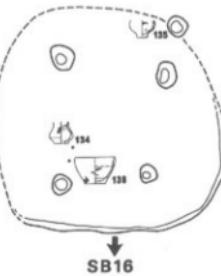
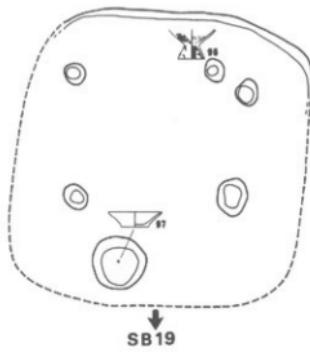
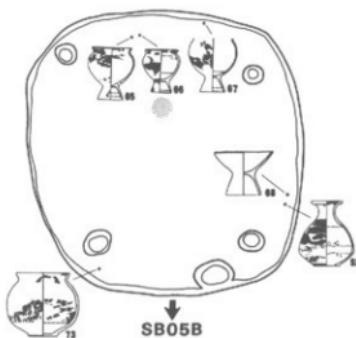
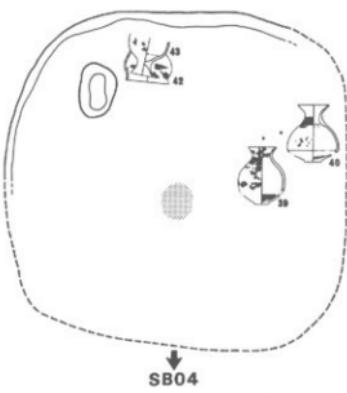
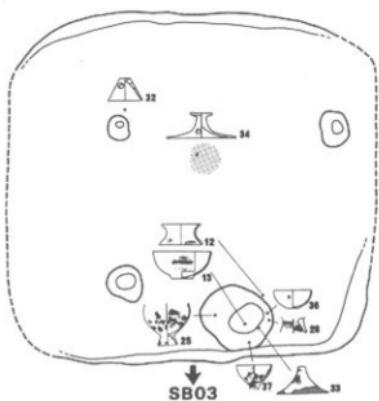
S B 05B 出入口左隅に大型鉢 73 がある。S B 16 の鉢 138 とは柱の内と外という違いはあるが、近い形態である。S B 04 の台付甕 42・43 を組み合わせたものも鉢として使用した可能性がある。鉢に類するものは強い規則性は感じられないが、左側の柱の周辺という点では一致している。

S B 16 では小型の壺が 2 点出土しているが他に例がなく、規則性を考えることはできない。

S B 03 では高坏脚部 32・34 の 2 点があるが、いずれも転用され被熱が見られる。炉の付近から出土していることから、炉において支柱の様な使用法が推測される。

簡単にまとめると、入り口奥・炉と壁の間に台付甕、右側が壺など、左の柱周辺に鉢という傾向が導き出せる。これは廃絶時の位置であり片付けのような行為があったのか、生活時の配置をどの程度反映しているのかが問題ではあるが、焼失住居の例と大きな違いではなく生活時の様子を示していると考えられる（石野 1984）。全体を通じて見た場合、入って左の柱間から壁にかけての空間には土器がない。生活に伴う諸作業、寝床としてのスペースと考えて良いであろう。S B 20 は規模が小さく柱穴はそろっていない。他の住居とは多少異なる建物を考えなくてはいけないが、台石（S3）周辺、柱の間が作業の場であろうことは推測できる。

住居によって遺物の量に差がみられる。遺構の遺存状況にもよるが、残りがいいにもかかわらず遺物がほとんど出土していない住居があり、廃絶時にほとんどの道具類を持ち出したものと考えられる。その一方で完形に近い土器を多く残している C 区 S B 05B の例もある。これが生活時そのままではないだろうが住居廃絶時に持ち出していないと思われる。また S B 03 でも多くの土器が床面から出土しているがこちらは転用されたと考えられるものがほとんどで純粹な完形はほとんどない。転用品は廃棄し、完形品を持ち出したと考えられる。E 区 S B 15 では完形品はなく覆土中から破片が大量に出土している。住居廃絶時・廃絶後の土器の廃棄・持ち出しには様々なパターンがあることがわかる。



↓ 出入口

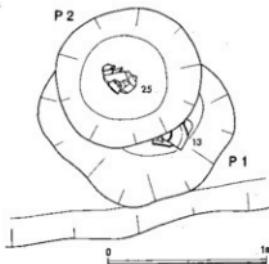
第 79 図 土器出土位置模式図

(4) 住居内土坑について

今回の調査において柱穴以外の土坑をもつ竪穴住居が検出されている。この土坑は住居の中心に対して炉と反対側の壁際に掘り込まれている。この土坑は貯蔵穴と呼ばれることが多く、東日本では弥生時代以降は出入り口横に位置し、カマドが導入されるとカマドの横に移動することが明らかである。ただし用途として貯蔵のためのものかは確定できていない。遠江の場合もおむねそのような動向と一致しているようである。この土坑は他のピットと比較した場合特に目立った特徴が無く、住居が重複している場合は認定が困難であるため分析されることが多い。当遺跡では住居の重複が少なく、有無を含め明確に認定できるものが多い。また底から完形に近い土器が検出された例もあったので、若干の考察をしてみたい。

土坑を持つ住居は先にA類とした6軒である。そのうちS B 03では土坑を一度で検出できず、2・3面あるような印象を受けている。確認が得られなかったため前章では一つの土坑としたが、検出の過程を示すと以下のようである(第80図:図版7)。まず床面と思われる面で80cm×75cm、深さ15cmの土坑として検出し、台付壺25が伏せたような状態で出土した。土器を取り上げ、床面をはずすとやや座んだところにさらに土器が多く見つかった。これらの土器を取り上げると壺13が出土し最終的に約1mの土坑となったのである。そこで最終的に壺が出土した土坑をP 1、最初に検出し台付壺が出土した土坑をP 2として分析を行う。

土坑の大きさ等を表9に示す。これらの土坑はいくつかの点からa~c類の3つに分類することができる。a類はS B 01で円形に近い橢円形、長径で48cm、深さ15cmと他に比べ小さい。b類はS B 05B・13B・14Aの3つで橢円形、長径が67~80cm短径は40cm台とほぼ同じ大きさである。深さはそれぞれ異なっている。中でもS B 05B・14Aはほぼ垂直に深く掘られている。c類はS B 03 P 1・P 2と19で1m近い円形の穴、断面はやや皿状、底に土器が埋納されている。S B 03のP 1は壺の脛部以下13が逆位で、P 2は台付壺の頸部以下25が逆位で出土した。S B 19は鉢97が正位で置かれたような状況である。壺13は脛部以下であるが、粘土接合部で分離することによって口径22.8cm、器高11.1cmの鉢に加工されている。台付壺25は



第80図 S B 03 住居内土坑実測図

表9 住居内土坑一覧表

SB	01	03		05B	19	13B	14A
		P1	P2				
分類	a	c	c	b	c	b	b
平面形	橢円形	円形	円形	橢円形	円形	橢円形	橢円形
長径(cm)	48	114	80	67	90	70	80
短径(cm)	42	110	75	42	88	40	46
深さ(cm)	15	23	15	36	28	24	49
遺物	敲石4	壺13	台付壺25		鉢97		
位置(住居内 から見て)	中央	やや左	やや左	左	やや右	右	右

明瞭な加工はみられないものの、口縁部は欠損していたとみられ、残った部位では口径20cm深さ13cmになる。鉢97は口径21.4cm、器高6.1cmである。出土状態が異なるが、大きさも近く、「鉢」状である点は共通している(第81図)。また97は、摩滅のため断面と口縁の判別が困難である。とりあえず鉢としたが、形態としては壺の底部であり、壺の転用であるならば完形の土器ではないという点でも一致する。SB01では敲石が、SB05Bでは土器破片が底部付近より出土している。

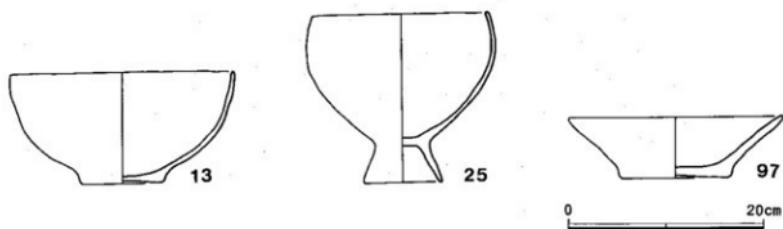
次に住居の中での位置をみてみると。a類SB01は住居の中心線上、壁からやや離れたところに位置する。b類SB05Bは住居内からみて左、壁に接して、SB13B・14Aは右、やや壁から離れたところに位置している。SB13Bでは柱の線上にある。c類SB03P1はやや左で壁に接し、P2はP1より中央に近く壁から離れている。SB19ではやや右である。いずれも中心線上に一部かかるような位置である。このように左右の違いはあるにせよ、大きさ・形状の違いが中心線からの距離に対応している。

弥生時代から古墳時代によく見られる土坑(貯蔵穴)の性格としては様々な考えが提出されている。主なものは「貯蔵穴」「土器・工具の収蔵施設」「貯水用の木製桶」などである(笛森1990)。それらの一つに戸口に胎盤を埋めた施設という考え方がある。弥生・古墳時代の貯蔵穴とされているものに胎盤埋納施設があり、縄文中期の埋甕から現代の民俗例まで系譜がたどれるというものである(木下1970)。ただし縄文時代の埋甕には幼児埋葬の例も指摘されている(渡辺1970)。

この土坑が生活の施設ではなく、胎盤の埋納または幼児埋葬、出産または死という生命に関する施設であるとすれば、住居内土坑を持つ住居が26軒中6軒と少ないことも説明できよう。その場合住居内土坑を持つ住居では出産もしくは幼児の死があったことを示している。

a類SB01は穴が小さく幼児の埋葬は不可能である。b類とc類は何れも可能であろうが、c類は完形ではない土器が存在し、中央線上に近く踏まれる位置にあることが縄文時代の埋甕との共通性を思わせる。b類は土器片が出土したことから住居の魔絶時には開いた状態であった可能性が高い。

今回の調査では用途を確定することができなかったため想像の域を出ていない。今後の類似の調査で自然科学的な分析などを用いてまず用途を限定したならば、集落の構成さらには社会の実像に迫れるのではないかだろうか。



第81図 住居内土坑出土土器実測図

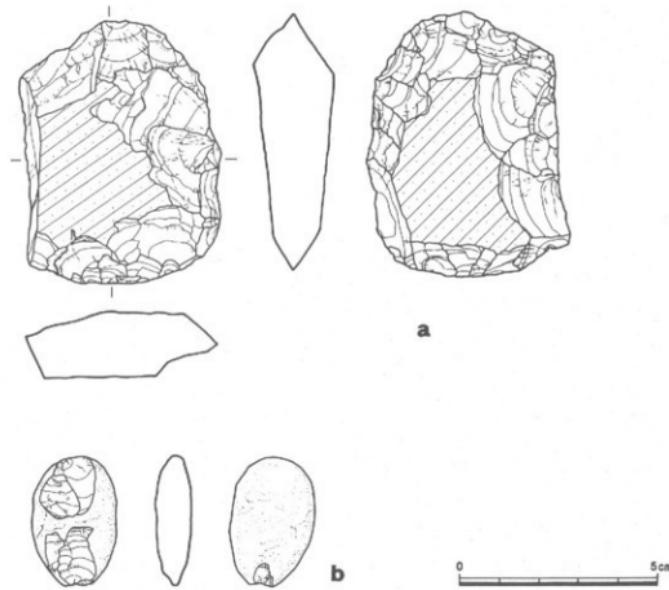
(5) 玉作について

今回の調査で出土した S B 12 の筋砥石（第 67 図 34:図版 39）は玉砥石であり、玉作に直接結びつく遺物であろう。そこで当遺跡における玉作の可能性を探ってみる。

不明石器（第 68 図 37・38:図版 39）として紹介した 2 点の石器は楔形石器と呼びうるものであるが、両極剥離以外の特徴は旧石器・縄文時代のものとはかなり異なっている。また当遺跡には縄文時代に属する遺構はなく、遺物も石棒（石劍）1 点と黒耀石の破片が 1 点が出土しているだけであり、この 2 点の石器は縄文時代の石器とは認められない。周辺地域での類例は無いが、新潟県柏崎市下谷地遺跡では弥生時代後期の管玉製作に使用されたと考えられる楔形石器、擦切具が未製品とともに大量に出土している（佐藤 1979）。その中には大きさが異なるが形態は非常に似ているものも存在する。（第 82 図）

a は流紋岩製で部分的に研磨痕が残ることから石包丁、擦切具と共に共通する特徴を持つが、石材や形態製作法などに違いがみられると報告されている。b は楔形石器 B-1 類とされているものの一例で小楕円礫を素材とし、長軸に沿って加撃している。石材は珪岩が多く、図のものは長さ 3.5cm 程の中型のものだが、長さ 5cm、幅 5cm 程の大型のものもあるということである。2 点の不明石器も玉作に関係すると考えることができよう。

その他台石、砥石、敲石、鉄製品も玉作に使われた可能性を考えられる。そこで住居跡ごとに玉作に



第 82 図 下谷地遺跡出土石器実測図
(報告書掲載図を再トレース)
116

関連する可能性のある遺物の出土状況を表したのが表10である。

古墳時代ではあるが工房としての堅穴（住居）に関する特徴としては工作用ピットがある。千葉県下総町稻荷峰玉作遺跡第1号址では堅穴隅に深さ12cm、85cm×75cmの長方形のピットがある。この浅いピットの隅にさらに50cm×49cm、床面からの深さ50cmの深い穴が、反対の2隅に直径10cm深さ40cmほどの小ピットが掘られている。この二段のピットの周辺からは未製品剥片等が集中するという特徴がある。また他にも隅・壁際にある方形のピットも工作用ピットとされている（寺村1974）。ひるがえって菖蒲ヶ谷遺跡の住居を見た場合、明らかに工作用のピットと呼べるものはないが、住居内土坑としたピットは位置的には近いものである。a～c類のいずれかが作業用のピットであったとも考えられ、その中ではb類としたものが最も可能性が高いと思われる。

以上をふまえ表10をみると玉作に関連すると思われる遺物が集中する住居、工房と認定できる住居はみられない。

石材・剥片・未製品・完成品などが全く見つかっていないため、筋砥石を用いて何らかの玉を製作していたのであろうが、どのような玉が作られていたかは不明である。玉の材料となる石であれば当然選ばれた石であり、地山の礫とは明らかに異なるため容易に判別できるものである。今回の調査では住居跡覆土からは約15mmの黒耀石剥片を検出している。住居内に有る程度の大きさ・量の石材があれば発見できたと確信できる。しかし全く検出できなかったということは、それほど専門的・多量に生産していたのではないと考えられる。

表10 玉作関連遺物出土状況一覧表
(○: 覆土内より出土 △: 周辺包含層より出土)

群	地区	SB	分類	不明石器 (楔形石器)	筋砥石	台石	鉢石	砥石		貯蔵穴 (作業用 ピット?)	鉄製品	備考
								荒砥石	仕上砥石			
I	A	01	A					○		a類		
		02	C	△				△		無		
		03	A					○		c類	鉄？	
II	C	04	(B)					○		無		
		05A	(B)							不明		
		05B	A	○						b類		
		07	B					○	○	※	不明	※石皿
		08	C					○		無		
III	E	09	B					△		無		
		10A	(B)							不明		
		10B	C							無	鉄錠	
		11	B						○	無	鉄片	
		12	B	○						無		
IV	E	19	A							c類		
		13A	(B)					○	○	有?		
		13B	A					○	○	b類		
		14A	A							b類	鉄	※黒砥石
		14B	B							無		
V	G	18	—			○				不明		
		15	B					○	○	無		
		16	B				△	○		無		
		17	B							無		
		20	C			○				無		
V	H	21	B							無		

第2節 焼壁土坑（S F 01）

焼壁土坑（S F 01）は、尾根の中心線よりやや西側に設けられており、1.05 m×0.43 mの長方形をしている。残存した深さは約20cm、底はほとんど平坦である。壁はほぼ垂直で、所々オーバーハングしている。壁は全面にわたって強く焼けているが、底は焼けていない。炭化物を多く含むが遺物は周辺からも無く、時期は不明である。

この様な遺構の類例としては炭焼窯がある。浜松市都田地区では平安時代後期から鎌倉時代の炭焼窯を（浜松市博物館 1989）、また「焼壁土坑」として奈良時代の「径1～2mの方形または円形を呈する土坑」を報告している（浜松市博物館 1990）。前者は長さ2～8mと規模が大きいものである。後者のいくつかは堆積状況などから炭焼窯としている。

当遺跡の焼壁土坑（S F 01）は長さ1.05m、幅0.43mと平安・鎌倉の炭焼窯と比べるとあまりに小さく、また床面の溝・焚口といった窯としての施設が無いといった点も異なる。一方、奈良時代の炭焼窯は平面が長方形、長さ1.21～1.68m、幅0.62～0.95mと多少大きいが同規模と考えて差し支えないものである。底及び底付近の壁が焼けていないなど、図で見る限り火の受け方も近いようである。

他に同様の遺構としては、藤枝市内瀬戸火葬墓群の「焼壁土壙」がある（八木・磯部 1980）。奈良時代から一部平安時代にまで及ぶとしている。こちらの「焼壁土壙」は平面形が方形もしくは長方形で、長さは0.60～1.41m、幅が0.33～0.87mである。底が焼けてないことも合わせ、当遺跡の焼壁土坑（S F 01）と類似の遺構とみなせる。報告書において、「焼壁土壙」は小規模石室を持った火葬墓群中に分布していること、遺物を副葬品とみること、そして遺構の規模から火葬墓と結論づけている。

この遺構の共通点はどちらの遺跡の場合も群と呼べるような密集・連続性が認められることである。浜松市の場合は単独が無いわけではないが、円形・方形を合わせると100m程の範囲に5～20の焼壁土坑が分布している。藤枝市の例でも同様である。また丘陵上に位置している点も一致している。

今回の調査ではS F 01が1基だけ検出されたが、以上の例から調査区外の急斜面地に存在した可能性は低い。よって1基の単独とまでは断定できないものの、ごく少数とみることができる。

浜松市の例と藤枝市の例は構造としてはほぼ同じで、時期も同じ奈良時代であるが主に周囲の遺構の相違により異なる結論となっている。当遺跡の焼壁土坑（S F 01）は単独であり、結論づけることはできない。

また、この焼壁土坑が奈良時代の遺構であるならば、須恵器の時期は7世紀から8世紀初頭とやや先行するものの、焼土・須恵器と何らかのつながりを考えてもよいのと思われる。7世紀前半に土師器脚付盤、7世紀中頃からは須恵器蓋環を持ち込み地表面で火を焚いていたものが奈良時代になって土坑の中で火を焚くように変化した、という流れを想定してみたいが、結論を得るには今後の類例の増加が必要となろう。

第3節 総括

1. 弥生時代後期～古墳時代前期の集落

丘陵上に計26軒の竪穴住居跡を検出した。調査区外にも集落は続いており、削平されたものを含め全体ではもっと多くの住居が存在していたと考えられる。

住居の向きは尾根の方向にはほぼ従っていて方位とは無関係である。それは狭い尾根に隅丸方形といったやや四角い住居を建てるには当然のことである。また住居の位置も頂部・鞍部・緩斜面と特に選択した様子は見られない。E区のSB12とSB15が尾根の中心線からわずかにずれている他は全て中心線上に位置している。

竪穴住居跡の他には、住居に伴う溝2・ピット2・土坑1が検出されたのみで住居の数に比べて他の遺構が少ないことがこの集落の特徴といえよう。この時期の周辺集落では4軒ほどの竪穴住居に1軒の掘立柱建物（高床倉庫）が伴う例が多い。しかし菖蒲ヶ谷遺跡では掘立柱建物は1軒も検出されず、高床倉庫を持っていなかったと考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけての集落ではかなりな頻度で焼失住居が検出されている。菖蒲ヶ谷遺跡では明確な焼失住居は見つかっていない。SB20にわずかに炭化材が見られたが、明確な焼土層は確認できず、焼失住居の可能性は低いものである。

住居内から出土した炭化材の樹種を同定したところ、広葉樹（散孔材）・クヌギ節・アカガシ亜属・コナラ節・ケヤキ・スダジイが判明した。全て加工された材ではなく細い丸太材である。針葉樹が無いことが特筆できる。

竪穴住居は5軒前後の5つの単位群に分けることができる。調査区域内では最大で20軒前後、集落全体としては30軒に近い住居を持っていたと考えられる。その単位群の中では2軒で1セットになっていると思われる住居が多く認められる。

住居の切り合いなどから、集落は南から北へと拡張していくと推定できる。集落の段階としては2段階以上あるが、全体の存続期間はそれほど長くはないようである。

最も北に位置するI群は他の単位群とは新しい型式の土器を有している等相違点が多い。この違いは時期差ではなく同時に存在していた単位群の中で最も新しい土器を有する単位群であったと思われる。

遺物の特徴としてはB区SB03において高杯が7個体、周辺包含層からも7個体分ほどが出土と突出している。他では高杯の可能性があるものを全てあわせても11点だけである。SB03がこの集落の中で特別な住居であったと思われる。

食料の利用状況を直接示すものとして、イネとマメ科（アズキ？）の種子が出土している。また石皿の痕跡から堅果類を利用していたと思われる。丘陵東側の谷もしくは北側の低地において稲作をするとともに、丘陵上・背後の山中も食料採集の場として活用していたと考えられる。

逆川・原野谷川流域の弥生時代中期から古墳時代中期までの遺跡の動向を第83図に示す。逆川左岸・小笠山北麓には全体的に遺跡が少ないが、菖蒲ヶ谷遺跡を含め近年見つかる例が多く、今後は増加すると思われる。

弥生時代中期には低地縁辺の微高地上に営まれる例が多い。後期には集落の数は増加し、特に丘陵への進出が目立つようになる。古墳時代前期には集落数が減る様子が見られるが立地に関しては同様の傾向が見て取れる。古墳時代中期には再び低地に拠点的な集落が営まれるようになるのである。

弥生時代に後期に集落が丘陵上に進出する理由としては、人口増加にともなう耕地の拡大が考えられる（八木・磯部1980）。また西日本の高地性集落のように政治的緊張から高位置に集落を営んでいるとみなされる遺跡も存在している（松井1988）。

菖蒲ヶ谷遺跡は丘陵上に立地しているが、見晴らしはよくない。より大きい丘陵に挟まれ、奥まった小丘陵上に位置している。出土遺物・遺構からも戦闘的な高地性集落のイメージはない。耕地の拡大に伴い、近くの尾根を選んで集落を営んだと思われる。

菖蒲ヶ谷遺跡と同時期である、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大規模な集落は大きな丘陵上の平坦面に営まれ、小丘陵上には小さな集落の例が多い。点在した住居が20～30軒ほどと大きな集落が細い尾根上に営まれている例は知られていない。菖蒲ヶ谷遺跡周辺は基盤層が非常にもらろい岩盤かなり、尾根が痩せてしまっている区域である。そのような所に進出してきた集団は、細尾根を選択せざるをえず、堅穴住居が建てられる地形的制限から分散して住居を構えることとなったと思われる。

2. 山ノ口古墳群

山ノ口古墳群は東名高速道路の北側に1号墳と2号墳の2基が存在していたことが静岡県文化財地図Ⅱに示されているが、現在は住宅地となり未調査のうちに消滅している。今回の調査で同じ丘陵上、南側に位置する3・4号墳の2基が確認された。

3号墳は直径約10mの木棺直葬の円墳であり、副葬品の刀子が1点検出された。土器の出土がなく明確な時期の決定はできないが木棺直葬、刀子を副葬する点で他の類例から6世紀前半頃の築造と考えられよう。

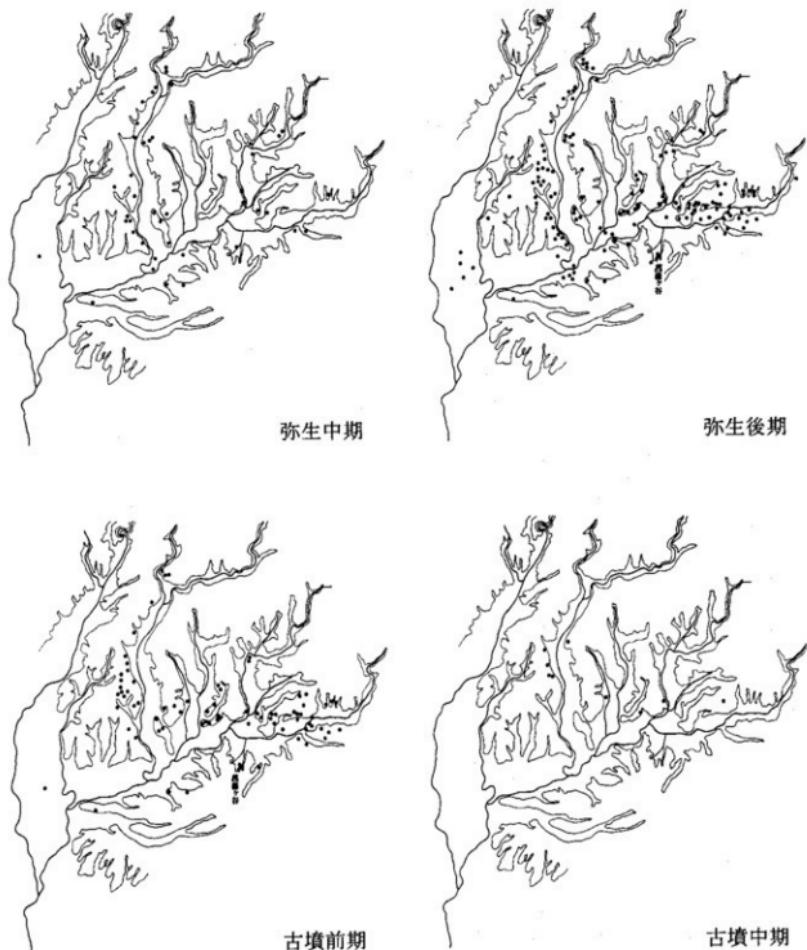
4号墳は墳丘主体部が流出しており詳細は不明だが、約7.5mと墳丘規模がやや小さいものの3号墳と同様な古墳であると思われる。

いずれも盛土は確認されず、3号墳では主体部が基盤層を掘り込んでいる。よって大きく盛土をせず、自然地形を利用し、丘陵を削り出すことによって墳丘の基礎を作ったと考えられる。

調査前は4号墳より南においても墳丘状の高まりがいくつか見られたが、調査の結果古墳は認められず、この4号墳が最南端の古墳であるとの結論が得られた。東名高速道路建設等による破壊、未確認の古墳の可能性を考えても、山ノ口古墳群は4基を大きく越えることのない基数の古墳群であるといえよう。

3. 焼土・須恵器、焼壁土坑

焼壁土坑は遺物を全く伴わずに時期を決定できないが、県下の類例から奈良時代と考えられる。他の地点から検出された焼土・須恵器は7世紀から8世紀初頭であり、時期が近いこと、火を使用するという共通点から両者の関連を考えてよいと思われる。



0 8000 m

第83図 弥生中期～古墳中期集落分布図
(佐藤 1984 を加筆修正)

参考文献

- 足立敏太郎他, 1930 : 静岡県史第一巻。
- 石野博信, 1984 : 古代住居の日常容器。櫛原考古学研究所論集, 第 6. (窪穴住居における日常容器と生活。日本原始・古代住居の研究, 207-245 頁。)
- 市原寿文他, 1979 : 春野の石器時代。
- 井村広巳, 1995 : 踊原遺跡からみた弥生時代後期後半から古墳時代前期の集落。転機, 6.17-32 頁。
- 井村広巳・松本一男, 2000 : 溝ノ口遺跡。
- 岡村道雄, 1983 : ビエス・エスキュー、楔形石器。繩文文化の研究第 7 卷道具と技術。106-116 頁。
- 小和田哲男他, 1984 : 掛川市史 中巻。
- 川江秀孝, 1979 : 静岡県下の須恵器について。静岡県考古学会シンポジウム, 2.9-22 頁。
- 木下 忠, 1970 : 戸口に胎盤を埋める呪術。考古学ジャーナル, 42.12-19 頁。
- 桐原直彦, 1988 : 転用土器雑考 Part2. 東国史論, 3.27-34 頁。
- 黒田勝久・山田元広他, 1985 : 千頭山王遺跡 昭和 59 年度確認調査報告。
- 佐藤則之, 1979 : 石器・北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告 下谷地遺跡。31-36 頁。
- 佐藤由紀男, 1984 : 弥生時代の遺跡の概要。掛川市遺跡分布調査報告 I。35-57 頁。
- 佐藤由紀男・古環境研究所, 1995 : 川山遺跡 II。
- 笛森健一, 1990 : 窪穴住居の使い方。古墳時代の研究 2. 47-68 頁。
- 柴田稔・原秀三郎他, 1983 : 袋井市史 通史編。
- 寺村光晴, 1974 : 下総国の玉作遺跡。
- 戸塚和美・大熊茂広, 1992 : 赤沢遺跡・中川原古墳。
- 比田井克仁, 1991 : 住居形態の変遷とその画期。古代探叢 III. 275-302 頁。
- 藤田達也他, 1981 : 掛川市の植物。
- 松井一明, 1988 : 静岡県における閑郭集落と高地性集落について。マージナル, 8.51-61 頁。
- 松本正規・松井一明他, 1980 : 浜北市東原遺跡 (II)。
- 向坂鋼二他, 1997 : 掛川市史 上巻。
- 向坂鋼二他, 2000 : 掛川市史 資料編古代・中世。
- 村松弘規, 1999 : 嵐人古墳群・嵐人 II 遺跡。
- 八木勝行・磯部武雄他, 1980 : 日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書 I - 繩文・弥生時代編一。
- 吉岡伸夫・松井一明, 1987 : 静岡県愛野向山遺跡。日本考古学年報 38. 456-462 頁。
- 若林淳之他, 1992 : 掛川市史 下巻。
- 渡辺誠, 1970 : 繩文時代における埋甕風習。考古学ジャーナル, 40.9-17 頁。
- 磐田市教育委員会, 1989 : 句坂上 4 遺跡発掘調査報告 II。
- 静岡県, 1990 : 静岡県史 資料編 1 考古一。
- 静岡県, 1990 : 静岡県史 資料編 2 考古二。
- 静岡県, 1992 : 静岡県史 資料編 3 考古三。
- 静岡県, 1994 : 静岡県史 通史編 原始・古代。
- 静岡県教育委員会, 1989 : 静岡県文化財地図 II。
- 静岡県教育委員会, 1989 : 静岡県文化財地名表 II。
- 静岡県立掛川東高等学校, 1972 : 桔梗が丘 60 年。
- 浜松市博物館, 1989 : 都田地区発掘調査報告書 上巻 本文編。
- 浜松市博物館, 1990 : 都田地区発掘調査報告書 下巻 本文編。

佐藤洋一郎（静岡大学）
株式会社 ジェネティック

静岡県掛川市菖蒲ヶ谷遺跡出土の生物遺体に対する自然科学的分析を行った。同遺跡は掛川駅南西の丘陵上に位置する遺跡で標高は 65 から 75m、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡などからなる遺跡である。乾燥した立地にあるため動植物遺体の保存はよくないと思われたが、住居内の炉跡と思われる部分や焼土などの中から少量の種子が検出されたので、珪酸体、花粉、種子の検出および検出種子の DNA 分析を行った。本報告書はその結果について述べるものである。

I. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

2. 試料

分析試料は、弥生時代後期から古墳時代前期とされる堅穴住居跡（SB-18）から採取された計 3 点である。このうち、試料①は西側床面直上、試料②は西側床上 20cm、試料③は住居外西側地山直上より採取された。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1g に直径約 40μm のガラスピーブを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10 - 5g）をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。ススキ属（ススキ）の換算係数は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属（チシマザサ

節・チマキザサ節)は0.75である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、シバ属

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チマザサ節やチマキザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

住居跡の床面直上(試料1)では、キビ族型、ウシクサ族A、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。比較試料として採取された床上20cm(試料2)および住居外の地山直上(試料3)でも、おむね同様の結果であるが、これらの試料ではメダケ節型やブナ科(シイ属)が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

5. 考察

弥生時代後期から古墳時代前期とされる竪穴住居跡(SB18)が埋没された当時は、メダケ節やネザサ節などが生育するイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、住居跡の床面では敷物や屋根材の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

II. 菖蒲ヶ谷遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しないこともある。

2. 試料

試料は、植物珪酸体分析同様、菖蒲ヶ谷遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期とされる集落域より検出された竪穴住居跡(SB18)から採取された計3点である。

表1 静岡県、菖蒲ヶ谷遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料			豊穴住居跡 (SB-18)		
		1	2	3	1	2	3
イネ科	Gramineae (Grasses)						
キビ族型	Panicaceae type	6	21				
ススキ属型	Miscanthus type			7			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	31	7	7			
シバ属	Zoysia			7			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake		7	41			
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	25	49	97			
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	6					
未分類等	Others	31	56	55			
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin	6					
棒状珪酸体	Rod-shaped	75	85	41			
茎部起源	Stem origin			7			
未分類等	Others	233	225	248			
樹木起源	Arboreal						
ブナ科(シイ属)	Castanopsis		14	7			
その他	Others		14				
植物珪酸体総数	Total	415	479	517			

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）

ススキ属型	Miscanthus type	0.09
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.08
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.12
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	0.05

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	26	51
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	72	74
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	28	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa		

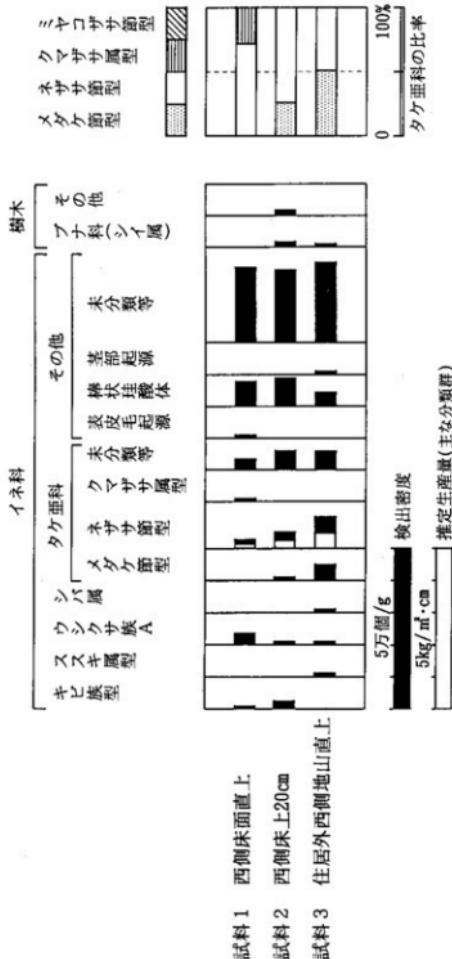
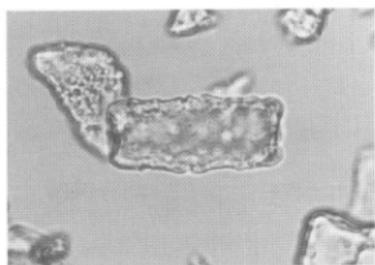
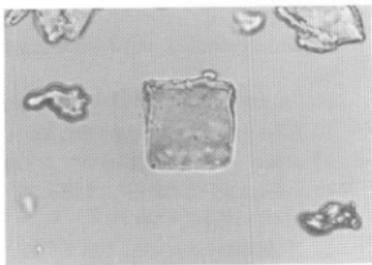


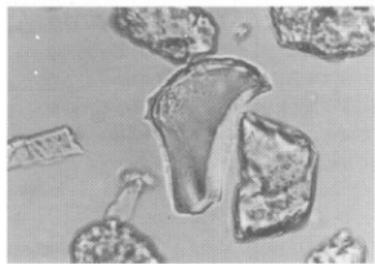
図1 高瀬ヶ谷邊跡、豊穴住跡(S日18)における植物組織分析結果



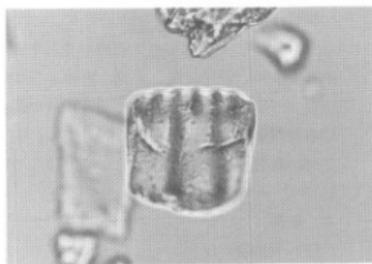
キビ族型 (試料 2)



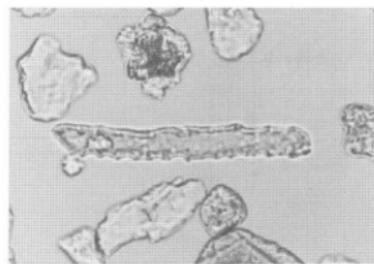
ウシクサ族 A (試料 1)



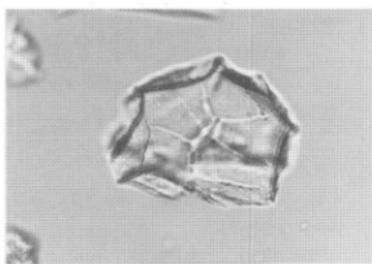
メダケ節型 (試料 3)



ネザサ節型 (試料 3)



棒状硅酸体 (試料 2)



ブナ科 (シイ属) (試料 2)

写真 1 植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。

- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てていう操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顯微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(–)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 11、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 4、シダ植物胞子 2 形態の計 18 である。これらの学名と和名および粒数を表 2 に示し、主要な分類群を写真 2 に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ヤマモモ属、ハンノキ属、カバノキ属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、グミ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

分析の結果、豎穴住居跡(SB18)の西側床面直上(試料①)、西側床上 20cm(試料②)の各試料からは花粉がほとんど検出されなかった。住居外西側地山直上(試料③)の堆積物からは、少量の花粉が検出され、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属などの樹木花粉が比較的多く検出される。イネ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、キク亜科の草本花粉が伴われる。

表2 菖蒲ヶ谷遺跡における花粉分析結果

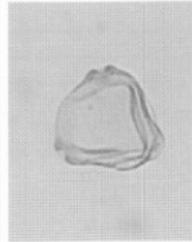
学名	分類群	和名	SB-18		
			試料①	試料②	試料③
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属		22		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	22	
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属			1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1	
<i>Betula</i>	カバノキ属			2	
<i>Castanopsis</i>	シイ属			1	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属		10		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanus</i>	コナラ属アカガシ亞属		1		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1		
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1	
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科			2	
<i>Arboreal + Nonarboreal pollen</i>	樹木・草本花粉				
<i>Leguminosae</i>	マメ科			1	
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉				
<i>Gramineae</i>	イネ科		4		
<i>Lactucoideae</i>	タンポポ亞科			1	
<i>Asteroideae</i>	キク亞科			1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		4		
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子				
<i>Monocolpate spore</i>	単条溝胞子		1	7	
<i>Trilete type spore</i>	三条溝胞子			11	
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉		0	3	62
<i>Arboreal + Nonarboreal pollen</i>	樹木・草本花粉		0	0	1
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉		0	0	10
Total pollen	花粉總数		0	3	73
Unknown pollen	未同定花粉		0	0	5
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子		1	0	18
<i>Helminth eggs</i>	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	



1 マツ属複維管束亞属



2 スギ



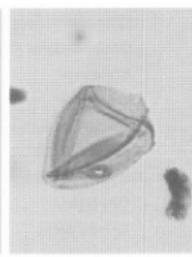
3 カバノキ属



4 コナラ属コナラ亜属 5 ツツジ科



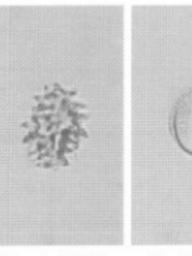
6 グミ属



7 イネ科



8 タンポポ亜科



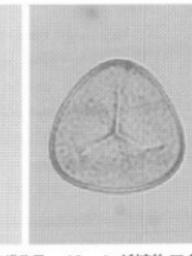
9 キク亜科



10 ヨモギ属



11 シダ植物单条溝孢子



12 シダ植物三条溝孢子

写真2 菖蒲ヶ谷遺跡の花粉・孢子遺体

5. 花粉分析から推定される植生と環境

堅穴住居跡（SB18）の西側床面直上、西側床上 20cm の各試料からは花粉がほとんど検出されないことから、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったことが推定される。住居外西側地山直上の堆積物は花粉の出現数は少ないが、マツ属複維管束亞属、スギ、コナラ属コナラ亞属などの樹木花粉が比較的多く検出された。地域的な森林として、マツ属複維管束亞属、スギなどの針葉樹林、コナラ属コナラ亞属を主とする落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。ニヨウマツ類やナラ類は乾燥地ややせた土壤の地域の極相林か二次林であるが、ここでは二次林とみなされる。また、スギは造林の可能性が示唆される。堆積地周辺はイネ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、キク亜科の人里雑草の性格を持つ草本が生育し、これらの草本の分布から陽当たりのよい乾燥した人為環境が分布していたと推定される。

III. 種子同定および DNA 分析

1. はじめに

本遺跡からはいくつかの植物種子が出土した。ここではその種子について、種を判定し、イネについては DNA 分析による品種の同定結果について述べる。

2. 調査の方法

同遺跡の異なる遺構から、表 3 に示す土壤サンプルと炭化物を合わせて 17 点を得た。これらを水で洗浄し、1.0mm および 0.5mm メッシュのふるいにかけ動植物の遺存体と思われる遺物を検出した。これらについてはすべて写真撮影を行った。また種子のうちイネ種子と思われる 4 点については DNA 分析によってその品種群を推定した。

(1) DNA 分析の方法

DNA 分析では米（イネ種子）なら 1 粒の単位で DNA を抽出して品種を特定することが可能である。また DNA は遺伝子の本体とされる物質で、その解析によって得られた結果は他の分析法での結果に比べてよりダイレクトである。とくにイネの場合、品種群の判別にもみの形や大きさが用いられることが多いが、それによる判定の信頼度は 60 % をわずかに超える程度に過ぎない。その意味では、可能である限り DNA の分析に頼るのがよいと思われる。

今回分析に用いた 4 点のサンプルのそれぞれから DNA を抽出した。遺物に含まれる DNA は極微量なため 1 回の PCR 増幅ではバンドは現れない。そこで 1 回目の PCR 産物をさらに PCR 増幅させる 2 段階 PCR を行った。この抽出の方法は SDS 法を植物の遺存用に改変したものである。DNA 抽出法の詳細は、別に参考書等で参照されたい。

抽出された DNA は、温帯 *japonica* か熱帯 *japonica* かを判別するプライマー、CMN-B20 および CMN-B22 を用い、それぞれに対応する DNA の領域を増幅させた。図 2・3 はその結果であり、上段が CMN-B20 による結果を、下段が CMN-B22 による結果を示している。なお CMN-B20 は温帯 *japonica* に固有の DNA 断片を増幅するプライマー、CMN-B22 は熱帯 *japonica* に固有の DNA 断片を増幅するプライマーである。

3. 結果

(1) 概観

16 サンプルの土壤水洗の結果、表 3 に示す 8 点の植物遺体を検出した。これらの多くは種子と思われるが、その種名については 4 点がイネと思われる以外なお検討中である。参考までにこれら 8 点の種子の写真を写真 3 に示す。

(2) DNA 分析

検出した種子のうち、イネのものと思われる 4 点については DNA 分析を行った。従来の分析結果から、弥生時代後期から古墳時代のイネは *japonica* に属するものが圧倒的に多く、*indica* に属すると思われるものが検出されたケースはない。そこで今回もそれにならい、*japonica* のなかの温帯 *japonica* に属するものか、それとも熱帯 *japonica* に属するものかを中心検討した。

図 2 に、温帯 *japonica* を検出すためのプライマー、CMN-B20 による PCR 増幅-電気泳動の結果を示す。図中右方に典型的な温帯 *japonica* である J1 (北海道在来品種) および OKA563 (産地不明)、ならびに典型的な熱帯 *japonica* である LL8C (ラオス) および LL9K (ラオス) の PCR 增幅-電気泳動の結果を対照として示してある。これら対照品種の電気泳動像から明らかなように、温帯 *japonica* には矢印の位置にバンドが見られるが、熱帯 *japonica* にはそれがない。菖蒲ヶ谷遺跡出土イネ種子では、試料 3 に当該バンドがみられ、この種子が温帯 *japonica* の性質をもっていることがわかった。

図 3 に、熱帯 *japonica* を検出すためのプライマー、CMN-B22 による PCR 増幅-電気泳動の結果を示す。図 2 と同様、これら対照品種の電気泳動像から明らかなように、熱帯 *japonica* には矢印の位置にバンドが見られるが、温帯 *japonica* にはそれがない。菖蒲ヶ谷遺跡出土イネ種子では、試料 2 に当該バンドがみられ、この種子が熱帯 *japonica* の性質をもっていることがわかった。

このように本遺跡から出土した 4 粒のイネ種子のうち 2 粒から DNA が増幅され、その 1 粒は温帯 *japonica*、もう 1 粒は熱帯 *japonica* であることがわかった。

4. 考察

菖蒲ヶ谷遺跡からは熱帯 *japonica* と温帯 *japonica* の双方が出土したが、これは弥生時代から古墳時代にかけての遺跡ではごく一般のことである (佐藤、2000 など)。その意味では本遺跡は特別変わった遺跡ではない。

同遺跡は丘陵の上にある集落遺跡であり、瘦せ尾根の上に集落が立地した理由などは不明であるが、水田などの生産域を間近に控えていたとは考えにくい。前述の花粉分析によても住居跡から採取した土壤中からは乾燥を好む植物のプラントオバールや花粉が検出され、遺跡とその周囲が乾燥した環境にあったことがうかがわれる。よって出土したイネは他所より運ばれてきたものである可能性が高い。

来歴を異にすると思われる 2 つの *japonica* が同所的に見られることには 2 つの理由が考えられる。とくに熱帯 *japonica* は今では焼畑のような環境で栽培されることが多く、そのため古代以前の日本列島でも、温帯 *japonica* が低地の水田、また熱帯 *japonica* が高地の焼畑で異所的に栽培されたという見解もある。本遺跡の 2 つの *japonica* 種子は同じ住居跡から出土しており、本遺跡のイネが他所からも持ち込みであったとするなら、当時のひとびとが 2 つの *japonica* を区別することなく運んできたことになる。2 つの *japonica* は区別なく栽培、消費されていたのであろう。

本稿の作成にあたり多くのかたがたにご指導・ご協力を賜りました。特に種子同定につきましては北海道大学埋蔵文化財調査室の樋坂恭代非常勤講師にご指導いただきました。ここに深くお礼を申し上げ

ます。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究、38（2）、p.109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学研究館収蔵目録第5集、60p.
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.
- 佐藤洋一郎（2000）森と田んぼの危機、朝日選書、朝日新聞社、227p.
- 佐藤洋一郎（1999）古代米の遺伝的特性（1）－2つの*japonica*の混在－日本文化財科学会第16回大会研究要旨集、P8-9.
- 佐藤洋一郎（1999）DNA 考古学、東洋書店、201p.

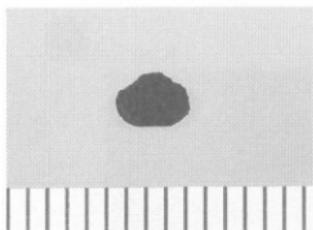
表3 サンプルリスト

サンプル番号	遺構	内容	イネ	その他種子
1	S B04	炉	-	-
2	S B04	焼土2	-	a, b-マメ科 c-不明
3	S B04	台付甕(42)内の土	-	-
4	S B04	壺(40)内の土	-	-
5	S B04	壺(39)内の土	-	-
6	S B05A	焼土	試料1, 試料2	-
7	S B05A	炉(粘土と地山の間)	試料3	d-マメ科
8	S B05B	炭化物		
9	S B05B	焼土	-	-
10	S B05B	炉	-	-
11	S B05B	壺(52)内の土	試料4	-
12	S B05B	台付甕(67)内の土	-	-
13	S B08	炉1	-	-
14	S B08	炉2	-	-
15	S B18	壺(107)内の土	-	-
16	S B16	鉢(138)内の土	-	-
17	S B20	炉	-	-

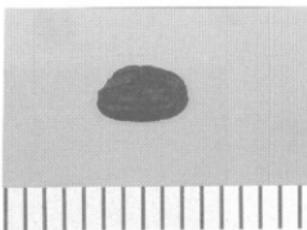
a 形態と子葉の断面からアズキ、またはその近縁種と思われる。野生種のヤブツルアズキよりやや大きい(幅3.2mm、長さ5.6mm)。なお、表面は横にひび割れている。

b 同様に断面の初生葉痕の形態よりアズキ、またはその近縁種と思われる(幅3.2mm、長さ5.2mm)。方形に近く、初生葉はみられないが、痕あり。

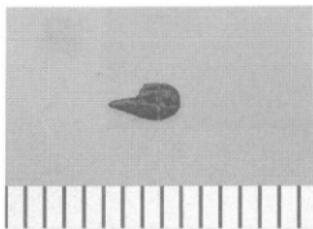
d 同様に断面からアズキ、またはその近縁種と思われる(幅3.6mm、長さ5.1mm)。



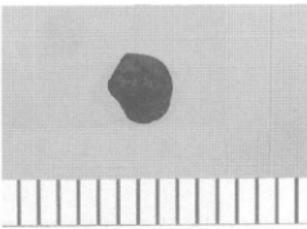
1 イネ 試料 1



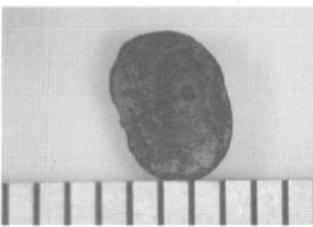
2 イネ 試料 2



3 イネ 試料 3



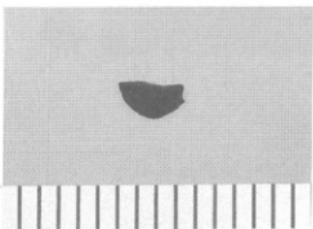
4 イネ 試料 4



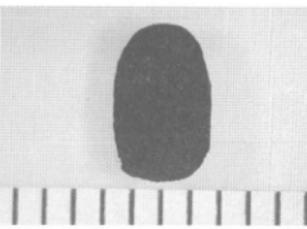
5 マメ科 種子 a



6 マメ科 種子 a



7 不明種子 c



8 マメ科 種子 d

写真3 種子(スケール1目盛が1mm)

図2

B-20

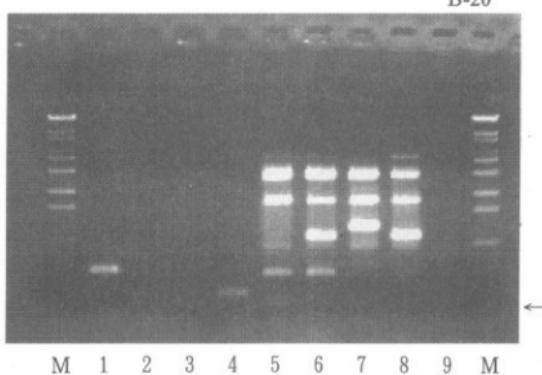
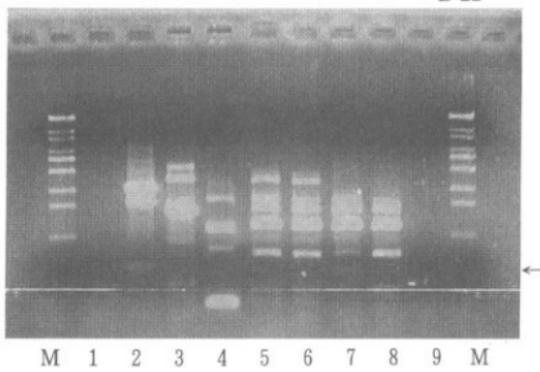


図3

B-22



M : マーカ
5 : J 1
7 : LL8C
9 : N. C.
1 ~ 4 : サンプル 1 ~ 4
6 : OKA563
8 : LN9K

写真図版



遺跡遠景（北より）



遺跡遠景（東より）

図版 2



遺跡周辺地形（平成元年撮影写真に調査区を合成・上が北）



調査前風景（A区北端より）



調査前風景（E区北端より）

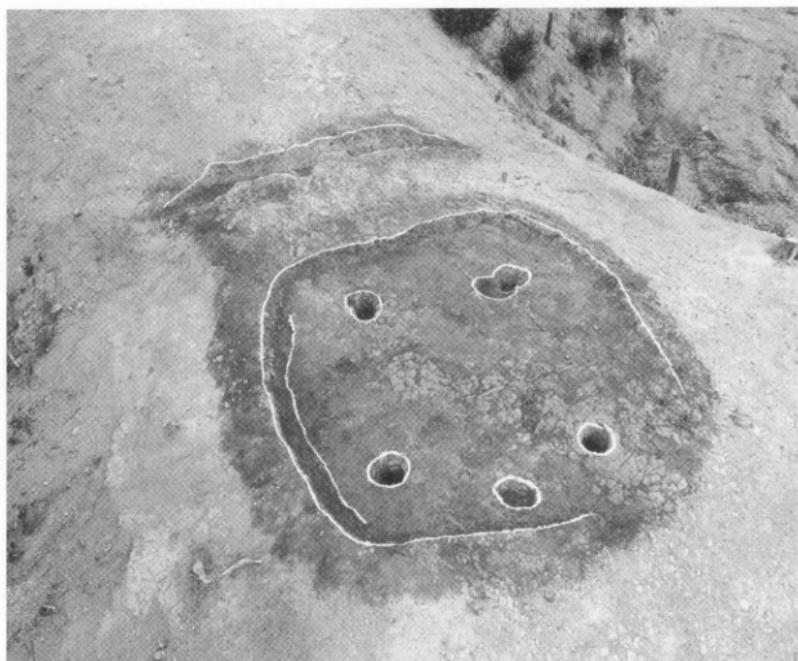
図版 4



A + B区垂直写真（上が北）



A区北空中写真（南東より）



SB01・SD01完掘状況（南西より）



SD01遺物出土状況

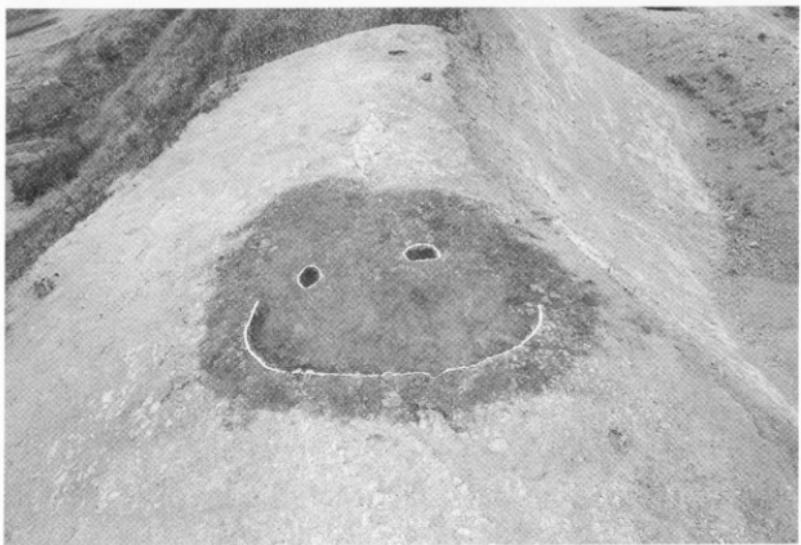


SB22完掘状況（西より）

図版 6



A区南・B区空中写真（西より）



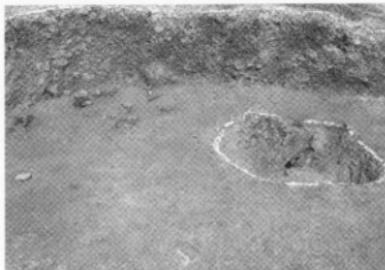
SB02完掘状況（東より）



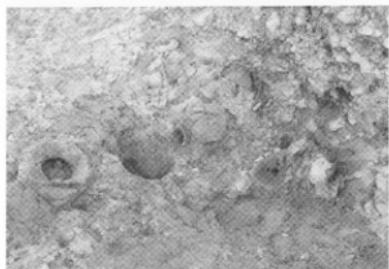
SB03・SD02完掘状況（北東より）



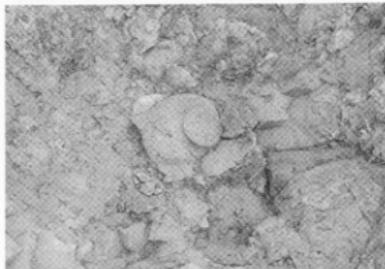
SB03遺物出土状況1



SB03遺物出土状況2



SB03遺物出土状況3



SB03遺物出土状況4

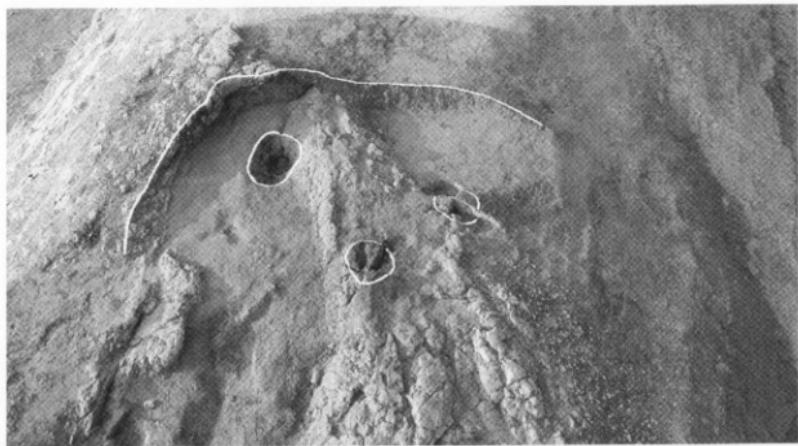
図版 8



C区垂直写真（左が北）



C区空中写真（西より）



SB04完掘状況（南より）



SB04遺物出土状況1



SB04遺物出土状況2（東より）

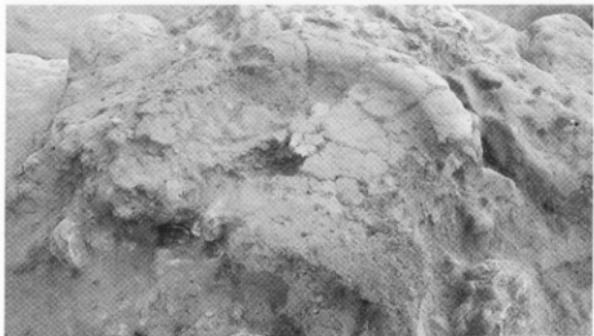


SB04遺物出土状況2（断面、西より）

図版 10



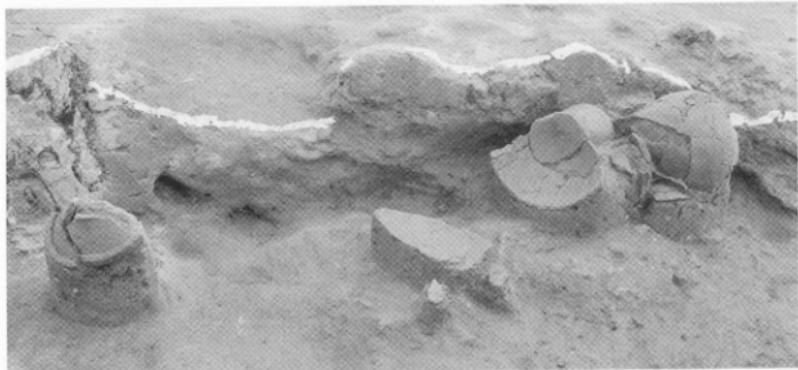
SB05 A・B 完掘状況（南東より）



SB05A粘土炉
(北より)



SB05A
遺物出土状況



SB05B 遺物出土状況1



SB05B 遺物出土状況2



SB05B 遺物出土状況3



SB05B 遺物出土状況4

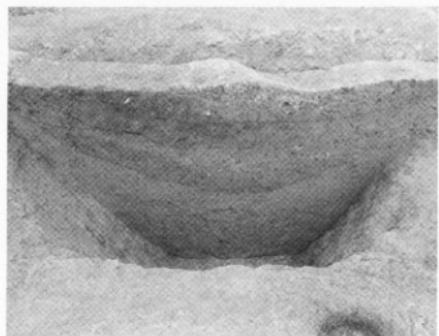
図版 12



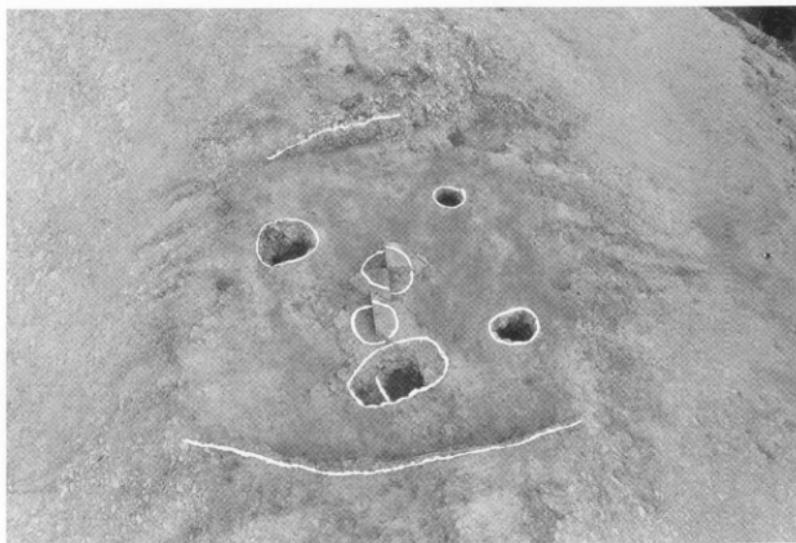
SB07・SX10完掘状況（北西より）



SB07遺物出土状況



SX01土層断面（南西より）



SB08完掘状況（南西より）



SB08遺物出土状況

図版 14



E区北垂直写真（上が北東）



E区北空中写真（南東より）



SB09完掘状況（北東より）



SB10 A・B 完掘状況（南西より）

図版 16



SB11完掘状況（南西より）



SB12完掘状況（北西より）



SB19完掘状況（北より）



SB19遺物出土状況1



SB19遺物出土状況2

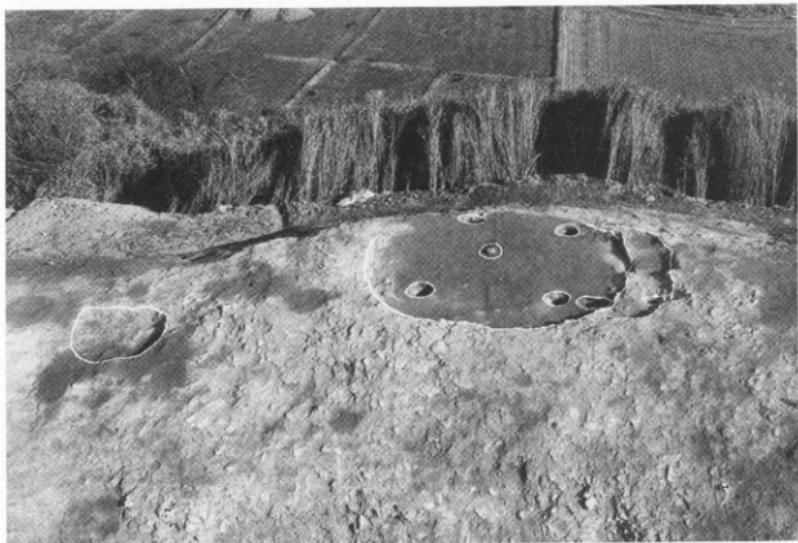
図版 18



E区南垂直写真（上が北東）



E区南空中写真（北西より）



SB13 A・B・SX02完掘状況（北西より）



SX02遺物出土状況（北より）

図版 20



SB14発掘状況（北より）



SB14遺物出土状況

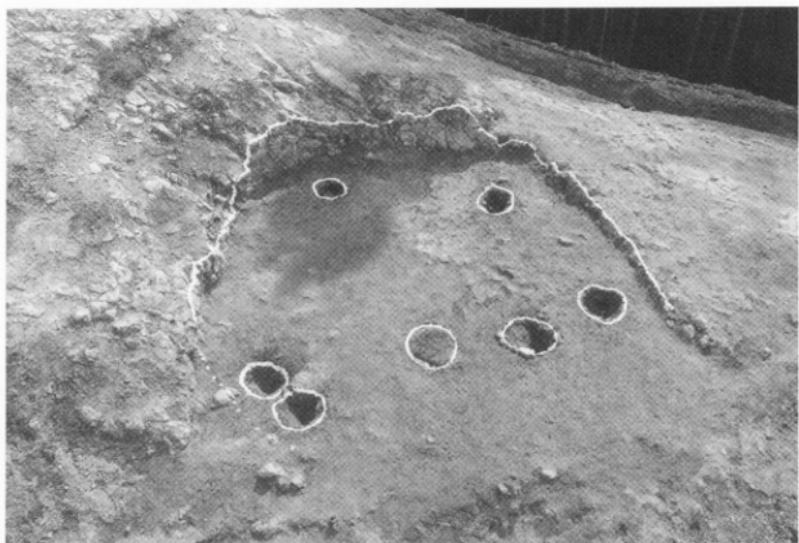


SB18完掘状況（北より）



SB18遺物出土状況

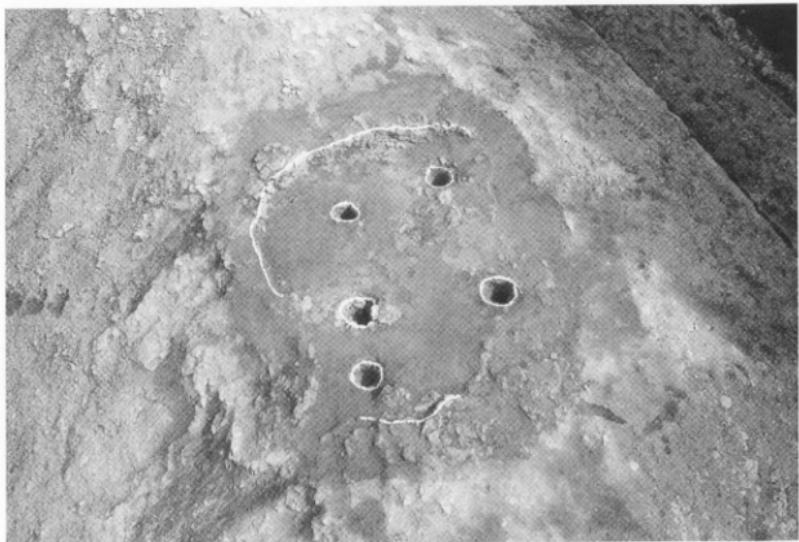
図版 22



SB15完掘状況（北東より）



SB15遺物出土状況

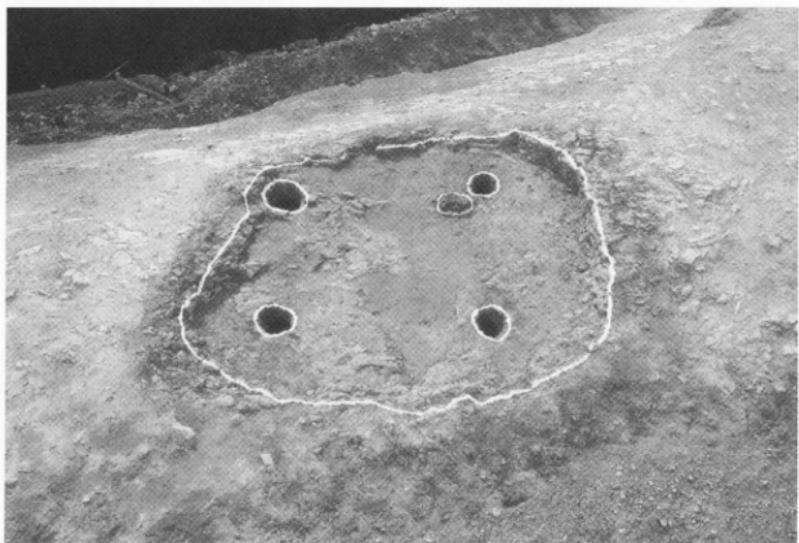


SB16完掘状況（西より）



SB16遺物出土状況

図版 24



SB17完掘状況（北東より）



SB17遺物出土状況



G・H・I区垂直写真（左が北）



G・H・I区空中写真（南より）

図版 26



SB20完掘状況（南西より）



SB21完掘状況（南西より）



SB23完掘状況（南西より）



SB20粘土炉（北東より）



SB20粘土炉断面（東より）



SB20遺物出土状況



SB21焼土断面（西より）

図版 28



山ノ口3号墳完掘状況（南より）



3号墳主体部断面（東より）



3号墳主体部遺物出土状況



3号墳主体部完掘状況（南東より）



山ノ口4号墳完掘状況（北より）

図版 30



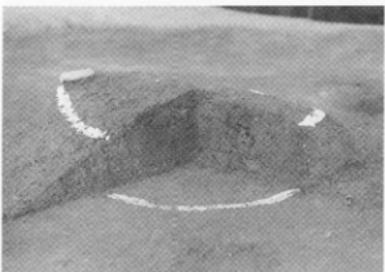
21R焼土検出状況（北西より）



遺物出土状況1



遺物出土状況2



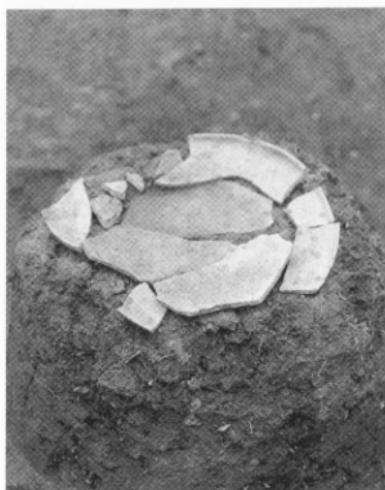
焼土北断面（南より）



焼土南断面（北より）



16F焼土検出状況（西より）



C区北須恵器出土状況



SF01完掘状況（北より）



遺構出土土器（SB03）



遺構出土土器（SB05B）



3



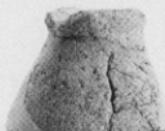
4



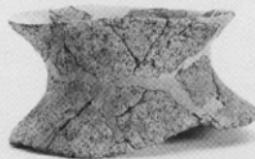
5



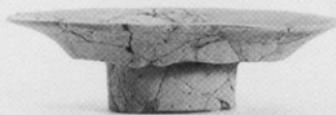
6



10



12



15



13



25

図版 34



18



26



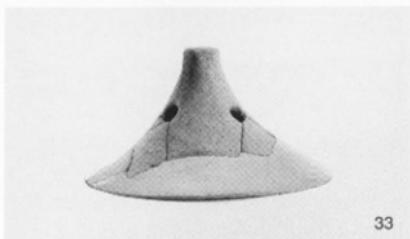
29



31



32



33



34



35



36



37



42



39



43



40



42・43



44



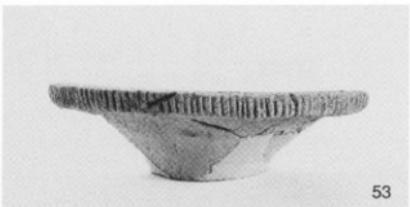
46



47



52



53



69



65



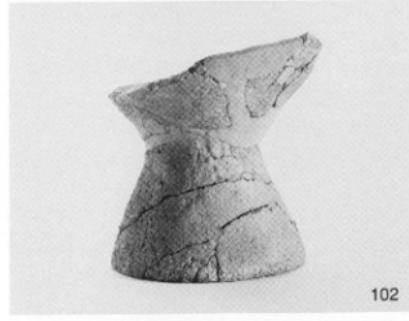
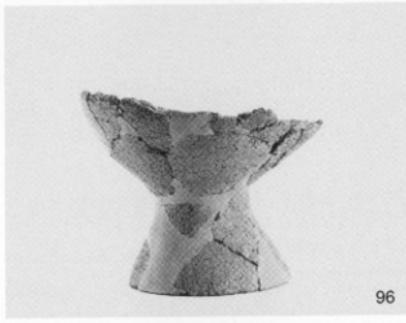
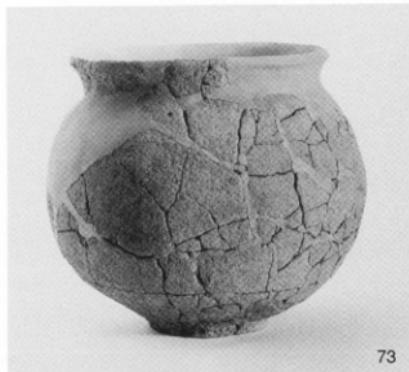
66



67



68



図版 38





45



48



54



55



59



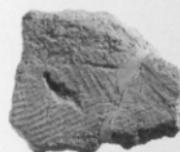
58-3



58-1



58-2



86



90



92



99

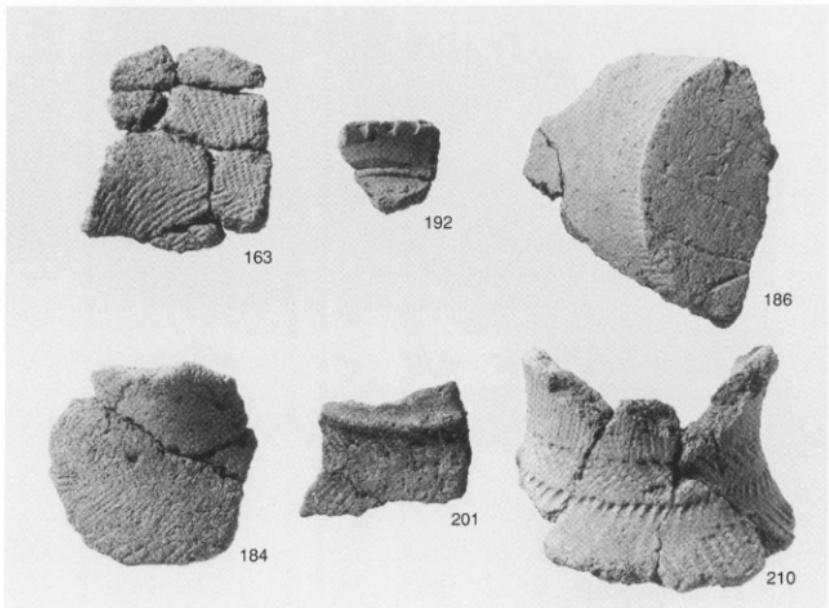
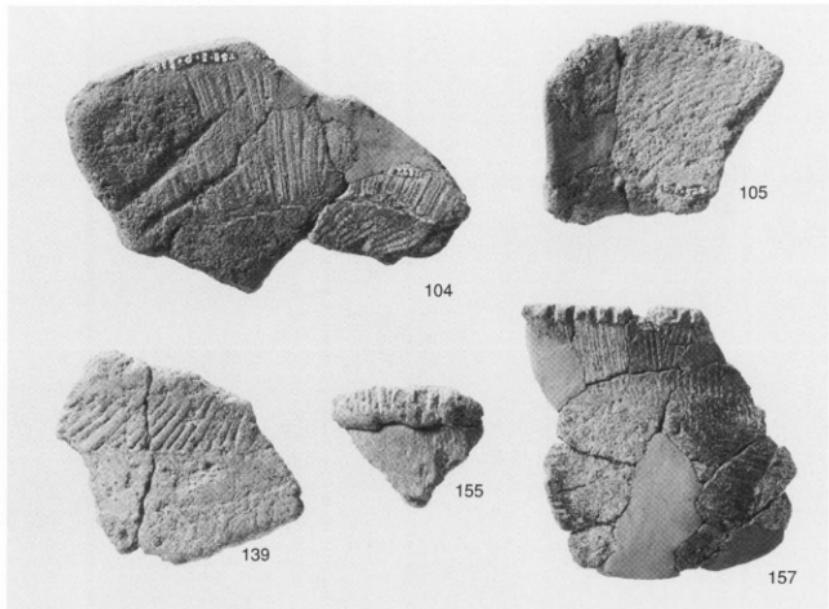


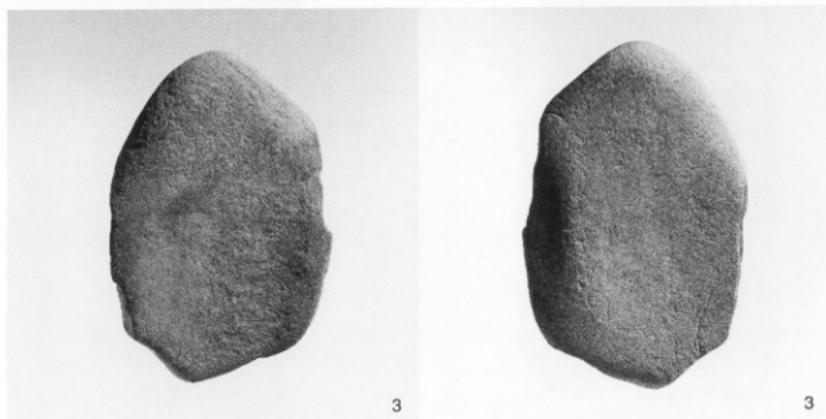
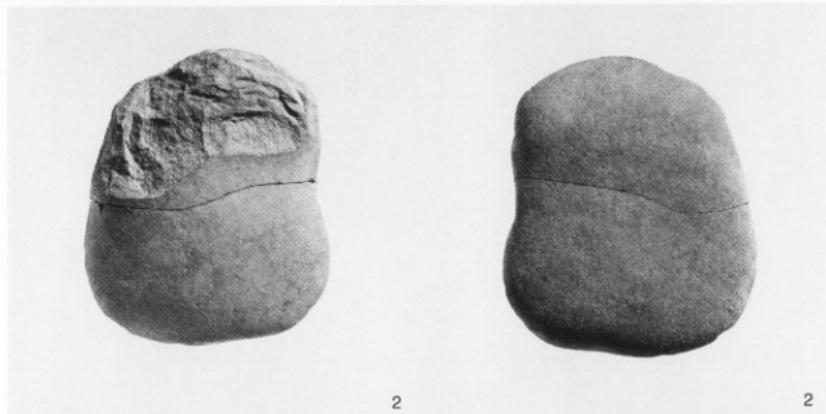
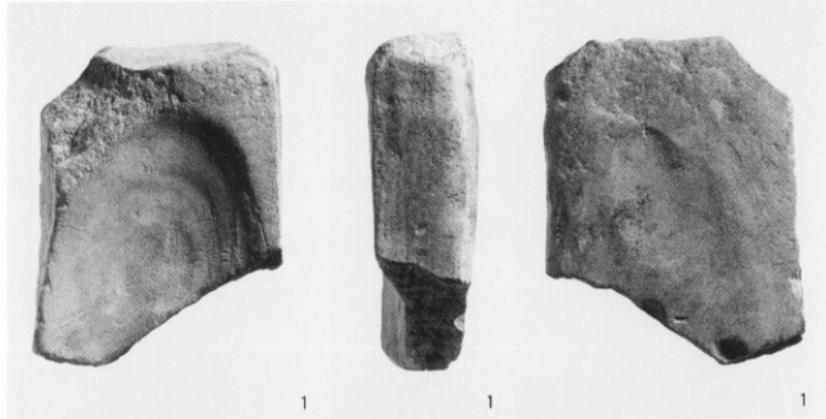
108



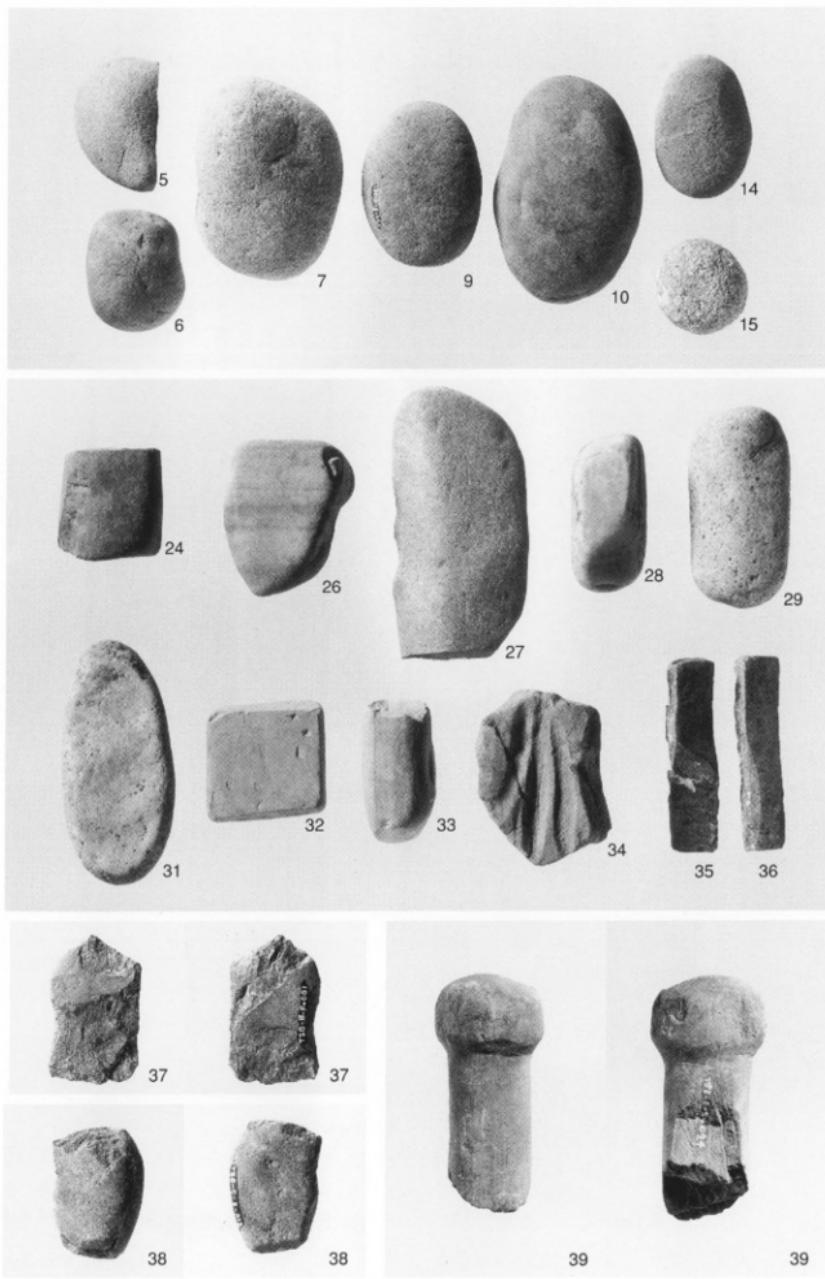
108

図版 40





図版 42





1



2



3



3



1



2



3



4



7



12

報告書抄録

ふりがな	しょうぶがやいせき・やまのくちこふんぐん							
書名	菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群							
副書名	平成9・11・12年度掛川東高等学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書							
シリーズ番号	第124集							
編著者名	藏本俊明 佐藤洋一郎 (株)ジェネティック							
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261							
発行年月日	2001年3月31日							
所持遺跡名	所持遺跡名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
菖蒲ヶ谷遺跡 山ノ口古墳群	静岡県掛川市久保254-2他	22213		34度45分23秒	138度00分32秒	19990401～20000331	8,422m ²	掛川東高等学校移転整備事業
所持遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
菖蒲ヶ谷遺跡	集落	弥生～古墳	整穴住居(26軒) 土坑・ピット	土師器・石器・鉄製品				
		奈良 不明	焼土 焼壁土坑	須恵器				
山ノ口古墳群	古墳	古墳	古墳(2基)	刀子		木棺直葬		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第124集

菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群

平成9・11・12年度 摩川東墓等学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月31日発行

編集
発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

TEL(054) 262-4261

印刷所 株式会社 篠原印刷所
〒422-8033 静岡市登呂6丁目7番5号
TEL(054) 286-5141
FAX(054) 286-6261